

秋田県文化財調査報告書第510集

町村Ⅱ遺跡

— 地方道路等整備事業(建設)主要地方道秋田八郎潟線(町村工区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2018・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂(しろざか)遺跡出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

秋田県文化財調査報告書第510集

まち むら
町 村 II 遺 跡

— 地方道路等整備事業(建設)主要地方道秋田八郎潟線(町村工区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2018・3

秋 田 県 教 育 委 員 会

序

本県には、これまでに発見された約5,000か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財の保存・継承と積極的活用は、地域社会の歴史や文化に親しみ、理解を深め、ふるさとを愛する人づくりにつながります。

一方、住民の生活や経済活動、地域間の交流等を支える交通網の整備、とりわけ道路ネットワークの整備は、本県にとっての重要な課題の一つです。本教育委員会では、これらの地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

このたび、五城目町町村地区において、安全で円滑な交通を確保することを目的として、主要地方道秋田八郎潟線の整備が行われました。

本報告書は、これに先立って、平成28年度に実施した町村Ⅱ遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代の陥し穴状遺構や中世以降のカマド状遺構などがみつかかり、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助になることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田地域振興局建設部、五城目町教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成30年3月

秋田県教育委員会

教育長 米 田 進

例 言

1 本報告書は、地方道路等整備事業（建設）主要地方道秋田八郎潟線（町村工区）に係り、平成28年度に調査した五城目町所在の町村Ⅱ遺跡発掘調査報告書である。調査内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報等によって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

2 調査要項

遺 跡 名 町村Ⅱ遺跡

遺 跡 略 号 4 MMⅡ

遺 跡 所 在 地 秋田県南秋田郡五城目町馬場目字町村134外

調 査 期 間 平成28年10月11日～11月28日

調 査 面 積 1,300m²

調 査 主 体 者 秋田県教育委員会

調 査 担 当 者 村上義直（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 副主幹）

山村 剛（秋田県埋蔵文化財センター調査班 学芸主事）

利部 修（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 文化財主査）

巴 亜子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 文化財主事）

乙戸 崇（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事）

整 理 担 当 者 山村 剛（秋田県埋蔵文化財センター調査班 学芸主事）平成28年度

利部 修（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 文化財主査）平成29年度

乙戸 崇（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 文化財主事）平成28・29年度

総 務 担 当 者 鈴木菜穂子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 主査）平成28・29年度

調 査 協 力 機 関 秋田県秋田地域振興局建設部 五城目町教育委員会

3 第3図は国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図『五城目』、第4図は秋田県秋田地域振興局建設部提供の1/500工事用図面をもとに作成した。

4 遺跡の層序と遺物の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』2005年度版に拠った。

5 発掘調査及び整理作業における以下の作業は、下記の業者に委託した。

水準測量・方眼杭設置業務委託：株式会社さくら技研 空中写真撮影：みどり光学社

石器の実測：株式会社ラング・株式会社アルカ

6 理化学的分析は下記の業者に委託した。なお、本書ではその分析結果報告を第4章に掲載した。

放射性炭素年代測定・樹種同定・黒曜石産地同定：株式会社パレオ・ラボ

7 本書の執筆は、第3章の縄文土器・カマド状遺構及び竪穴状遺構の記述を利部が担当し、第4章を除くそれ以外と編集は乙戸が行った。

凡 例

1 遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に連番とした。これらの中には、精査及び整理作業の過程で欠番としたものもある。遺構に用いた略記号は下記の通りである。

SA 柱穴列 SB 掘立柱建物跡 SR 土器埋設遺構 SK 土坑
SKT 陥し穴状遺構 SKP 柱穴様ピット SO カマド状遺構 SV 竪穴状遺構

2 遺構配置区割図中にある明朝体の数字は、柱穴様ピットの遺構番号を表す。

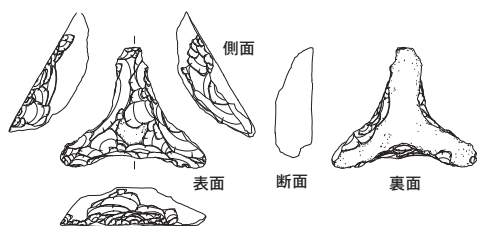
3 土層番号に用いた数字は、ローマ数字を基本層序、アラビア数字を遺構の層位に使用した。

4 遺構の縮尺は、1/40とし、土器埋設遺構が1/20である。

5 遺物の縮尺は、剥片石器・石核・磨製石斧を1/2、礫石器を1/3とした。

6 縄文土器の図は、右断面表記とし中軸線より右に内面、左に外面を表現してある。必要に応じて拓本を付加した。中軸線は実線を用い、反転した復元図は破線にした。破片は、断面の左側に外面の拓本を配置した。断面図の剥落した部分は細線で示した。

7 石器の図は、側面図を挟んで左に表面図、右に裏面図、表面下側に断面図を配置し、必要に応じて側面図を付した。ただし、三脚石器は表面図と裏面図の間に断面図を配置し、各挟り部分は側面図で表現した。



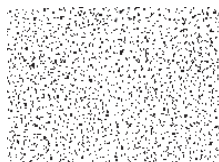
8 図版遺物に付した表記、例えば 26-1 は 第26図-1 の挿図番号を示す。

9 土層註記に表記した「K」は攪乱土であることを示す。

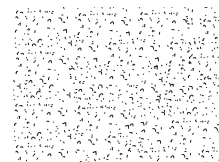
10 石器に用いた網掛けや点描は、以下の内容を意味する。



磨り面



敲き面



自然面

目次

序	
例言	ii
凡例	iii
目次	iv
挿図目次	v
表目次	vi
図版目次	vi
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の方法と成果	11
第1節 調査の方法	11
1 発掘調査	11
2 整理作業	11
第2節 基本層序	13
第3節 検出遺構と遺物	15
1 縄文時代	15
(1) 掘立柱建物跡	15
(2) 柱列跡	15
(3) 土器埋設遺構	21
(4) 陥し穴状遺構	25
(5) 土坑	25
(6) 柱穴様ピット	28
(7) 遺構外出土遺物	32
①土器	32
②土製品	33
③石器	49
2 中世以降	67
(1) カマド状遺構と窪地	67
(2) カマド状遺構	67

(3) 竪穴状遺構	69
3 時期不明	74
柱穴様ピット	74
第4章 理化学的分析	77
第1節 放射性炭素年代測定	77
第2節 黒曜石産地同定	80
第5章 総括	83
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	5	第26図 遺構外出土縄文土器(8)	46
第2図 遺跡周辺の地形区分図	6	第27図 遺構外出土縄文土器(9)・土製品	47
第3図 町村Ⅱ遺跡と周辺遺跡位置図	7	第28図 遺構外出土縄文土器(10)	48
第4図 調査区と工事計画図	12	第29図 遺構外出土石器(1)	53
第5図 基本層序	14	第30図 遺構外出土石器(2)	54
第6図 グリッド配置と全遺構配置図	16	第31図 遺構外出土石器(3)	55
第7図 遺構配置図部分(1)	17	第32図 遺構外出土石器(4)	56
第8図 遺構配置図部分(2)	18	第33図 遺構外出土石器(5)	57
第9図 遺構配置図部分(3)	19	第34図 遺構外出土石器(6)	58
第10図 遺構配置図部分(4)	20	第35図 遺構外出土石器(7)	59
第11図 掘立柱建物跡 S B 23・24	22	第36図 遺構外出土石器(8)	60
第12図 柱列跡(1) S A 29・30	23	第37図 遺構外出土石器(9)	61
第13図 柱列跡(2) S A 31・33	24	第38図 遺構外出土石器(10)	62
第14図 土器埋設遺構と陥し穴状遺構(1) S R 08 S K T 05	26	第39図 遺構外出土石器(11)	63
第15図 陥し穴状遺構(2) S K T 09・12	27	第40図 遺構外出土石器(12)	64
第16図 土坑 S K 17・20・21・25	29	第41図 遺構外出土石器(13)	65
第17図 遺構内出土縄文土器	30	第42図 遺構外出土石器(14)	66
第18図 遺構内出土石器 S K 20・21 S K P 106 ・123	31	第43図 カマド状遺構と窪み地形	70
第19図 遺構外出土縄文土器(1)	39	第44図 カマド状遺構(1) S O 01・02	71
第20図 遺構外出土縄文土器(2)	40	第45図 カマド状遺構(2) S O 04・14	72
第21図 遺構外出土縄文土器(3)	41	第46図 カマド状遺構(3) S O 03・11・13・ 35・36	73
第22図 遺構外出土縄文土器(4)	42	第47図 暦年較正結果	79
第23図 遺構外出土縄文土器(5)	43	第48図 黒曜石産地分布図(東日本)	80
第24図 遺構外出土縄文土器(6)	44	第49図 黒曜石産地推定判別図(1)	82
第25図 遺構外出土縄文土器(7)	45	第50図 黒曜石産地推定判別図(2)	82

表 目 次

第1表	町村Ⅱ遺跡周辺の遺跡一覧	8	第11表	柱穴様ピット観察表（時期不明）（2）	75
第2表	柱穴様ピット観察表（縄文時代）	30	第12表	柱穴様ピット観察表（時期不明）（3）	76
第3表	遺構外出土縄文土器観察表（1）	34	第13表	測定試料及び処理	77
第4表	遺構外出土縄文土器観察表（2）	35	第14表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	78
第5表	遺構外出土縄文土器観察表（3）	36	第15表	分析対象	80
第6表	遺構外出土縄文土器観察表（4）	37	第16表	東日本黒曜石産地の判別群	81
第7表	遺構外出土縄文土器観察表（5）土製品 観察表	38	第17表	測定値及び産地推定の結果	81
第8表	遺構外出土石器観察表（1）	51			
第9表	遺構外出土石器観察表（2）	52			
第10表	柱穴様ピット観察表（時期不明）（1）	74			

図 版 目 次

図版1	遺跡遠景	85	図版17	S O04断面・完掘、S O11確認状況	101
図版2	表土除去後	86	図版18	S O11断面・完掘、S O13確認状況	102
図版3	調査風景	87	図版19	S O13断面、S O14確認状況・断面	103
図版4	基本土層	88	図版20	調査終了状況	104
図版5	S B23完掘 S R08	89	図版21	遺構内出土縄文土器	105
図版6	S K T05	90	図版22	遺構外出土縄文土器1・2	106
図版7	S K T09	91	図版23	遺構外出土縄文土器3・4	107
図版8	S K T12	92	図版24	遺構外出土縄文土器5・6	108
図版9	陥し穴状遺構全景、S K17断面・完掘	93	図版25	遺構外出土縄文土器7・8	109
図版10	S K20断面・完掘、S K21断面	94	図版26	遺構外出土縄文土器9・10	110
図版11	S K21完掘、S K25断面、縄文時代遺 物集中区	95	図版27	遺構外出土縄文土器11・12	111
図版12	遺物出土状況	96	図版28	遺構外出土縄文土器13・14	112
図版13	窪地1、カマド状遺構全景	97	図版29	遺構外出土縄文土器15・16	113
図版14	S O01断面・完掘、S O02確認状況	98	図版30	遺構外出土縄文土器17・18	114
図版15	S O02断面・完掘、S O03確認状況	99	図版31	遺構外出土縄文土器19・20	115
図版16	S O03断面・完掘、S O04確認状況	100	図版32	遺構外出土縄文土器21・22	116
			図版33	遺構外出土縄文土器23・24	117
			図版34	遺構外出土縄文土器25・26	118

図版35	遺構外出土縄文土器27・28	119	図版43	遺構外出土石器5	127
図版36	遺構外出土縄文土器29・30	120	図版44	遺構外出土石器6	128
図版37	遺構外出土縄文土器31・32	121	図版45	遺構内出土石器S K 20・21、S K P 106 ・123 遺構外出土石器7	129
図版38	遺構外出土縄文土器33・遺構外出土土 製品1	122	図版46	遺構外出土石器8・9	130
図版39	遺構外出土石器1	123	図版47	遺構外出土石器10・11	131
図版40	遺構外出土石器2	124	図版48	遺構外出土石器12	132
図版41	遺構外出土石器3	125	図版49	遺構外出土石器13	133
図版42	遺構外出土石器4	126			

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

主要地方道秋田八郎潟線は、秋田市手形を起点とし、南秋田郡八郎潟町夜叉袋を終点とする総延長49.776kmの県道であり、地域の生産活動と県民生活に必要な情報と資源の交流を促進することを目的として計画整備されている。

平成27年、地方道路等整備事業（建設）主要地方道秋田八郎潟線（町村工区）の事業主体である秋田県秋田地域振興局建設部が、秋田県教育委員会に対し、道路建設予定地の埋蔵文化財分布調査を依頼した。このため、県生涯学習課文化財保護室は、同年5月14・15日、11月12・13日に工事予定地のうち南秋田郡五城目町町村工区において、遺跡詳細分布調査を実施し、縄文時代の町村Ⅱ遺跡と町村Ⅲ遺跡を新たに発見した。

平成28年6月11日～7月14日には県埋蔵文化財センターが町村Ⅱ遺跡、町村Ⅲ遺跡について、工事に係る範囲の確認調査を実施した。その結果、町村Ⅱ遺跡は、確認調査対象面積1,700㎡のうち1,300㎡について本発掘調査の必要があり、町村Ⅲ遺跡については本発掘調査の必要がないと判断した。

県埋蔵文化財センターは、平成28年10月11日～11月28日に町村Ⅱ遺跡の本発掘調査を実施した。

第2節 発掘調査の経過

調査経過の概要は以下の通りである。

【第1週】10月11日（火）～10月14日（金）

発掘調査区内の環境整備を行った後、ベルトコンベアを設置した。設置後、安全講習を行い、調査員と作業員が注意事項等を共有した。MC51・52グリッドに基本土層Aを、LP・LQ48グリッドに基本土層Bをそれぞれ設定し、掘削作業に取りかかった。調査区南東から精査を開始した。

基本土層A周辺では遺物包含層が残存しており、層中より土器や石器が多く出土した。土層の観察から、表土及び盛土・水田耕作土を第Ⅰ層（60cm）、遺物包含層の黒色土を第Ⅱ層（20cm）、漸移層を第Ⅲ層（13cm）、地山土を第Ⅳ層として基本層序を決定した。

【第2週】10月17日（月）～10月21日（金）

LP48～51グリッドの窪地を精査中に、焼土範囲を4ヶ所で検出し、SN01～04とした。これらは断面観察によりカマド状遺構と判断し、遺構種別をSNからSOに変更した。カマド状遺構は窪地の緩斜面を利用し構築したと考えられる。なお、窪地は2ヶ所存在し、SO01・02の東側を窪地1、SO03・04の西側を窪地2とし、窪地2は調査区外に広がっていることを確認した。

LQ～LR50グリッド精査中にSKT05を検出した。また、LQ50～51グリッドの精査中にSKT09・12を検出した。LR51グリッドを精査中にSR08を検出し、粗製土器の底部が埋設されていた。

【第3週】10月24日（月）～10月27日（木）

第1章 調査の経過

L Sライン以北の遺構検出を実施した。調査中にS O10・11・13・16を検出した。基本土層A周辺の盛土及び水田耕作土の除去を行った。

MD52以西の表土除去の際に柱穴様ピットが50基ほど検出された。Ⅱ層土由来の覆土を持つピットが多く確認された。

窪地1の緩斜面に構築されたS O01・02・10・11・13・16は、焚き口が窪地の中心側を向き、窪地底面には、それぞれの作業場を確認することができた。窪地1の東側緩斜面には大きな攪乱が点在し、中央北寄りには電柱を支えるアンカーを埋め込んだ長方形の掘り方等が確認された。また、中心部まで重機によるものとみられる痕跡が認められた。

窪地2の中央西側で検出した礫集中部分は、窪地の一部を道路（後世の簡易的な作業道か）として使用する際に敷かれたと考えられる。

基本土層A周辺の盛土及び水田耕作土を掘り下げ、遺物包含層である第Ⅱ層上面を精査した結果、剥片石器や縄文土器片が多数出土することが判明したが、遺構の掘り込み面を確認することは困難であった。

第Ⅱ層が厚く残存する中央南東部側は、調査期間を考慮して2回に分け、地山面まで下げることにした。

【第4週】10月31日（月）～11月4日（金）

調査区東端とS O01～04・10・11・13・16の精査を行う。また窪地の平面及びエレベーション図の作成を行う。

MA50～52グリッド、MB51・52グリッド、MC51・52グリッド、MD51・52グリッド、ME51・52グリッドの第Ⅱ層の除去と調査区西側（MC52グリッド以西）の遺構検出作業を実施した。空中写真撮影のため遺跡内を清掃し、発掘機材等の移動を行った。

MB52グリッドの第Ⅱ層中より多くの遺物が出土した。

ME51・52グリッド以東での遺物は疎らであった。

MC52グリッド第Ⅱ層中で石錐、MD52グリッド第Ⅱ層中で三脚石器が出土した。検出状況を把握するために出土地点に竹串を立て全景写真を撮影し記録を行った。

1・2日、空中写真撮影を実施した。

【第5週】11月7日（月）～11月11日（金）

調査区東端、S O03・13の精査を行った。

MA50～52グリッド、MB51・52グリッド、MC51・52グリッドにおいて第Ⅱ・Ⅲ層（黒色土～漸移層）の掘り下げを実施した。MB51グリッドの精査中に三脚石器が出土した。

調査区西側（MC52グリッド以西）の遺構検出作業を行い、第Ⅱ・Ⅲ層の掘り下げを実施し、柱穴様ピットと土坑を複数検出し、各遺構の精査を行った。

MF52～56グリッドとMG53～57グリッドの精査を行い、柱穴様ピットの図面等を作成した。

【第6週】11月14日（月）～11月18日（金）

調査区東端のSK21及び周辺の精査を行った。暗褐色土の覆土より石匙・石錐等が出土した。断面図及び完掘図を作成し、精査を完了した。MAライン以西の柱穴様ピットの精査も行った。MC50グリッドの第Ⅱ層精査中に礫が検出され、写真撮影後に取り上げを行った。調査終了写真の撮影

作業に向けて調査区西端部より清掃を行った。ベルトコンベアや発掘用具などの機材を移動し、調査終了写真の撮影を実施した。調査区東端L O47グリッドで検出したS K21から、石錐・石匙・剥片（玉髄質）が出土した。ME52～53グリッドの平面図を作成し精査を完了した。L P47・48グリッド、L O47・48グリッドで検出した4基の柱穴様ピットは、各々の間隔が3.8m程度であり、同規模の規格に沿って設定された柱穴であることが判明した。その他に掘立柱建物跡や柵列跡の存在の有無を把握するために、柱穴様ピットの並び方を確認した。

【第7週】11月21日（月）～11月25日（金）

調査期間終了間近のため遺跡内や調査事務所周辺の清掃と機材の片付けを行った。遺跡の一般公開実施に向けての準備を行い、資料や案内看板などを作成した。柱穴様ピットの検出及び精査を行った。平面図などの取り残し等がないかの確認を現場で行った。調査区南西壁の精査を行った。

南西壁断面の精査中にⅡ層土を覆土とするS K25を検出した。

MD・ME51～52グリッドでS K P372・381・429を検出した。これらは2.8～3.5mの柱間を持つ掘立柱建物跡として調査を進めた。

【第8週】11月28日（月）

事務所及び機材庫内の片付けを行った。調査区内の遠景写真の撮影を行い、精査が終了した遺構と図面の再確認を行った。撤収作業及び遺跡の一般公開を実施した。秋田地域振興局建設部、文化財保護室、埋蔵文化財センターによる現地引き渡し協議を行った。その後、機材を搬出して発掘調査を終了した。

第3節 整理作業の経過

出土した遺物は、縄文土器13箱、石器23箱、陶磁器1箱、金属器1箱、炭化物サンプル4箱である。炭化物サンプル以外は、発掘調査現場および埋蔵文化財センター中央調査班において洗浄し、乾燥した後、原則として個々の破片等の裏面に、遺跡名（略記号）・出土地点（遺構内出土のものは遺構名を、遺構外出土のものはグリッド名を記した）・出土年月日を注記した。注記後、縄文土器片は、口縁部、胴部、底部で仕分けし、文様、器形で個体識別して報告書掲載用として選別した。個体識別の過程で接合可能なものは接合し復元作業を実施した。選別した土器片296点と復元できたS R08の鉢形土器の拓本・断面実測等を平成29年7月から11月に実施し、パソコン上で合成するなど処理をして報告書に掲載した。土器及び石器の実測図は基本的に1/1で実測図を作成し、報告書に掲載するにあたっては適宜縮尺を変えて製図した。石器の実測図は平成28年度と平成29年度に委託した。

黒曜石については石材産地を特定するために産地同定分析、炭化物については年代測定を委託した。遺物の写真撮影は平成29年9月から11月に行った。

検出した遺構は、現場で作成した平面図・断面図を第1原図とし、これを基に平面図と断面図を組合わせて各遺構の第2原図を作成した。第2原図の作成から製図は平成28年11月から平成29年7月にかけてパソコン等を利用して作業を行った。

平成30年1月から3月までは出土遺物の収蔵、検出遺構の図面データ整理などを行った。

第1章 調査の経過

参考文献

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第502集 2016（平成28）年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第507集 2017（平成29）年

第2章 遺跡の位置と環境

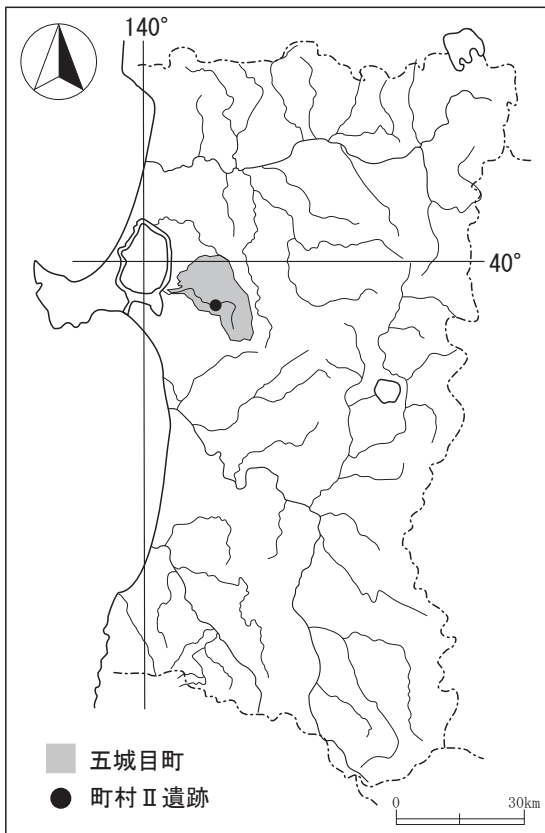
第1節 地理的環境

町村Ⅱ遺跡のある南秋田郡五城目町の地形は、『土地分類基本調査 五城目』によると、東部山岳地帯から八郎潟調整池に向かって山地、丘陵地、段丘、低地に大きく分類される。

東部の山地は、南北方向に連なる俎山山地、薬師山山地、赤倉山山地に三区分される。これら山地の西側には、120～160mの等高線を境にして、標高50～100mの高さをもつ一連の丘陵面が発達する。

この山地・丘陵地に源を発して鯉川川、馬場目川、井川、豊川、及び馬踏川が、全て八郎潟に注ぎ、河谷にはそれぞれ大小数段の河岸段丘が発達する。丘陵地の西縁崖直下に発達する標高10m以下の沖積低地は、北は山本郡三種町鯉川より南は秋田市金足まで広がり、縄文海進以降の海面低下に伴って形成された狭長な低平地である。

本遺跡は、馬場目川が八郎潟に注ぐ河口付近から、上流へ約13km遡った地点の標高34m前後の河岸段丘上に立地している。川からの比高は約10mで、調査区に隣接する東側は崖となっている。町村Ⅱ遺跡に隣接する町村集落の周辺には水田・畑等の農地が広がっており、当該遺跡にも農地化の影響がみられる。

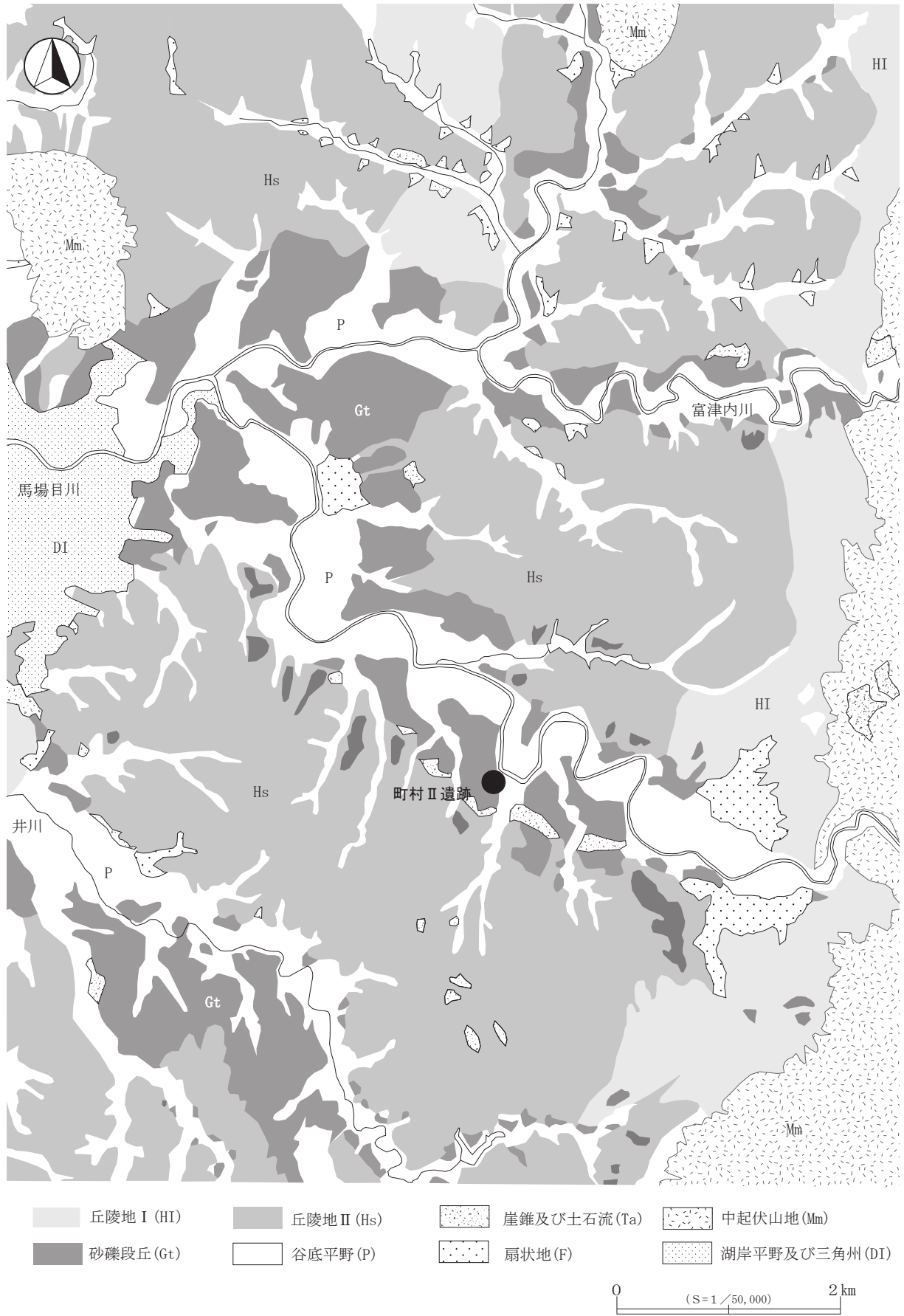


第1図 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

馬場目川沿いの段丘面には縄文時代以降の遺跡が数多く所在する。以下、各時代の遺跡について概観する。

縄文時代の遺跡は町村Ⅱ遺跡をはじめ、町指定文化財「朱彩瓶状土器」（晩期）が出土した町村遺跡（26）、富津内川と馬場目川合流付近には杉ヶ崎遺跡（4）（中期・後期・晩期）、新明前遺跡（6）（中期・後期）、広ヶ野遺跡（14）（中期・後期・晩期）、縄文晩期の遺跡として著名な中山遺跡（20）などが存在している。中山遺跡では、明治33年の東京人類学会員佐藤初太郎による発掘調査で、多くの遺物が出土している。昭和57・58年、平成2年には五城目町教育委員会による発掘調査で、湿地帯に残る泥炭層から晩期前半の編布・籃胎漆器・赤色漆塗り丸木弓・漆塗堅櫛・樹皮製品等、漆工芸技術に関わる貴重な資料が出土した。また、平成24～25年には弘前



第2図 遺跡周辺の地形区分図



第3図 町村Ⅱ遺跡と周辺遺跡位置図

第2章 遺跡の位置と環境

第1表 町村Ⅱ遺跡周辺の遺跡一覧

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	主な時代	遺構・遺物	文献
1	361-25-60	町村Ⅱ	縄文	掘立柱建物跡・陥し穴・土坑・カマド状遺構・柱穴列、縄文土器（前期・後期）・キノコ形土製品・石器（石鎌・石匙・石錘・石鏃・石皿・凹石・敲石・三脚石器）・陶磁器	本書・『詳細分布調査報告書』秋田県教委 2017年
2	361-25-31	湯ノ又館館	中世		
3	361-25-15	砂沢城	中世		『五城目郷土史』五城目町 1957年・『五城目町史』五城目町 1975年・『秋田県の中世城館』秋田県教委 1981年
4	361-25-16	杉ヶ崎	縄文	縄文土器（中期・後期・晩期）	
5	361-25-17	砂沢窯跡	中世	登窯、陶器	『五城目町史』五城目町 1975年
6	361-25-13	新明前	縄文	縄文土器（中期・後期）	『五城目町史』五城目町 1975年
7	361-25-32	山内城	中世	空堀、青磁・古瀬戸・黄瀬戸	
8	361-25-33	黒土館	中世		
9	361-25-37	中津又館	中世	帯郭	『五城目町史』五城目町 1975年・『秋田県の中世城館』秋田県教委 1981年
10	361-25-38	山居沢	縄文	縄文土器、石皿	
11	361-25-39	沼田館	中世		
12	361-25-34	富田	縄文	縄文土器（後期・晩期）	
13	361-25-37	中津又館	中世	帯郭	『五城目町史』五城目町 1975年・『秋田県の中世城館』秋田県教委 1981年
14	361-25-18	広ヶ野	縄文	土壘、縄文土器（中期・後期・晩期）、石斧・石棒	『五城目町史』五城目町 1975年
15	361-25-19	板碑	中世	碑	『五城目町の石造記念物』五城目町 1975年
16	361-25-20	広ヶ野館	中世	土壘・空堀	『五城目町史』五城目町 1975年・『秋田県の中世城館』秋田県教委 1981年
17	361-25-21	雀館古代井戸	古代	土師器・須恵器・黒陶、梓木・矢板	豊島昂「南秋田郡五城目町発見雀館古代井戸址」『秋田考古学 23号』1963年 船木義勝「秋田県五城目町の雀館古代井戸跡から出土した黒色土器『県立博物館研究報告第21号』1996年
18	361-25-22	雀館	中世	礎石、青磁・黄瀬戸	『五城目町史』五城目町 1975年 『秋田県の中世城館』秋田県教委 1981年
19	361-25-14	岩野山古墳群	古代	蔵手太刀・毛抜太刀・円頭太刀・勾玉・石帯・刀子・鉄鏃・土師器・須恵器	『秋田考古学 19』1960年『秋田県史考古編』1960年・『岩野山古墳第3次発掘調査報告書』1975年
20	361-25-23	中山	縄文	竪穴建物跡・土坑墓・土坑・土器埋設遺構、縄文土器（後期・晩期）・石器・漆製品（木胎漆器・櫛・藍胎漆器）・漆濃し布・漆液容器類・木製品・獣骨（シカ・イノシシ）・魚骨・クルミ・トチ	『五城目町史』五城目町 1975年・『中山遺跡発掘調査報告書』五城目町 1983・1984年
21	361-25-24	熊野台	中世	井戸跡	『秋田県の中世城館』秋田県教委 1981年
22	361-25-25	館越館	中世	空堀・帯郭	『秋田県の中世城館』秋田県教委 1981年
23	361-25-26	行内沢	縄文	縄文土器・石斧	『秋田県の中世城館』秋田県教委 1981年 『秋田考古学 22号』1963年
24	361-25-27	帝釈寺跡	中世	阿弥陀如来像・珠洲陶器	
25	361-25-28	帝釈寺館	中世	空堀	
26	361-25-40	町村	縄文	縄文土器（後期・晩期）・朱塗土器	
27	361-25-61	町村Ⅲ	縄文		『詳細分布調査報告書』秋田県教委 2017年
28	361-25-36	馬場目城	中世	空堀・帯郭・木戸口跡	『五城目町史』五城目町 1975年・『秋田県の中世城館』1981年 秋田県教委
29	361-25-41	蓬内台経塚		経石	
30	361-25-42	小野台	縄文	縄文土器（後期・晩期）	
31	361-25-43	安養寺台		金胎両界曼荼羅	
32	366-30-26	比丘尼館Ⅱ	中世		石川理紀之助『適産調旧跡考』1896年・『秋田県の中世城館』1981年 秋田県教委『井川町史』井川町 1986年
33	366-30-27	館岡館	古代・中世	空堀・腰郭、土師器・黄瀬戸・蔵骨器	石川理紀之助『適産調旧跡考』1896年『秋田県の中世城館』秋田県教委 1981年『井川町史』井川町 1986年
34	366-30-28	羽根田	古代	火葬墓、土師器（骨壺）、人骨	『井川町史』井川町 1986年
35	366-30-30	野畑	縄文	縄文土器・石鎌・石匙・石槍・石斧・石錘・石皿	石川理紀之助『適産調旧跡考』1896年・小武海松四郎「井川村野畑・南台上に見られる土器文化への考察」『秋田考古学第3号』1955年・『本校十年の歩み』井川東中学校 1957年・豊島昂、奈良修助『秋田県の考古学』1967年
36	366-30-31	南台	古代	骨蔵器（土師器1点・須恵器1点）	小武海松四郎「井川村野畑・南台上に見られる土器文化への考察」『秋田考古学第3号』（1955年）・小武海松四郎「井川村南台に於ける土師、須恵の骨壺について」『秋田考古学第10号』（1958年）・豊島昂、奈良修助『秋田県の考古学』（1967年）・『井川町史』井川町 1986年
37	366-30-34	綱木沢	縄文	縄文土器・石鎌・石匙・石錘	『井川町史』井川町 1986年・『井川町綱木沢遺跡調査概報』井川町教委 1986年
38	366-30-35	脇の館	古代	土師器・須恵器	『井川町史』井川町 1986年『上井川村郷土誌』1932年
39	366-30-36	井内館	中世	帯郭（3段）	『井川町史』井川町 1986年『秋田県の中世城館』1981年 秋田県教委
40	366-30-37	日暮館	中世	帯郭	『井川町史』井川町 1986年『秋田県の中世城館』1981年 秋田県教委 石川理紀之助『適産調旧跡考』1896年 栗田茂治『南秋田郡史』1951年

※遺跡台帳番号 361-●-△の 361 は五城目町、366-●-△の 362 は湯上市をさす。

大学による学術調査が行われている。

弥生時代の遺跡としては、井川町の新聞A遺跡・新聞B遺跡がある。新聞A遺跡からは、器面に靨痕が認められる弥生土器が出土している。また、同町の越雄遺跡では、竪穴建物跡や土器埋設遺構を検出した他、九州の遠賀川式土器の影響が見られる遠賀川系土器等が出土している。

この地域では8世紀第2四半期を境に、律令的な性格を有する遺跡が増加する。石崎遺跡・岩野山古墳群（19）・細越館・中谷地遺跡・開防遺跡・貝保遺跡・雀館古代井戸（17）等がその代表的な遺跡である。石崎遺跡では、櫓跡とされる柱痕や一辺400～500mの方形に巡ると見られる柵列の一部等が確認され、秋田郡衙擬定地と推定されている。岩野山古墳群は、過去3回の発掘調査により、多数の土坑墓及び方形周溝遺構が検出された他、武具・馬具・装身具等が出土している。石帯等副葬品の内容から、墓の被葬者は律令体制下の官人とみられ、8世紀中頃～10世紀まで継続する墓域である。細越館では、9世紀代の土師器・須恵器窯跡が確認されており、ここで生産された土器は、石崎遺跡や周辺遺跡に供給されたものと推測される。中谷地遺跡では、河川跡から8世紀後半～9世紀後半の土器と木製品が多量に出土している。特に木製の祭祀遺物がまとまって確認されたことは、石崎遺跡に関連した祭祀場が存在する可能性を示唆する。開防遺跡は、平成13（2001）年に発掘調査が行われ、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、溝跡、鍛冶炉等の遺構が検出され、8世紀後半～11世紀中葉の遺物が出土し、土器底部外面に砂粒が付着する砂底土器も出土している。開防遺跡に隣接する貝保遺跡も、平成13・14・25年に発掘調査が行われ、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、鍛冶炉等の遺構とともに、9世紀第2四半期～10世紀前半までの遺物が出土し、開防遺跡と一連の遺跡であると推測されている。雀館古代井戸跡では、周囲から古代の須恵器や中・近世の陶磁器等が出土し、長期に亘り使用されたものと考えられ、井戸の近くに集落が断続的にあったと考えられる。

平安時代末期には奥州藤原氏の支配に入り、文治5（1189）年に起きた奥州合戦の後に鎌倉政権の影響を受けることとなる。また、同年末に起きた大河兼任の乱鎮圧後、この地には橘氏が地頭として入り、南北朝・室町時代へと移りゆく中で安東氏の支配下に入る。

井川町洲崎遺跡は八郎瀧東岸の拠点的な集落跡として知られ、平成9・10年の調査では、115棟の掘立柱建物跡、312基の井戸跡、234条の堀・溝跡や3条の道路跡等が検出された。遺物は、中国陶磁、木製品等の他、井戸の中から人魚木簡が出土している。また、井戸枠に転用された丸木舟も出土している。洲崎遺跡の発掘により、八郎瀧東岸地域の中世社会の成立過程を解明する手がかりが得られたと言っても過言ではない。

戦国時代に目を向けると、遺跡周辺には安東氏の内紛によって落城したとされる馬場目城跡（28）などの城館跡が多く分布している。

近世になると、当地は関ヶ原の戦いの後、秋田氏（安東氏）と入れ替わり、常陸（茨城県）から移封された佐竹氏の藩域となり、明治に至っている。

引用・参考文献

秋田県農政部農地整備課 『土地分類基本調査 五城目』 1973（昭和48）年

秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56）年

秋田県教育委員会 『洲崎遺跡―県営ほ場整備事業（浜井川地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』 秋田県文化財調査

第2章 遺跡の位置と環境

報告書第303集 2000（平成12）年

秋田県教育委員会 『開防遺跡・貝保遺跡－主要地方道秋田八郎潟線高速交通関連道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第361集 2003（平成15）年

秋田県教育委員会 『越雄遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVI－』 秋田県文化財調査報告書第357集 2003（平成15）年

秋田県教育委員会 『柏木岱Ⅱ遺跡－高速交通関連道路整備事業県道琴丘上小阿仁線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第442集 2008（平成20）年

秋田県教育委員会 『貝保遺跡（第2次）－地方道路等整備事業（建設）主要地方道秋田八郎潟線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第499集 2015（平成27）年

秋田市 『秋田市史 第八巻 中世史料編』 1996（平成8）年

秋田市 『秋田市史 第二巻 中世通史編』 1999（平成11）年

伊東信雄 「稲作の北進」『古代の日本8 東北』 角川書店 1970（昭和45）年

男鹿市 『男鹿市史 上巻』 1995（平成7）年

利部修 「砂底須恵器の一考察」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第10号 1995（平成7）年

利部修 「秋田県考古学関係文献抄録（6）－弥生時代－」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第20号 2006（平成18）年

五城目町教育委員会 『岩野山古墳群第3次発掘調査報告書』 1975（昭和50）年

五城目町教育委員会 『五城目町史』 1975（昭和50）年

五城目町教育委員会 『新・五城目町歴史散歩』 1975（昭和50）年

五城目町教育委員会 『中山遺跡発掘調査報告書』 1983（昭和58）年

五城目町教育委員会 『中山遺跡発掘調査報告書』 1984（昭和59）年

五城目町教育委員会 『中山遺跡発掘調査報告書』 1990（平成2）年

五城目町教育委員会 『図版 五城目町の文化財』 第20集総合版 1991（平成3）年

五城目町教育委員会 『開防遺跡－湖東総合病院建設に伴う敷地造成工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 2002（平成14）年

高橋富雄 「秋田城をめぐる諸問題」『日本歴史』第281号 1971（昭和46）年

能代市 『能代市史 資料編 古代・中世Ⅰ』 1998（平成10）年

能代市 『能代市史 通史編Ⅰ 原始・古代・中世』 2008（平成20）年

弘前大学人文社会学部北日本考古学研究センター・弘前大学人文学部日本考古学研究室『八郎潟沿岸における低湿地遺跡の研究－冷温帯地域の遺跡資源の保存活用促進プロジェクト研究報告書6－』 2016（平成28）年

弘前大学人文社会学部北日本考古学研究センター『八郎潟沿岸における縄文時代晩期末の研究－下台遺跡発掘調査報告書－』 2017（平成29）年

村上義直 「最北の郡衛石崎遺跡について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第29号 2015（平成27）年

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査

盛土及び旧耕作土（第Ⅰ層）を重機により除去し、遺物包含層（第Ⅱ層）から人力で掘り下げた。基盤層（第Ⅳ層）上面で遺構確認を行い、検出した遺構について精査した。

調査はグリッド法で行った。調査区内の中心に近い箇所をMA50（世界測地系平面直角座標第X系 $X = -9276.000$ 、 $Y = -57828.000$ ）を基軸にし、座標北-南方向を南北基線とし、これに直交するラインを東西の基線とした。これをもとに4 m×4 mのメッシュを組み、その交点に方眼杭を打設した。方眼の原点を通る南北線をMA、同じく東西線を50とし、南北線はアルファベットの符号を西に向かって昇順、東西線は数字の符号を北に向かって昇順となるよう付した。この方眼による4 m四方の区画は、南東隅にあたる杭の南北と東西の符号を組み合わせ、MA50のように呼ぶこととした（第4図）。

遺構番号は柱穴様ピットとそれ以外の遺構に分けて付け、柱穴様ピットは101番から、それ以外の遺構は1番からの通し番号を付し、遺構の略記号と組合わせて呼称した。中には精査の結果により欠番としたものもある。実測図は、原則として1/20の縮尺で作図し、必要に応じて、1/10の作図も行った。

遺物は、出土区もしくは出土遺構、出土層位、出土年月日を記録して取り上げを行った。遺物の取り上げ等に用いる測量機器の設置は、調査区内外の方眼杭5か所に設定した水準杭をもとに行なった。

遺物の収納、取り扱いについては、石器、土器、陶磁器等はチャック付ポリ袋に入れ、コンテナに収納した。

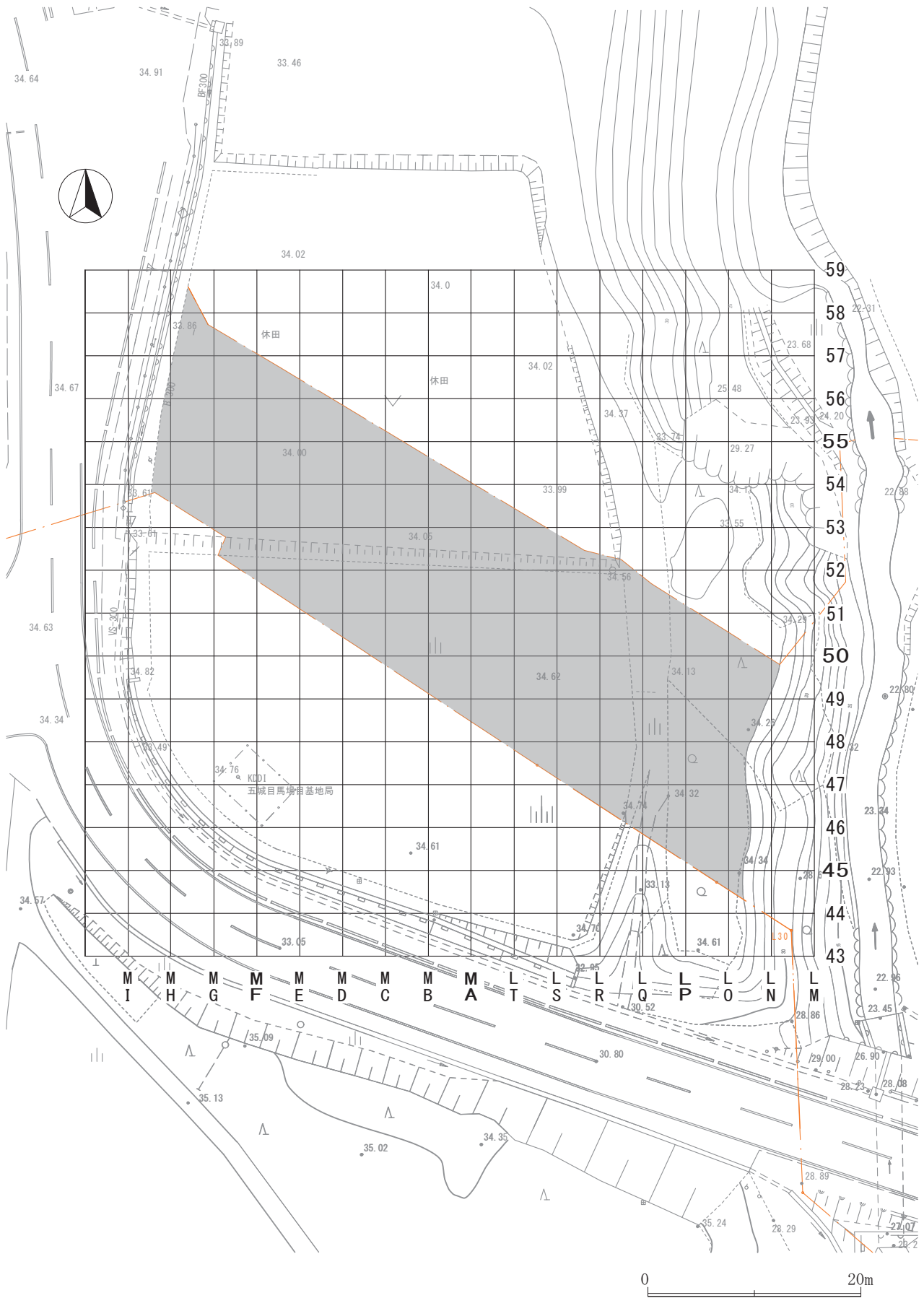
写真撮影は、遺構調査の随所で行った他、必要に応じて遺物の出土状況等を記録した。撮影はデジタルカメラで行った。

2 整理作業

遺物は、洗浄・注記の後、土器類については、必要に応じて接合作業を行った。土器類は接合作業後に種類及び器種に分類し、報告書掲載土器類を選別した。遺存状態により、必要に応じて樹脂による復元作業を行った。

報告書掲載遺物図面については、実測図作成後、当該図をスキャニングして下図としてドローイングソフト（アドビシステムズ社製「Illustrator」）を用いてデジタルトレースして作成した。必要に応じて、拓本も作成し、同様にスキャニングしてトレース図と組合わせた。

遺構等の図面に関しては、現場で作成した図から第2原図を作成し、スキャニングして下図としてドローイングソフトを用いてデジタルトレースを行った。遺構・遺物等のデジタルトレース図は、最終的にドローイングソフトを用いてレイアウトし、挿図原稿を作成した。



第4図 調査区と工事計画図

第2節 基本層序

調査前の状況は開田による影響を受けており、北西部は削平され現在に至っている。遺跡の基本層序は調査区中央部で観察した。詳細は以下に述べる。

基本土層 A

- I a 1層 黒褐色(10YR 2/3~3/1)シルト 粘性弱 しまり弱
混入物：地山土塊φ5~10mm 1%未満、部分的に砂
- I b層 黒褐色(10YR 2/1)シルト 粘性弱 しまり弱
- I c 1層 にぶい黄褐~灰黄褐色(10YR 5/4~4/2)砂 粘性弱 しまり強
混入物：礫φ5~30mm 1%未満
- I c 2層 黒褐色(10YR 2/3)シルト 粘性弱 しまり強
混入物：礫φ10~50mm 30%
- I d 1層 黒褐色(10YR 2/3)シルト 粘性やや強 しまり強
混入物：地山土粒φ1以下~20mm 1%未満
- I d 2層 黒褐色(10YR 2/2)シルト 粘性やや強 しまり強
混入物：地山土粒φ1以下~20mm 5%
- I d 3層 黒褐色(10YR 2/3)シルト 粘性中 しまり強
混入物：地山土粒φ1mm以下 1%未満、炭化物粒φ2mm 1%
- II層 黒色(10YR 1.7/1)シルト 粘性やや強 しまり強
混入物：地山土粒φ1以下~50mm 1%未満、炭化物粒φ1以下~3mm 1%未満、縄文土器・石器を多く含む
- III層 暗褐色(10YR 3/3)シルト 粘性強 しまり強
- IV層 明黄褐色(10YR 6/6)粘土質シルト 粘性強 しまり強

基本土層 C

- I a層 黒褐色(10YR 2/2)粘土質シルト 粘性やや強 しまりやや強
混入物：地山土粒φ1mm 1%、礫φ1~10cm 1%
- I c 1層 にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂 粘性弱 しまり弱
混入物：黒褐色土塊φ6mm 20%
- I d 1層 灰黄褐色(10YR 4/2)粘土質シルト 粘性強 しまり強
混入物：地山土粒φ1mm 10%、銹化土粒φ1mm 10%
- I d 2層 黒褐色(10YR 2/2)シルト 粘性やや強 しまり強
混入物：地山土粒φ1以下~20mm 5%
- I d 3層 黒褐色(10YR 3/1)粘土質シルト 粘性やや強 しまり強
- II層 黒色(10YR 1.7/1)シルト 粘性やや強 しまり強
混入物：地山土粒φ1以下~50mm 1%未満、炭化物粒φ1以下~3mm 1%未満、縄文土器・石器を多く含む

Ⅲ層 暗褐色(10YR 3/3)シルト 粘性強 しまり強

Ⅳ層 明黄褐色(10YR 6/6)粘土質シルト 粘性強 しまり強

各層の由来

I a 層 盛土：確認調査時のトレンチ掘削により生じた盛土

I b 層 表土

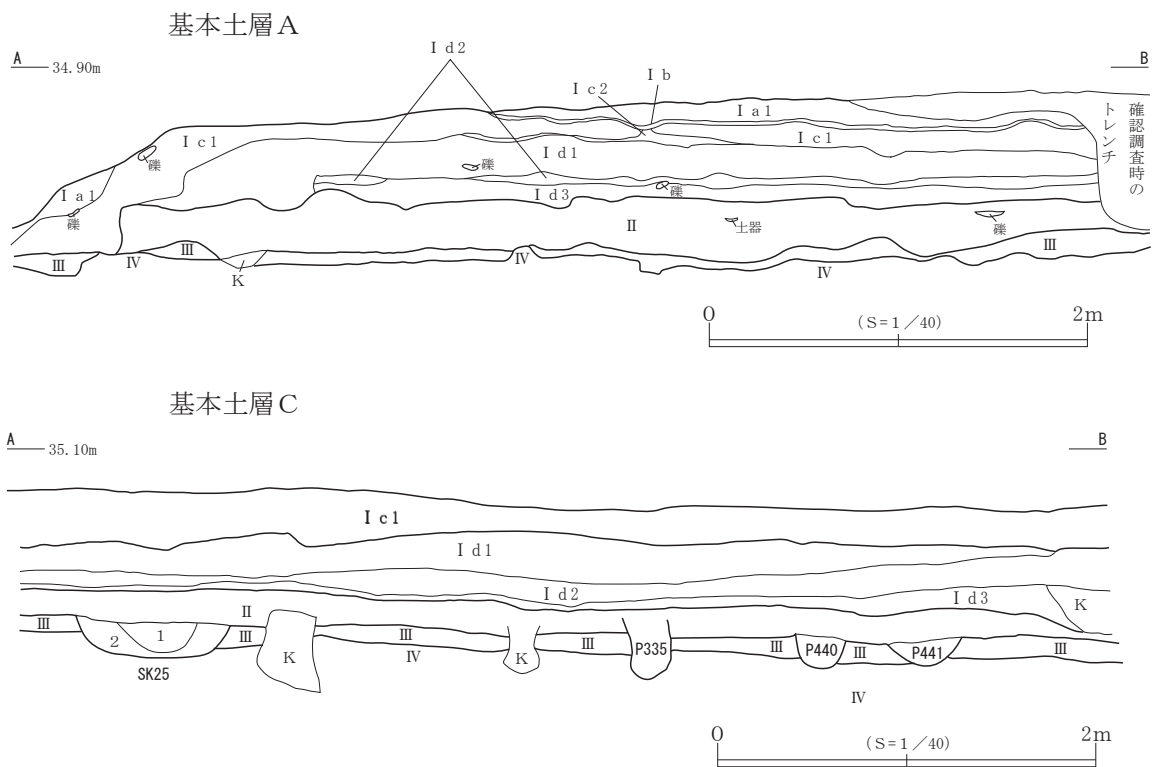
I c 層 盛土：確認調査以前に遺跡内で、造成により盛られた土

I d 層 水田耕作土

Ⅱ層 縄文時代の遺物包含層：層中より遺物出土及び遺構の掘り込み（トレンチ断面のみ）縄文土器
・石器が多く確認される

Ⅲ層 漸移層：陥し穴の上層はこれに由来する黒色化が進んでいない堆積土が由来か

Ⅳ層 地山



第5図 基本層序

第3節 検出遺構と遺物

検出した遺構の帰属時期については、調査区全体の出土遺物の時期、遺構の形状、遺構埋土の状況から縄文時代と中世以降に分けた。

1 縄文時代

掘立柱建物跡2棟、柱列跡4列、土器埋設遺構1基、陥し穴状遺構3基、土坑5基、柱穴様ピット19基である。掘立柱建物跡、柱列跡、土坑は、埋土の状況（Ⅲ層土がベースであること）及び周辺の出土遺物から縄文時代に帰属させた。また、土器埋設遺構は、埋設された土器の型式（十腰内Ⅰ式）から縄文時代後期、陥し穴状遺構は平面形状（円形）により縄文時代前期と考える。

(1) 掘立柱建物跡

S B 23（第11図、図版5）

【位置】L O 47～48・L P 47～48に位置する。

【確認状況】Ⅳ層上面を精査中、4基の柱穴がほぼ等間隔に広がっていることを確認した。P 1（S K P 210）・P 2（S K P 208）・P 3（S K P 345）・P 4（S K P 248）。

【切り合い関係】P 2がS O 11と重複して本遺構が古い。

【規模・形態】4基の柱穴からなる1間×1間の建物。P 1—P 2は3.78m、P 3—P 4は3.87m、P 1—P 3は3.77m、P 2—P 4は3.74m。主軸方向はN—87°—Eである。

【埋土】第Ⅱ層に由来すると思われる。

【出土遺物】なし

S B 24（第11図）

【位置】L T 52・MA 52・53に位置する。

【確認状況】Ⅳ層上面を精査中、4基の柱穴がほぼ等間隔に広がっていることを確認した。P 1（S K P 131）・P 2（S K P 397）・P 3（S K P 152）・P 4（S K P 406）。

【切り合い関係】重複なし。

【規模・形態】4基の柱穴からなる1間×1間の建物。P 1—P 2は2.26m、P 3—P 4は2.40m、P 1—P 3は2.16m、P 2—P 4は2.24m。主軸方向はN—18°—Eである。

【埋土】第Ⅱ層土を主体としている。堆積状況から自然堆積と考えられる。

【出土遺物】P 1より縄文土器片が出土している。

(2) 柱列跡

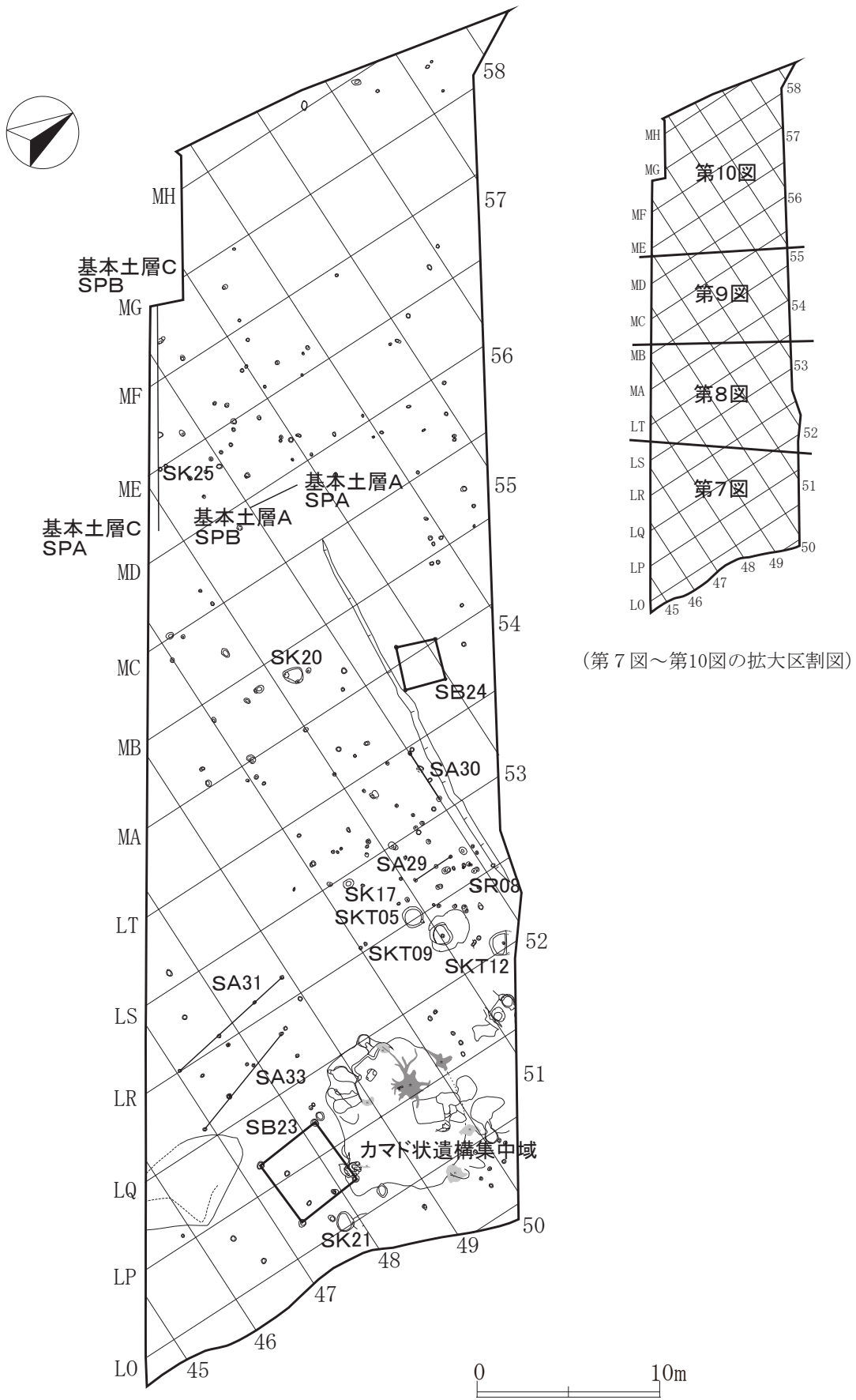
S A 29（第12図）

【位置】L R 51・52に位置する。

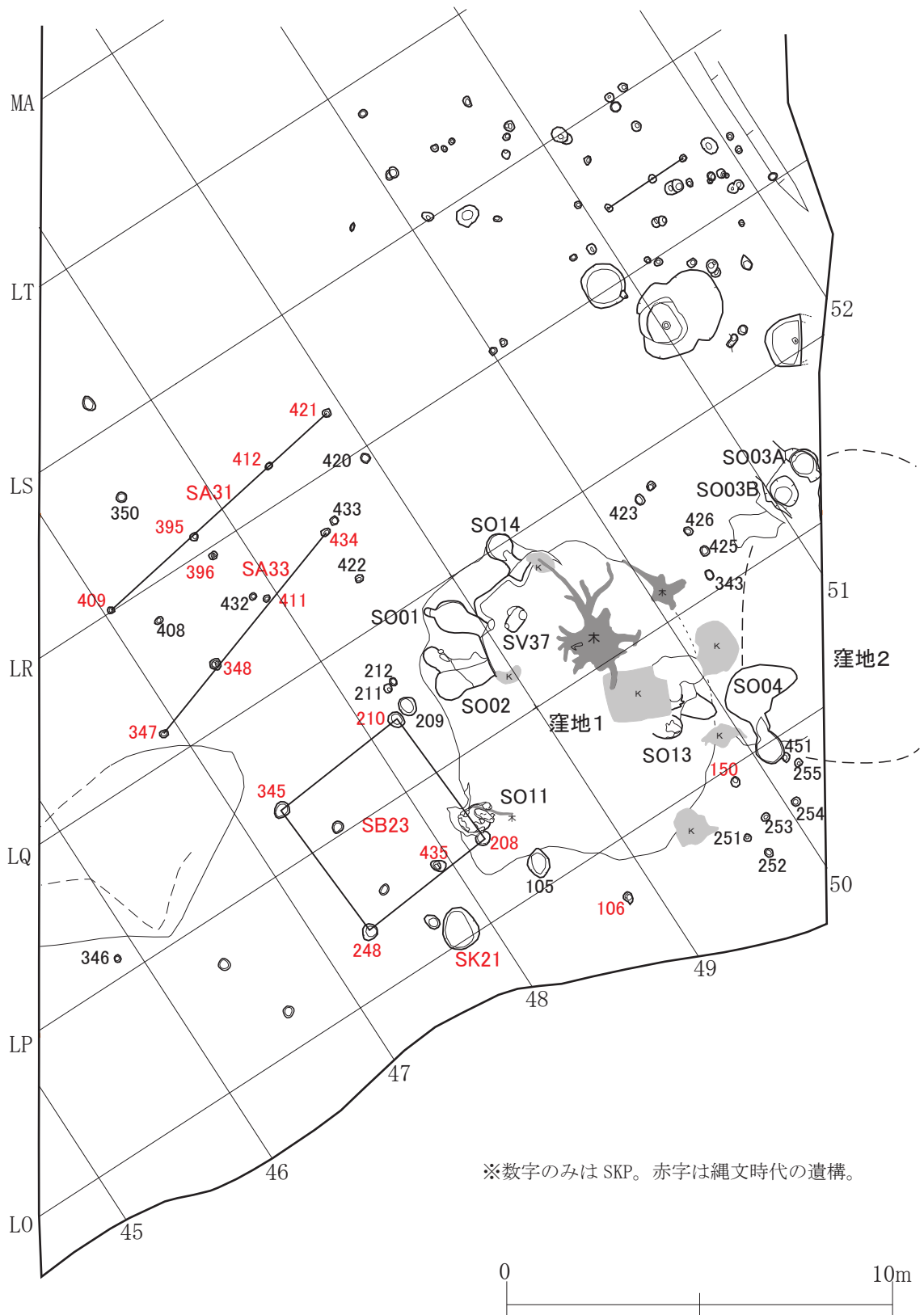
【確認状況】精査終了後のⅣ層上面で確認した。

【切り合い関係】重複はない。

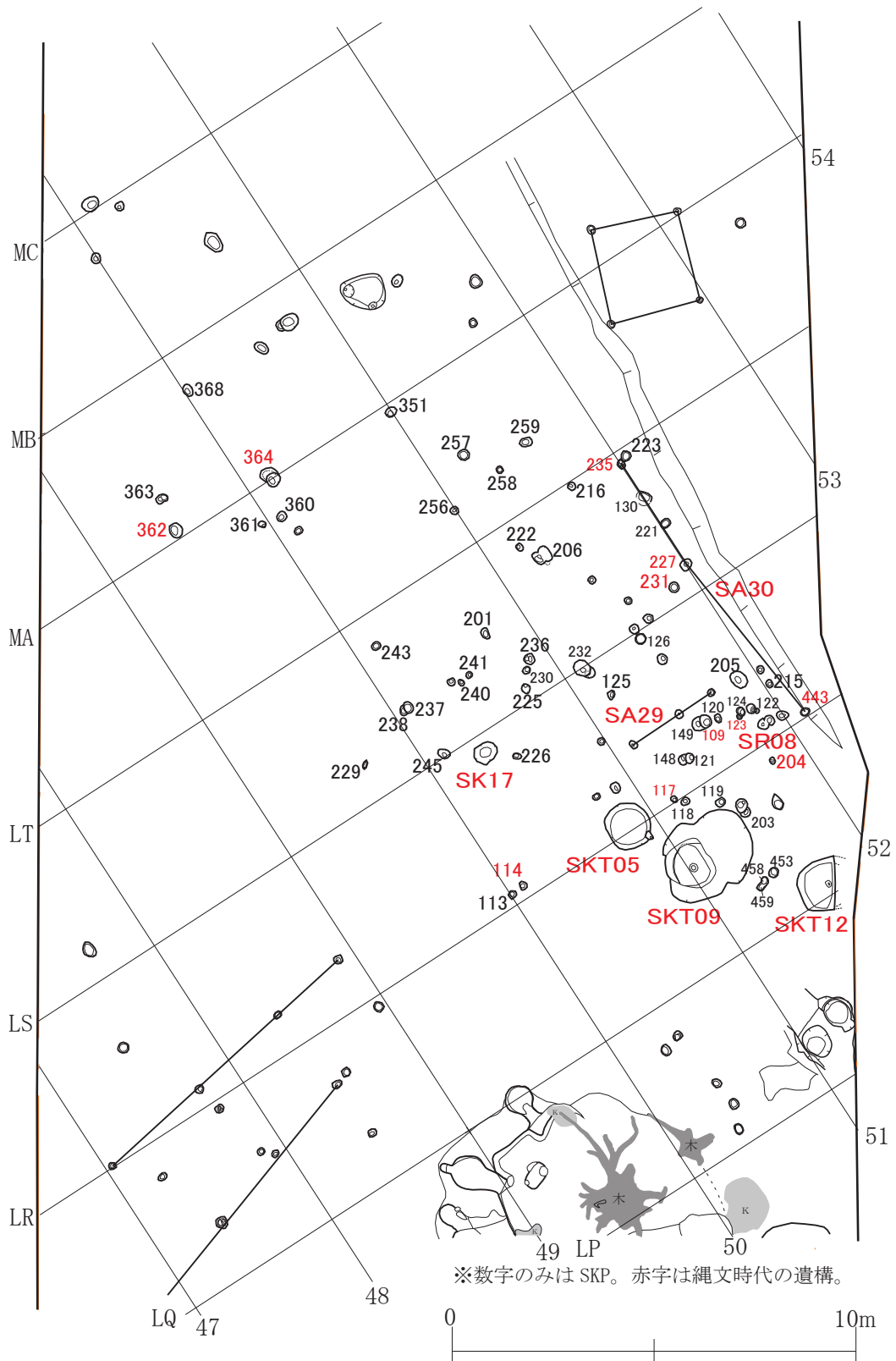
【規模・形態】3基の柱穴からなる全長2.48mを測る柱列である。柱穴は径20cm前後で底面は水平で柱痕跡は確認できなかった。



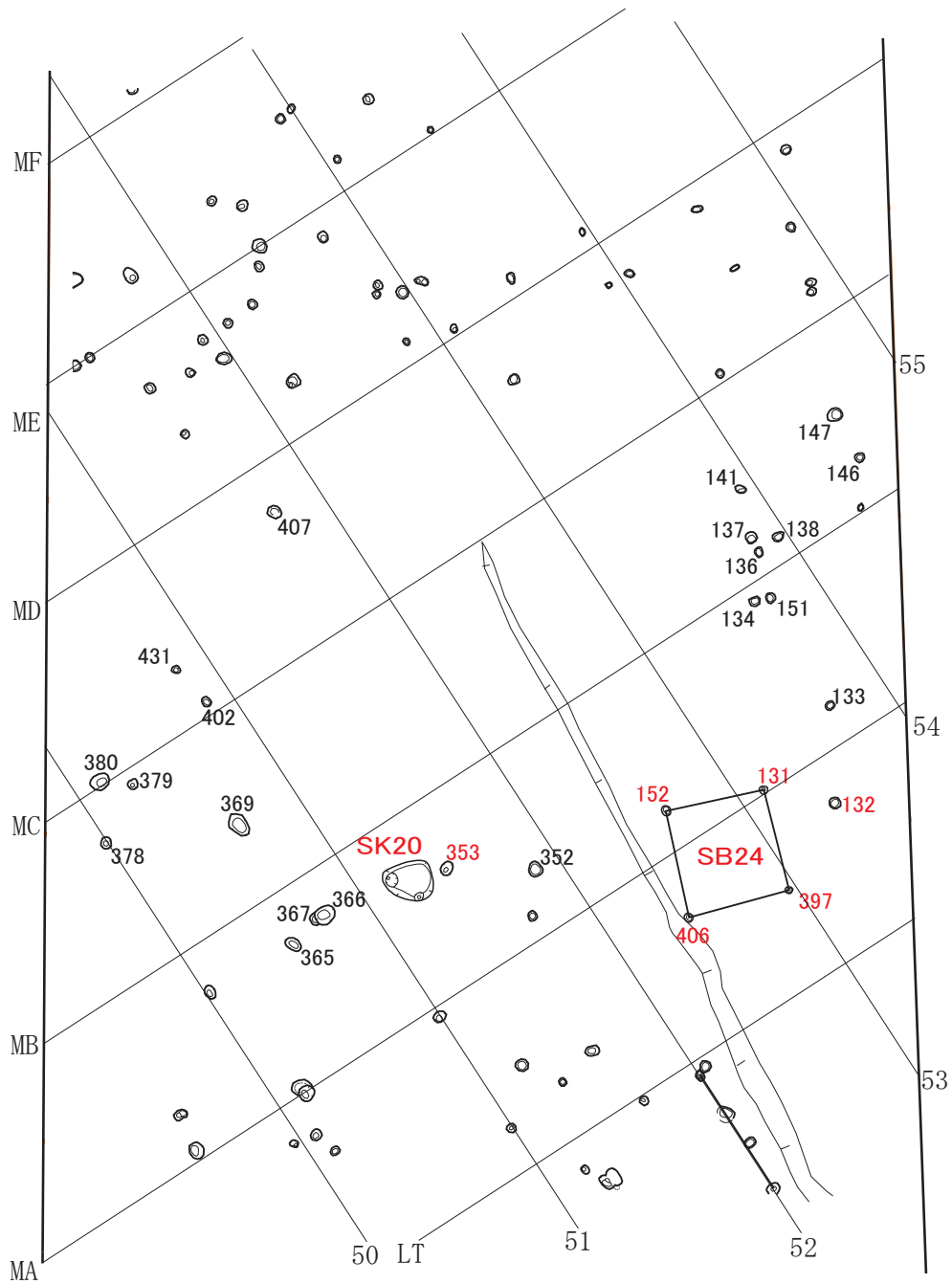
第6図 グリッド配置と全遺構配置図



第7図 遺構配置図部分(1)



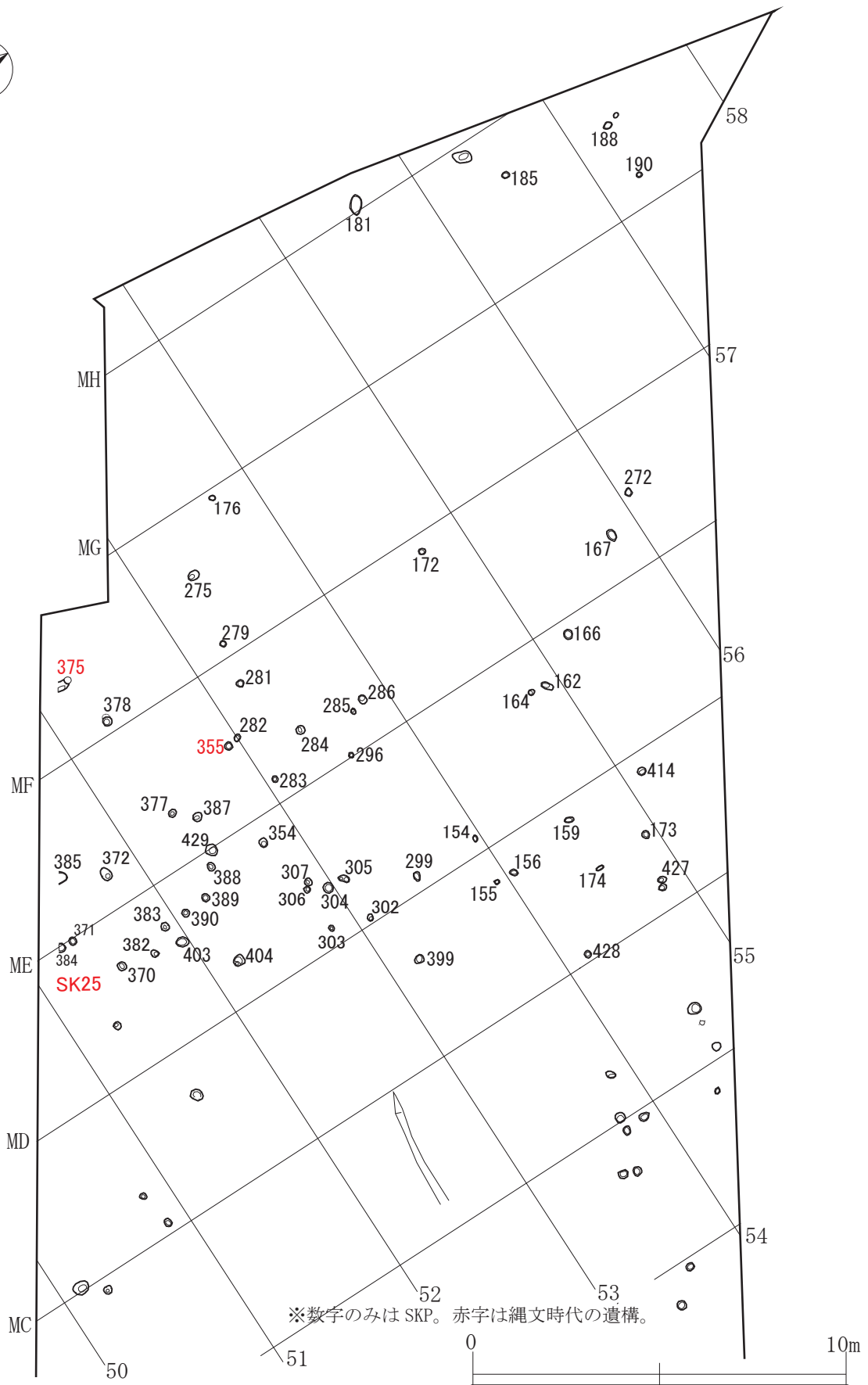
第8図 遺構配置図部分 (2)



※数字のみは SKP。赤字は縄文時代の遺構。



第9図 遺構配置図部分(3)



第10図 遺構配置図部分(4)

【埋土】第Ⅱ層土が主体である。堆積状況から自然堆積と考えられる。

【出土遺物】なし。

S A30 (第12図)

【位置】L R52・L S51・52に位置する。

【確認状況】Ⅳ層上面での精査終了後、柱穴列を確認した。

【規模・形態】3基の柱穴からなる柱列で、全長7.5mを測る。柱穴は径20～30cmで、柱の痕跡は確認できなかった。

【埋土】第Ⅱ層土が主体である。堆積土全体に地山を含むため人為堆積と考えられる。

【出土遺物】P1からは礫、P2からは石器と縄文土器が出土。土器は無文で輪積み痕が認められる。

S A31 (第13図)

【位置】L Q47・48に位置する。

【確認状況】Ⅳ層上面での精査終了後、柱穴列を確認した。

【切り合い関係】なし。

【規模・形態】4基の柱穴からなる柱列で、全長6.8mを測る。柱穴は径18～26cmで、柱の痕跡は確認できなかった。

【埋土】第Ⅱ層土が主体となっている。

【出土遺物】なし。

S A33 (第13図)

【位置】L R47～48に位置する。

【確認状況】Ⅳ層上面を精査中に確認された。

【切り合い関係】重複なし。

【規模・形態】4基の柱穴からなる柱列で、全長7.6mを測る。柱穴は径18～22cmで、柱の痕跡は確認できなかった。

【埋土】第Ⅱ層土が主体となっている。

【出土遺物】なし。

(3) 土器埋設遺構

S R08 (第14図、図版5・21)

【位置】L R51に位置する。

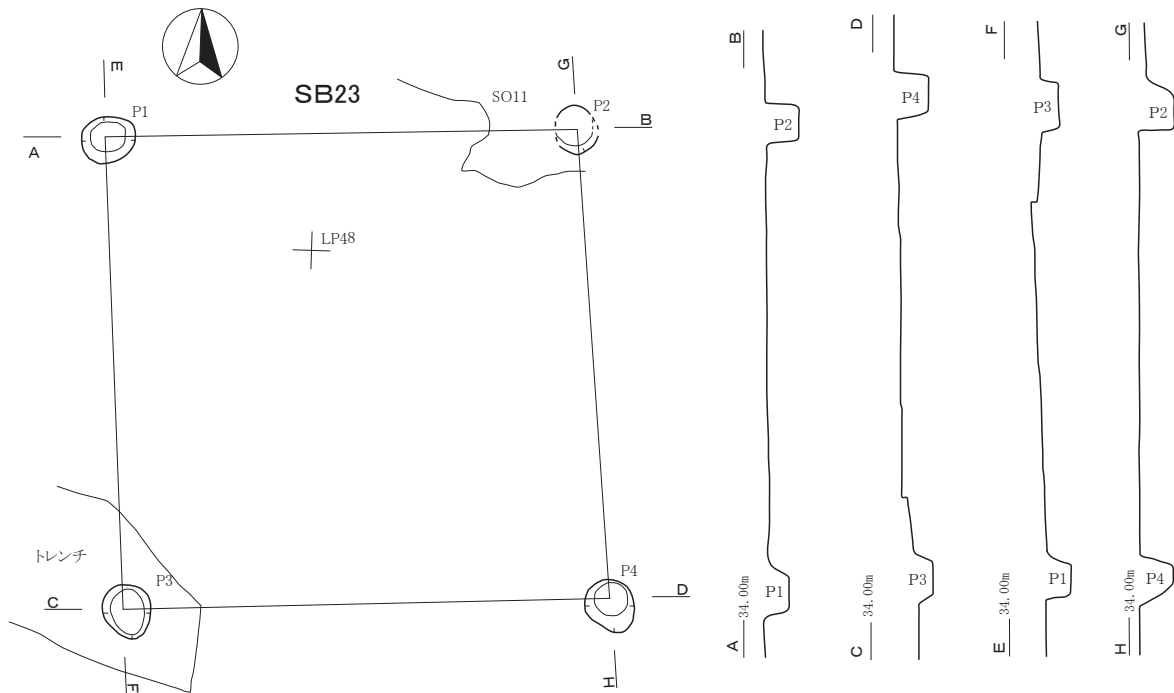
【確認状況】Ⅳ層上面を精査中に確認した。

【切り合い関係】なし。

【規模・形態】土器を埋設する掘り方の平面形は長軸0.23m (N—83° —W)、短軸0.17mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.17mで、底面は平坦である。

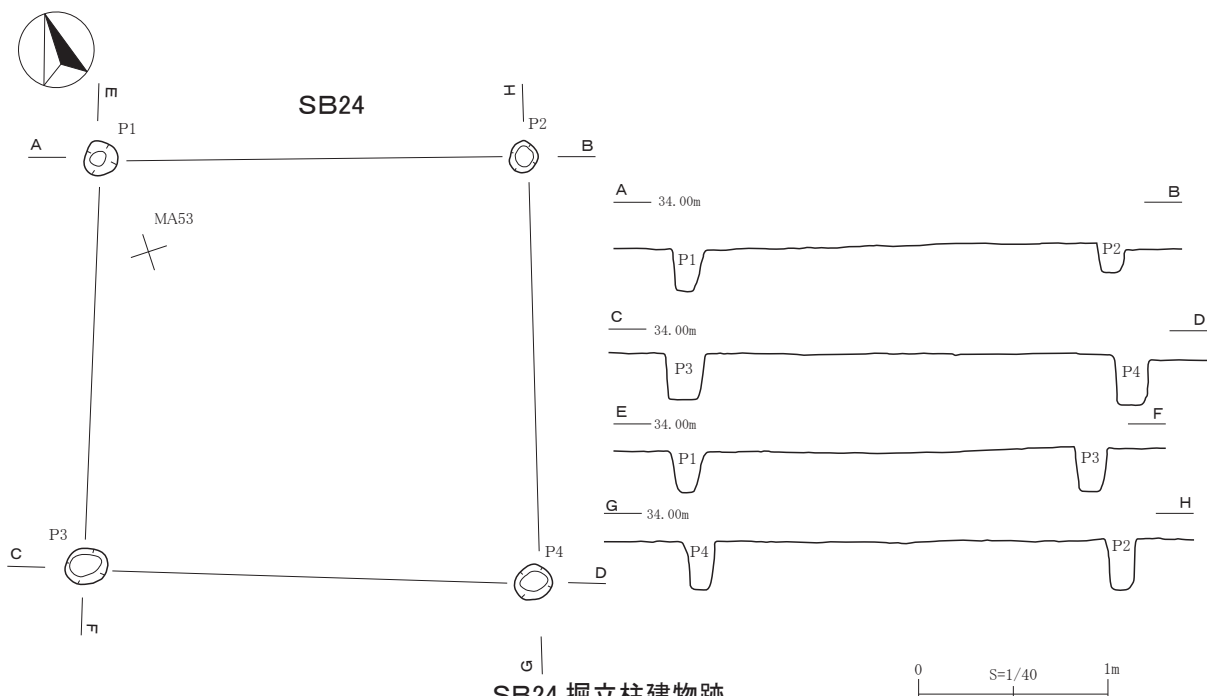
【埋土】4層に分けた。全て人為的な埋め戻し土で、第Ⅱ層土に由来する。

【出土遺物】土器は、口径13.4cm、底径7.0cm、器高15.1cmを測る小型の深鉢形土器で、本遺跡の分類基準ではⅡ群1類に該当する(第17図)。埋設するための掘り方に正位で置かれたためか、口縁部は後世の耕作等の攪乱により大半が欠損している。器外面は、体部～底部の一部が摩滅している他は、



SB23掘立柱建物跡

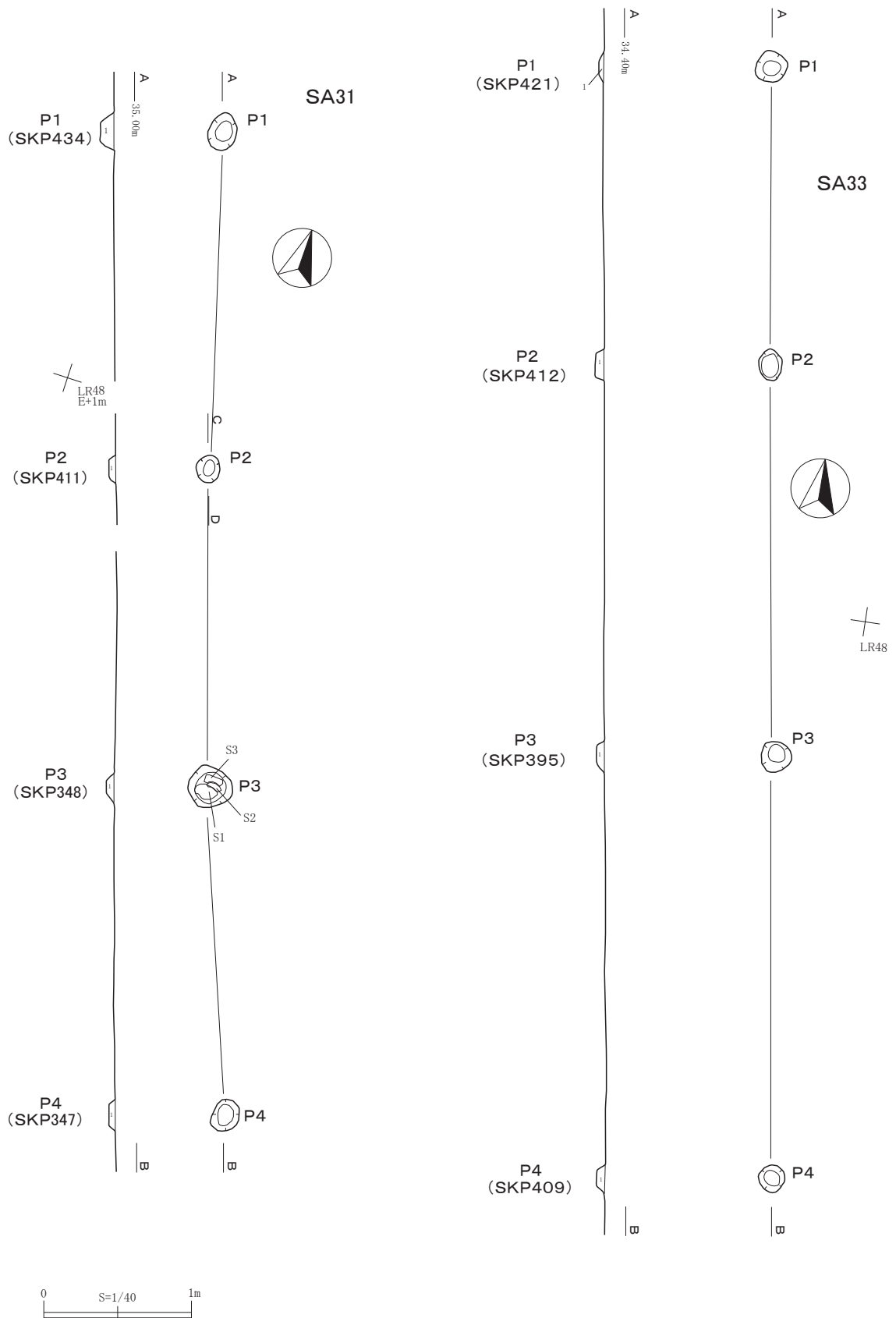
番号	長軸×短軸(cm)	平面形状	検出面からの深さ(m)	底面標高(m)	備考
P1	41×36	円形	0.21	34.031	
P2	38×〈34〉	〈円形〉	0.28	33.894	SO11と重複 〈 〉は推定値
P3	42×28	円形	0.15	34.033	
P4	43×38	略円形	0.29	33.994	



SB24掘立柱建物跡

番号	長軸×短軸(cm)	平面形状	検出面からの深さ(m)	底面標高(m)	備考
P1	18×16	円形	0.11	33.629	
P2	18×14	円形	0.08	33.638	
P3	23×18	楕円形	0.12	33.642	
P4	20×18	円形	0.13	33.622	

第11図 掘立柱建物跡 SB23・24



第13図 柱列跡 (2) SA31・33

全体的に丁寧な磨きが残されており、口縁部～体部には連続した弧線文が描かれている。また、口縁部～体部中位にかけて煤状炭化物が所々に付着し、内面は部分的に黒変している。胎土は緻密で、径1mm程度の白色砂粒を多く含んでいる。

(4) 陥し穴状遺構

S K T 05 (第14図、図版6・9)

【位置】L Q 50・L R 50に位置する。

【確認状況】第IV層上面を精査中に確認された。

【切り合い関係】S K P 112と重複しており、本遺構が古い。

【規模・形態】長軸1.14m、短軸1.06mの円形を呈する。確認面からの深さは、本体底面まで0.97mで、底面の柱穴様ピットは長径0.14m×短径0.10mの円形で、深さは0.47mである。

【埋土】17層に分けた。9～17層は自然堆積と考えられる。

【出土遺物】なし。

S K T 09 (第15図、図版7・9)

【位置】L Q 50・51に位置する。

【確認状況】第Ⅲ～Ⅳ層上面を精査中に確認された。

【切り合い関係】なし。

【規模・形態】長軸1.26m、短軸1.08mの円形を呈し、深さは1.34mである。底面の柱穴様ピットは長径0.21m×短径0.2mの円形で、深さは0.26mである。

【埋土】12層に分けた。1～6・8・11層は第Ⅱ層土、他は第Ⅳ層地山土に由来すると思われる。

【出土遺物】1層から縄文土器片が出土した。

S K T 12 (第15図、図版8・9)

【位置】L P 51・L Q 51に位置する。

【確認状況】第IV層上面を精査中に確認された。

【切り合い関係】なし。

【規模・形態】直径1.28m程度の円形を呈し、深さは1.34mである。遺構の約1/2が調査区外に広がる。底面の柱穴様ピットは長径0.16m×短径0.12mの円形で、深さは0.14mである。

【埋土】16層に分けた。11～16層は自然堆積と考えられる。

【出土遺物】なし。

(5) 土坑

S K 17 (第16図、図版9)

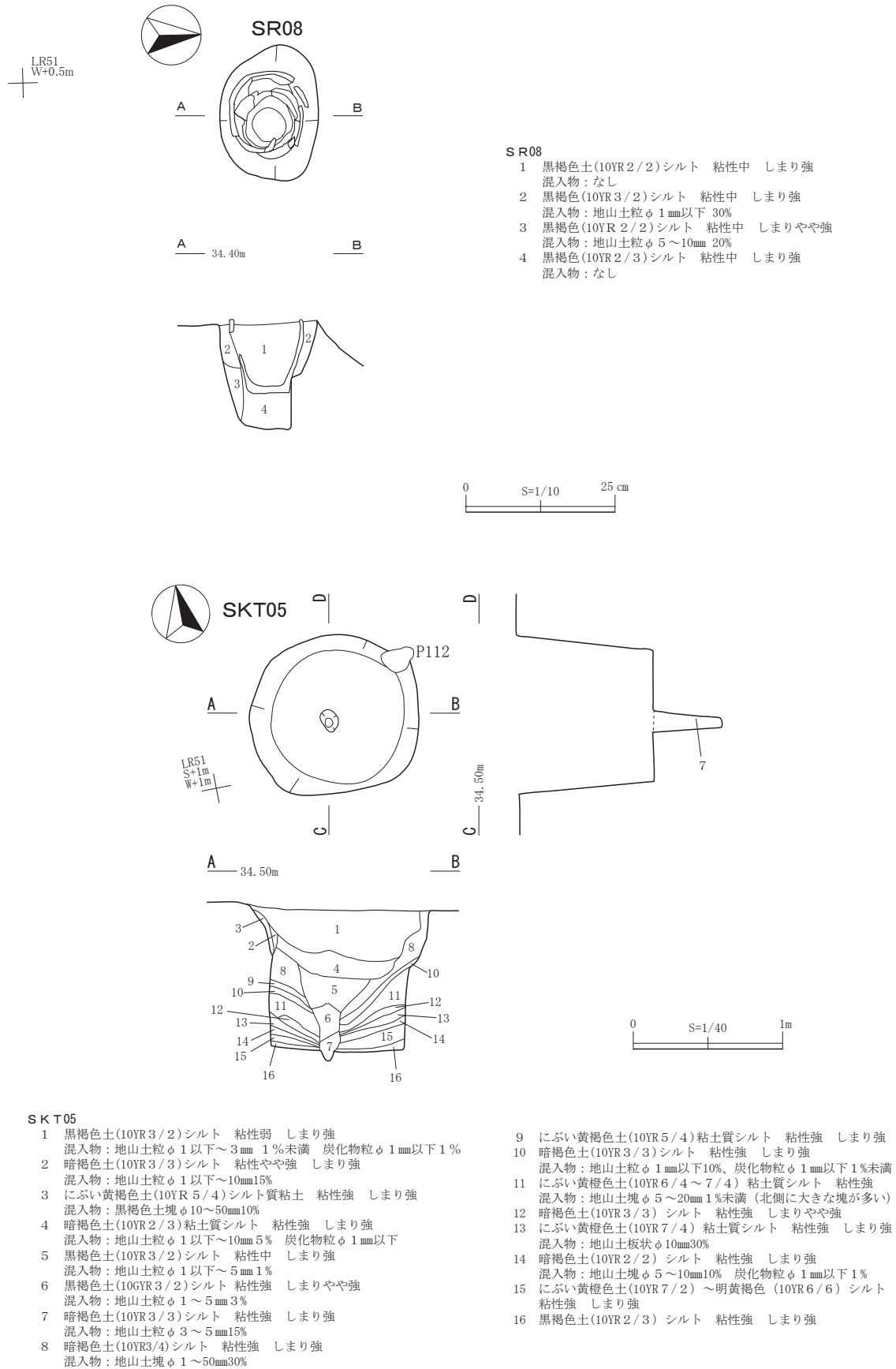
【位置】L R 50に位置する。

【確認状況】L R 50の第IV層上面を精査中、確認された。

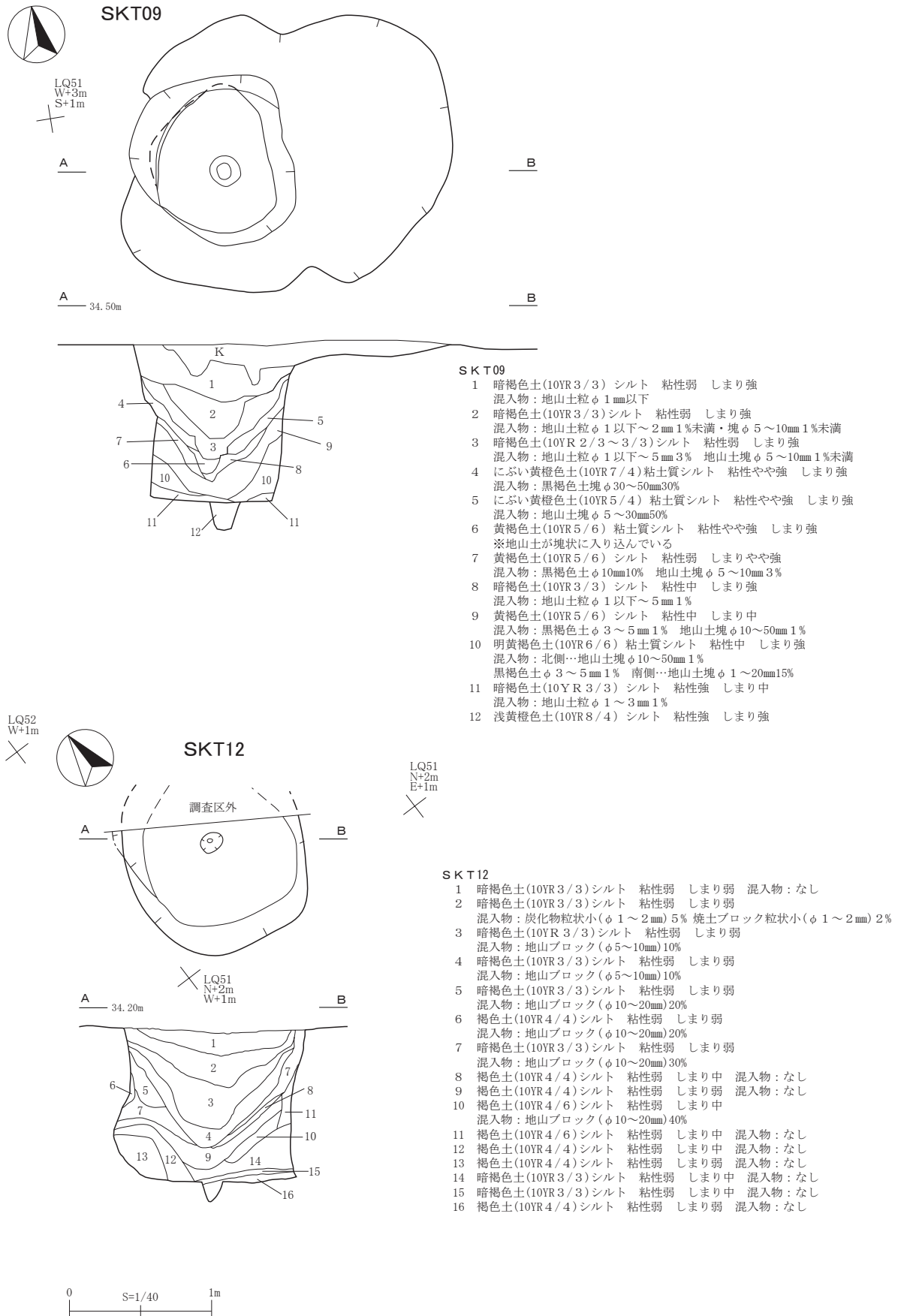
【切り合い関係】なし。

【規模・形態】平面形は長軸0.59m、短軸0.45mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さ0.07m、底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。

第3章 調査の方法と成果



第14図 土器埋設遺構と陥し穴状遺構(1) SR08・SKT05



第15図 陥し穴状遺構(2) SKT09・12

【埋土】第Ⅱ層土由来の黒褐色土を基質とする単層である。

【出土遺物】なし

S K 20 (第16・18図3・図版10・45)

【位置】MA51に位置する。

【確認状況】第Ⅳ層上面を精査中に確認された。

【切り合い関係】柱穴2基と重複し、本遺構が古い。

【規模・形態】平面形は長軸1.1m×短軸0.87mの楕円形を呈する。確認面からの深さ0.07m、底面は中央が盛り上がり、壁の立ち上がりは緩やかである。

【埋土】第Ⅱ層土が主体で、地山土が含まれ単層であるため人為堆積と判断した。

【出土遺物】石篋が1点出土した。基部のみで全体形状は不明である。

S K 21 (第16図、図版10・11・45)

【位置】LN47・LO47に位置する。

【確認状況】LN47・LO47を精査中、第Ⅳ層土上面で確認された。

【切り合い関係】なし。

【規模・形態】平面形は長軸1.08m、短軸0.93mの楕円形を呈する。確認面からの深さ0.4m、底面はやや凹凸があり、壁の立ち上がりは急である。

【埋土】4層に分けた。1・3・4層は第Ⅱ層土由来と思われる。第Ⅲ層は第Ⅳ層土由来と考える。堆積状況や覆土中にそれぞれ地山土や炭化物等の混入物がみられ、人為的な埋め戻し土と考える。

【出土遺物】石匙、石錐、玉髓質頁岩剥片が各1点出土した。石錐は基部と錐部の境が明瞭で、調整により基部が作り出されている。石匙は縦型石匙で先端が円刃状を呈している。

S K 25 (第16図、図版11)

【位置】ME51に位置する。

【確認状況】基本土層Cの断面で確認された。平面プランは第Ⅳ層まで掘り下げたため不明である。

【切り合い関係】なし。

【規模・形態】平面形は不明で、深さは0.18m程度である。壁の立ち上がりは緩やかである。

【埋土】2層に分層した。いずれも第Ⅱ層土を主体とする。2層全体に地山を多く含むため、埋め戻し土と考えられる。

(6) 柱穴様ピット (第2表)

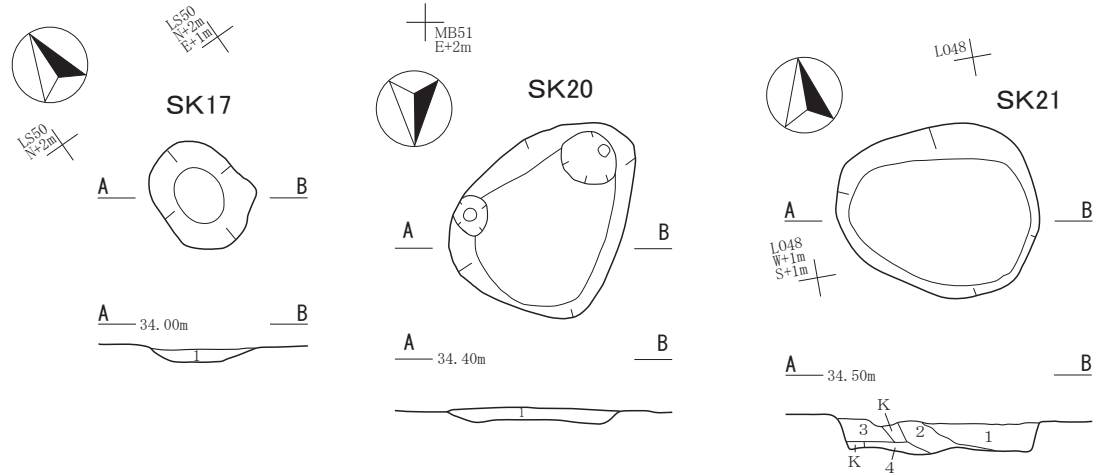
柱穴様ピット一覧表を参照。

S K P 117

【出土遺物】底径5.0cm、現存高6.6cmを測る深鉢あるいは鉢形土器で、本遺跡における分類基準Ⅱ群Ⅰ類に属する。体部には連続した連弧文が描かれている。内面には煤状炭化物がみられる。胎土は緻密である。

S K P 109

【出土遺物】底径12.9cm、現存高1.8cmを測る深鉢形土器の底部で、本遺跡における分類基準Ⅳ群に属する。



SK17

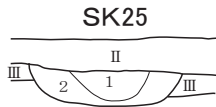
- 1 黒褐色(10YR 2/2)シルト 粘性弱 しまり強
 混入物：炭化物粒φ1mm以下1%未満 焼土粒φ1mm以下～5mm1%

SK20

- 1 黒色土(10YR 1.7/1)シルト 粘性中 しまり強
 混入物：地山土粒φ1～2mm1%未満 地山土粒φ5mm～30mm1%未満

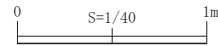
SK21

- 1 暗褐色(10YR 3/4)シルト 粘性やや弱 しまり強
 混入物：地山土粒φ3～30mm3% 炭化物粒φ1mm1%未満
 2 にぶい黄褐色(10YR 3/4)シルト 粘性弱 しまり強
 混入物：地山土粒φ1～5mm30% 塊φ10～20mm10%
 3 暗褐色(10YR 3/4)シルト 粘性やや弱 しまり強
 混入物：地山土塊φ3～30mm3% 炭化物粒φ1mm1%未満
 4 暗褐色(10YR 3/4)シルト 粘性やや弱 しまり強



SK25

- 1 黒褐色(10YR 2/2)シルト 粘性中 しまり中 混入物：IV層ブロック(φ10cm)5%
 2 灰黄褐色(10YR 4/2)シルト 粘性中 しまりやや強
 備考
 基本土層Cの断面上で確認された。



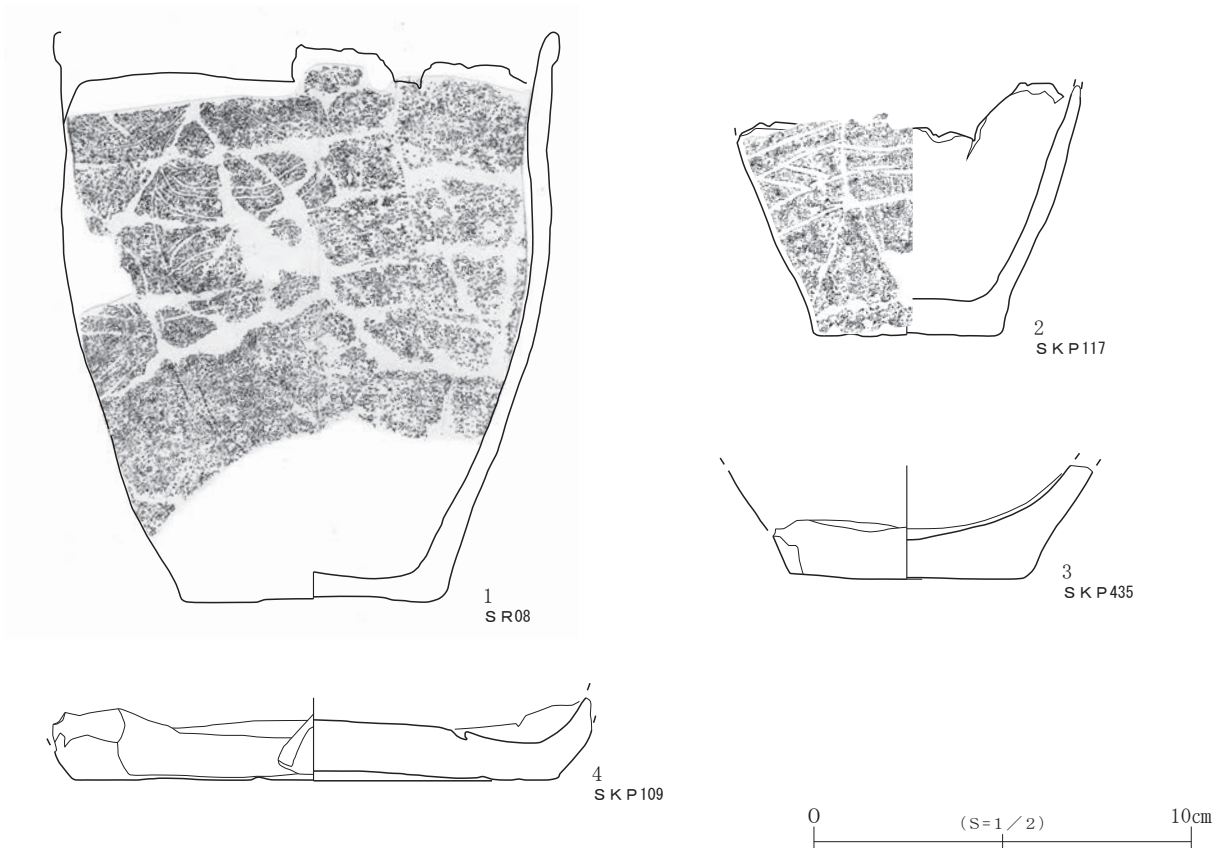
第16図 土坑 SK17・20・21・25

SKP435

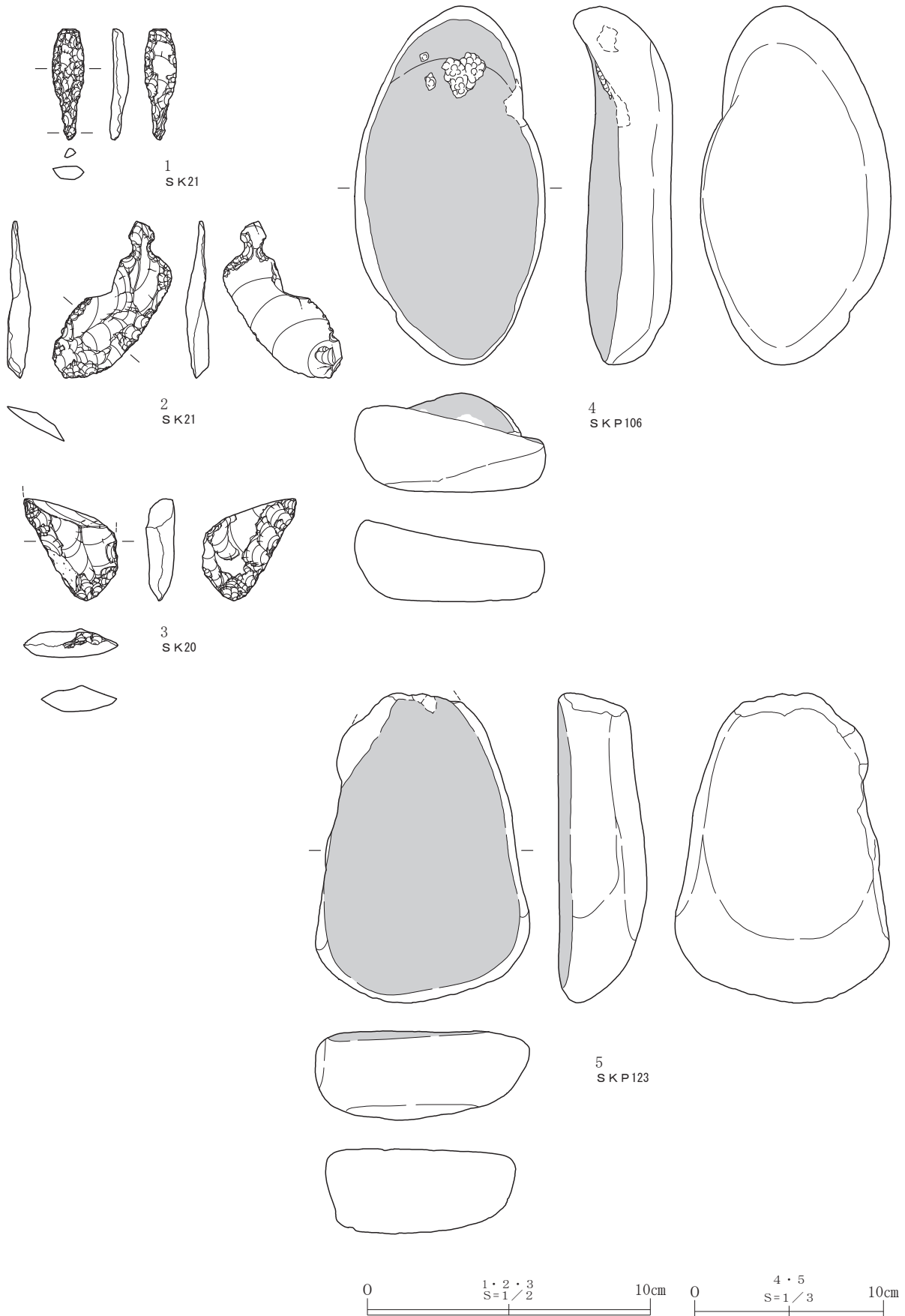
【出土遺物】底径6.2cm、現存高3.0cmを測る深鉢あるいは鉢形土器の底部で、本遺跡における分類基準IV群に属する。

第2表 柱穴様ピット観察表（縄文時代）

番号	位置	長軸(cm)	短軸(cm)	平面形	深さ(m)	底面標高(m)	備考
106	LN48	32	24	楕円形	0.133	34.284	
109	LR50	32	26	楕円形	0.181	34.078	土器出土（第17図4）
114	LR50	18	18	円形	0.155	34.122	
117	LQ51	16	14	円形	0.215	34.042	土器出土（第17図2）
123	LR51	21	19	円形	0.19	34.016	
127	LR51	26	22	円形	0.037	34.144	
132	LT53	24	24	円形	0.13	33.706	
150	LN49	28	26	円形	0.257	34.056	
204	LQ51	25	20	円形	0.276	33.995	
227	LS52	30	26	楕円形	0.26	34.12	
231	LS51	25	24	円形	—	—	
235	LS52	20	18	楕円形	0.21	33.96	
353	MA51	30	24	楕円形	0.168	33.918	
355	ME52	20	20	円形	0.1	33.644	
362	MA49	34	32	不整円形	0.193	34.084	
364	MA50	34	32	不整円形	0.148	34.096	
375	MF52	24	20	楕円形？	0.127	33.525	
396	LQ47	22	18	楕円形	0.190	34.092	
435	LQ47	31	25	—	20.6	34.085	土器出土（第17図3）



第17図 遺構内出土縄文土器



第18図 遺構内出土石器 SK20・21 SKP106・123

(7) 遺構外出土遺物

①土器（第19図～第28図、第3～7表、図版22～38）

縄文土器は以下のように分類した。

第Ⅰ群土器・・・縄文時代前期の土器である。

第Ⅱ群土器・・・縄文時代後期の土器である。

第Ⅲ群土器・・・縄文時代晩期の土器である。

第Ⅳ群土器・・・底部を一括した。

第Ⅰ群土器（第19図1～6）：いずれも胎土に植物繊維が見られる。1は綾絡文、2は羽状縄文、3、4は異なる原体を交互に回転して施された綾杉文がそれぞれ施される。5、6は表面の摩滅が著しく文様は判然としない。

第Ⅱ群土器については、沈線文が施されるものを1類、縄文が施されるものを2類と細分した。なお、無文のものは細分しないで、第Ⅱ群土器として扱った。

第Ⅱ群土器1類（第19図7～第26図）：第19図7は短い口縁端部が直立する小型の壺で、沈線文が施されている。8は口縁端部が外側に突出し、口縁直下に平行沈線がある。9は波状口縁の頂部より隆帯が垂下し、それに沿うように縦位の沈線が見られる。垂下する隆帯の凸部には縦方向、隆帯に直交するように描かれる平行沈線間には横方向に、それぞれ連続する刺突文が見られる。10、11には隆帯と平行沈線を組み合わせた所謂半肉彫手法による文様が施され、その上に粘土紐が8字状に貼り付けられている。12、13には垂下する隆帯があり、隆帯に直交する横位の平行沈線が見られる。12の平行沈線間には刺突が施されている。14には縦位の隆帯が見られ、胴部には斜位の沈線文がある。15、18、19はいずれも細い粘土紐で隆帯が作り付けられており、隆帯の凸部には大小の刺突が施されている。16は横位の隆帯の下部に楕円状の沈線文がある。17は横位の角張った隆帯がある。20は左右に分かれる貼り付け文がある。21～25は頸部及び肩部と考えられ、21、24、25には沈線文が、22には刺突文が見られる。23には横位の隆帯上に刺突が施され、隆帯に沿って細く鋭い沈線が短いピッチで引かれている。第20図1～18は、平口縁である。1は1cm程の折り返し口縁である。2の口縁端部には、上から見るとC字状、側面から見るとM字状に粘土紐で作られた装飾が貼り付けられている。浅く細い2本の平行沈線が垂下しており、その右側には擦痕状沈線が施されている。3は直立気味の口縁部から胴部上位にかけての資料である。口縁端部を平坦に調整する際に生じたと考えられる凹凸が所々に認められる。胴部の文様は、平行沈線に蛇行沈線が組み合わさった文様や長方形文がある。4、5にも長方形文がある。6～12は平行、斜位等の沈線文、14、15は擦痕状沈線文が施されている。16～18は無文で、16は器面に粘土紐積み上げ痕が明瞭に見られる。第20図19～23、第21図1～16は、波状口縁である。第20図19は口縁端部に連続して刻目が施されている。21は口縁に沿って連弧文が見られる。22は口縁に沿った沈線と弧状の沈線が組み合わされた文様が施され、矩形を呈する平行沈線もある。23は横位の平行沈線を縦位の短沈線が区画している。第21図1～3は口縁に沿う沈線と1～3条の弧状沈線が連結している。4～13は口縁に沿って平行沈線が施されている。14は口縁端部を短く折り返した痕跡が見られ、縦位には3本の浅い沈線がある。15の横位の擦痕は、器面調整時の工具痕の可能性が高い。16は内面に曲線状の沈線が施されており、口縁が大きく外反する鉢あるいは浅鉢と考えられる。17、18は口縁端部を欠損した資料で、横位、斜位の沈線が施されている。19～22は無文で

ある。19と22は同一個体と見られ、口縁付近に横方向の調整痕が認められる。第22図1～19、第23図1、16は、口縁部以外で平行沈線が施されている資料である。1～9は、1～3条の横位の平行沈線が施される。10～29は平行沈線と弧状、蛇行、斜行等の沈線が組み合わさった文様が施される。21は横位の沈線とハ字状の平行沈線が配置されている。23は平行沈線の上下に斜め方向に短い沈線が連続して描かれている。24は平行沈線の上下に刺突文が施されている。25は横位の沈線の下に列点文が巡っている。26は横位の楕円文が施されている。27～29は平行沈線を縦位の短沈線で仕切っている。第23～25図は平行沈線を持たない資料である。第23図は沈線の曲がりが見られる資料、第24、25図は曲がり少なく直線的な沈線と組み合わさる資料である。第23図1～3は同一個体と見られ、壺形土器の頸部付近の資料である。平行沈線に接して同心円状の文様が縦位に連続して描かれ、左右に平行沈線が充填されている。第24図1は楕円文の下に短い沈線が横位に連続し、その下に沈線が施されており、第22図25と同一個体の可能性がある。3は沈線による2組の帯文が交わり、尖った形状をなしている。6～10、18、19、第25図14、16、18は沈線、平行沈線が組み合わさった文様が施されている。第25図20、24は、幅狭な2本の沈線間にそれぞれ刻目、刺突が施されている。27、28は斜行沈線が網目状に施されている。第26図も平行沈線を持たないもので、1～8は縦位の直線的な沈線が施されている。9～21は縦方向に直線的な沈線が施され、蛇行沈線、斜行沈線と組み合わさっている。22～29は、2～3条の幅狭な沈線による渦状文、蛇行文が見られる。29は壺の肩部と見られ、頸部との境目に沈線が巡らされ、その下に刺突が施されている。

第Ⅱ群土器2類（第27図1～22）：1～14は磨り消し縄文が施されている。1～3は口縁部の資料で、縄文施文後、口縁に沿って平行沈線が施されている。15～22は縄文のみが施されている。23、24は肩部から口縁部に向かって内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反する鉢形土器である。いずれも平行沈線が見られ、24は2段巡る平行沈線間に刺突が施され、その下に蛇行文が描かれている。25は底部で、接地面に小突起が見られる。

第Ⅲ群土器（第27図25・28・29）：28は口縁端部にC字状の刻目文が連続し、口縁直下が工具等により太沈線状に抉られ、沈線内部に刺突が充填的に施されている。29は他に比較して胎土が緻密で砂っぽく、頸部に隆帯が巡る壺形土器と考えられる。

第Ⅳ群土器（第28図）：底径は4.2～13.4cm、厚さは0.8～1.1cmを計り、深鉢や鉢と考えられる。1、2、6は底部から直立気味に立ち上がり、胴部にかけて外傾する。その他は底部から胴部にかけて外傾気味に立ち上がる。1、3、12は接地面の中央部が凹み上げ底気味になっており、その他は平底である。底部付近の器面調整はケズリとナデ調整が見られる。胎土には概ね径1mm前後の白色粒が含まれており、焼成は良好である。

②土製品（第27図26・27・第7表・図版38）

土製品は2点出土した。

26はキノコ形土製品で、傘部の直径3.6cm、柄高1.0cm、柄の断面形が二等辺三角形を呈する。27は環状土製品で、外側が剥落しており主たる文様は不明であるが、上端には刺突が巡っている。中央の空間部は内側の真ん中が括れる形になっており、上下端の最大径6.1cm、真ん中の括れ部分が径3.2cmを計り、断面形状はΣ形である。

第3表 遺構外出土縄文土器観察表(1)

番号	器種	出土地点(区)	色調(底面除く外面)	文様	分類	備考
第19図1	深鉢形土器	L S 51	2.5YR赤灰色4/1	綾絡文	I	繊維混入
第19図2	深鉢形土器	MC 51	5YR明赤褐色5/6	羽状縄文	I	繊維混入
第19図3	深鉢形土器	MA 51	7.5YRにぶい橙色6/4	羽状縄文	I	繊維混入
第19図4	深鉢形土器	MD 52	7.5YRにぶい橙色7/4	羽状縄文	I	繊維混入
第19図5	深鉢形土器	MC 51	5YR橙色6/8	0段多条	I	
第19図6	深鉢形土器	L R 51	5YR橙色6/8	無文	I	繊維混入
第19図7	壺形土器	MB 51	7.5YRにぶい橙7/3	沈線文	II-1	口唇肥厚
第19図8	壺形土器	MB 51	10YR黒褐色3/1	貼り付け文	II-1	
第19図9	壺形土器	MC 51	10YRにぶい黄褐色7/2	沈線・隆帯・刺突文	II-1	
第19図10	壺形土器	MB 51	2.5Y黒色2/1	沈線・隆帯文	II-1	
第19図11	壺形土器	MB 51	2.5Y黄灰色4/1	沈線・隆帯文	II-1	
第19図12	壺形土器	MB 50	7.5YR灰褐色6/2	沈線・隆帯・刺突文	II-1	
第19図13	壺形土器	MB 50	7.5YRにぶい橙色6/4	沈線・隆帯	II-1	
第19図14	壺形土器	L R 51	10YRにぶい黄橙色6/3	沈線・隆帯・刺突文	II-1	
第19図15	壺形土器	MD 50	5YRにぶい赤褐色5/3	沈線・隆帯・刺突文	II-1	
第19図16	壺形土器	MB 51	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線・貼り付け文	II-1	
第19図17	壺形土器	MB 52	7.5YR灰褐色5/2	隆帯	II-1	
第19図18	壺形土器	MA 51	7.5YR褐灰色5/1	沈線・隆帯・刺突文	II-1	
第19図19	壺形土器	MB 50	10YR灰黄褐色6/2	沈線・隆帯・刺突文	II-1	
第19図20	壺形土器	MC 51	10YR灰黄褐色5/2	沈線・貼り付け文	II-1	
第19図21	壺形土器	MB 52	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線・刺突文	II-1	
第19図22	壺形土器	MB 51	2.5YRにぶい赤褐色5/3	刺突文	II-1	
第19図23	壺形土器	MB 51	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線・刺突文	II-1	
第19図24	壺形土器	MC 50	7.5YR灰褐色5/2	沈線文	II-1	
第19図25	壺形土器	MC 51	2.5YR橙色6/6	沈線文	II-1	
第19図26	壺形土器	MB 51	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	II-1	
第20図1	深鉢形土器	MB 52	7.5YRにぶい橙色7/3	沈線文	II-1	二重口縁
第20図2	深鉢形土器	MD 51	7.5YR褐灰色4/1	貼り付け文	II-1	
第20図3	深鉢形土器	MB 50・51	7.5YR灰褐色5/2	沈線文	II-1	口唇部平坦
第20図4	深鉢形土器	MB 51	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	II-1	
第20図5	深鉢形土器	MD 51	5YRにぶい橙色6/4	沈線文	II-1	
第20図6	深鉢形土器	MC 51	N黒色2/	沈線文	II-1	
第20図7	深鉢形土器	MC 51	10YR褐灰色4/1	沈線文	II-1	
第20図8	深鉢形土器	MB 52	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	II-1	
第20図9	深鉢形土器	MC 51	5YR橙色7/6	沈線文	II-1	
第20図10	深鉢形土器	L R 51	7.5YR橙色7/6	沈線文	II-1	
第20図11	深鉢形土器	MB 51	7.5YRにぶい褐色6/3	沈線文	II-1	
第20図12	深鉢形土器	MB 52	7.5YRにぶい橙7/4	沈線文	II-1	
第20図13	深鉢形土器	MB 51	7.5YR灰褐色5/2	沈線文	II-1	
第20図14	深鉢形土器	MB 51	7.5YRにぶい橙色7/3	沈線文	II-1	
第20図15	深鉢形土器	MB 51	7.5YR灰褐色5/2	沈線文	II-1	
第20図16	深鉢形土器	MC 50	7.5YRにぶい橙7/3	無文	II	粘土紐接合痕
第20図17	深鉢形土器	MC 52	7.5YR灰褐色5/4	無文	II	
第20図18	深鉢形土器	MB 51	7.5YR灰褐色5/2	無文	II	
第20図19	深鉢形土器	MB 52	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線・刻文	II-1	
第20図20	深鉢形土器	MC 51	7.5YRにぶい橙色6/4	沈線・刻文	II-1	
第20図21	深鉢形土器	MC 51	7.5YRにぶい橙色6/4	沈線文	II-1	
第20図22	深鉢形土器	MC 50	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	II-1	
第20図23	深鉢形土器	MA 52	7.5YRにぶい橙色7/3	沈線文	II-1	
第21図1	深鉢形土器	MC 51	7.5YR灰褐色5/2	沈線文	II-1	
第21図2	深鉢形土器	MB 51	7.5YR浅黄橙色8/4	沈線文	II-1	
第21図3	深鉢形土器	MC 50	7.5YR灰褐色6/2	沈線文	II-1	

第4表 遺構外出土縄文土器観察表(2)

番号	器種	出土地点(区)	色調(底面除く外面)	文様	分類	備考
第21図4	深鉢形土器	MA50	7.5YR浅黄橙色8/3	沈線文	Ⅱ-1	
第21図5	深鉢形土器	MC52	7.5YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第21図6	深鉢形土器	MA51	7.5YR褐灰色4/1	沈線文	Ⅱ-1	
第21図7	深鉢形土器	MB52	7.5YR浅黄橙色8/3	沈線文	Ⅱ-1	
第21図8	深鉢形土器	MB51	7.5YR褐灰色4/1	沈線文	Ⅱ-1	
第21図9	深鉢形土器	MB51	7.5YRにぶい褐色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第21図10	深鉢形土器	MB51	7.5YR褐灰色4/1	沈線文	Ⅱ-1	
第21図11	深鉢形土器	MA50	7.5YR褐灰色4/1	沈線文	Ⅱ-1	
第21図12	深鉢形土器	MD50	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第21図13	深鉢形土器	MB50	7.5YR灰褐色5/2	沈線文	Ⅱ-1	外面に煤状炭化物
第21図14	深鉢形土器	MB51	7.5YRにぶい橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	粘土紐接合痕
第21図15	深鉢形土器	MB51	7.5YR灰褐色6/2	沈線文	Ⅱ-1	
第21図16	深鉢形土器	MB51	7.5YRにぶい橙色7/3	沈線文(内面)	Ⅱ-1	
第21図17	深鉢形土器	MB51	10YR褐灰色5/1	沈線文	Ⅱ-1	
第21図18	深鉢形土器	MC50	10YR浅黄橙色8/3	沈線文	Ⅱ-1	
第21図19	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色7/3	無文	Ⅱ	
第21図20	深鉢形土器	LS48	10YR灰黄褐色5/2	無文	Ⅱ	
第21図21	深鉢形土器	MB50	10YR灰黄褐色5/2	無文	Ⅱ	
第21図22	深鉢形土器	MB50	7.5YRにぶい橙色7/4	無文	Ⅱ	
第22図1	深鉢形土器	MD51	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第22図2	深鉢形土器	MB52	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第22図3	深鉢形土器	MB・MC	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第22図4	深鉢形土器	MB50	7.5YRにぶい褐色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第22図5	深鉢形土器	MB51	7.5YRにぶい褐色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第22図6	深鉢形土器	LT51	5YR橙6/6	沈線文	Ⅱ-1	
第22図7	深鉢形土器	MC51	7.5YRにぶい橙7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第22図8	深鉢形土器	MC49	10YR黒褐色3/1	沈線文	Ⅱ-1	
第22図9	深鉢形土器	MB52	7.5YR灰褐色4/2	沈線文	Ⅱ-1	
第22図10	深鉢形土器	MB51	10YR黒褐色3/1	沈線文	Ⅱ-1	
第22図11	深鉢形土器	MB51	10YR灰黄褐色5/2	沈線文	Ⅱ-1	
第22図12	深鉢形土器	LS50	10YRにぶい黄橙色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第22図13	深鉢形土器	MB50	10YRにぶい黄褐色5/3	沈線文	Ⅱ-1	
第22図14	深鉢形土器	MD51	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第22図15	深鉢形土器	MA52	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第22図16	深鉢形土器	MB51	10YR黒2/1	沈線文	Ⅱ-1	
第22図17	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第22図18	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第22図19	深鉢形土器	ME54	7.5YRにぶい橙色6/4	沈線文	Ⅱ-1	
第22図20	深鉢形土器	MC50	7.5YR橙色7/6	沈線文	Ⅱ-1	
第22図21	深鉢形土器	MA50	2.5YR橙色6/6	沈線文	Ⅱ-1	
第22図22	深鉢形土器	MB・MC	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第22図23	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色7/3	沈・短沈・刻線文・刺突文	Ⅱ-1	
第22図24	深鉢形土器	MA50	10YRにぶい黄橙色6/3	沈線・刺突文	Ⅱ-1	
第22図25	深鉢形土器	MB50	10YRにぶい黄橙色6/4	沈線・列点文	Ⅱ-1	
第22図26	深鉢形土器	MC51	7.5YRにぶい橙色6/4	沈線文	Ⅱ-1	
第22図27	深鉢形土器	MD51	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第22図28	深鉢形土器	MB51	10YR褐灰色4/1	沈線文	Ⅱ-1	
第22図29	深鉢形土器	MC51	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第23図1	深鉢形土器	MB50・51	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第23図2	深鉢形土器	MB51	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第23図3	深鉢形土器	MB51	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	外面に煤状炭化物
第23図4	深鉢形土器	1トレンチ	10YRにぶい黄橙色	沈線文	Ⅱ-1	

第5表 遺構外出土縄文土器観察表(3)

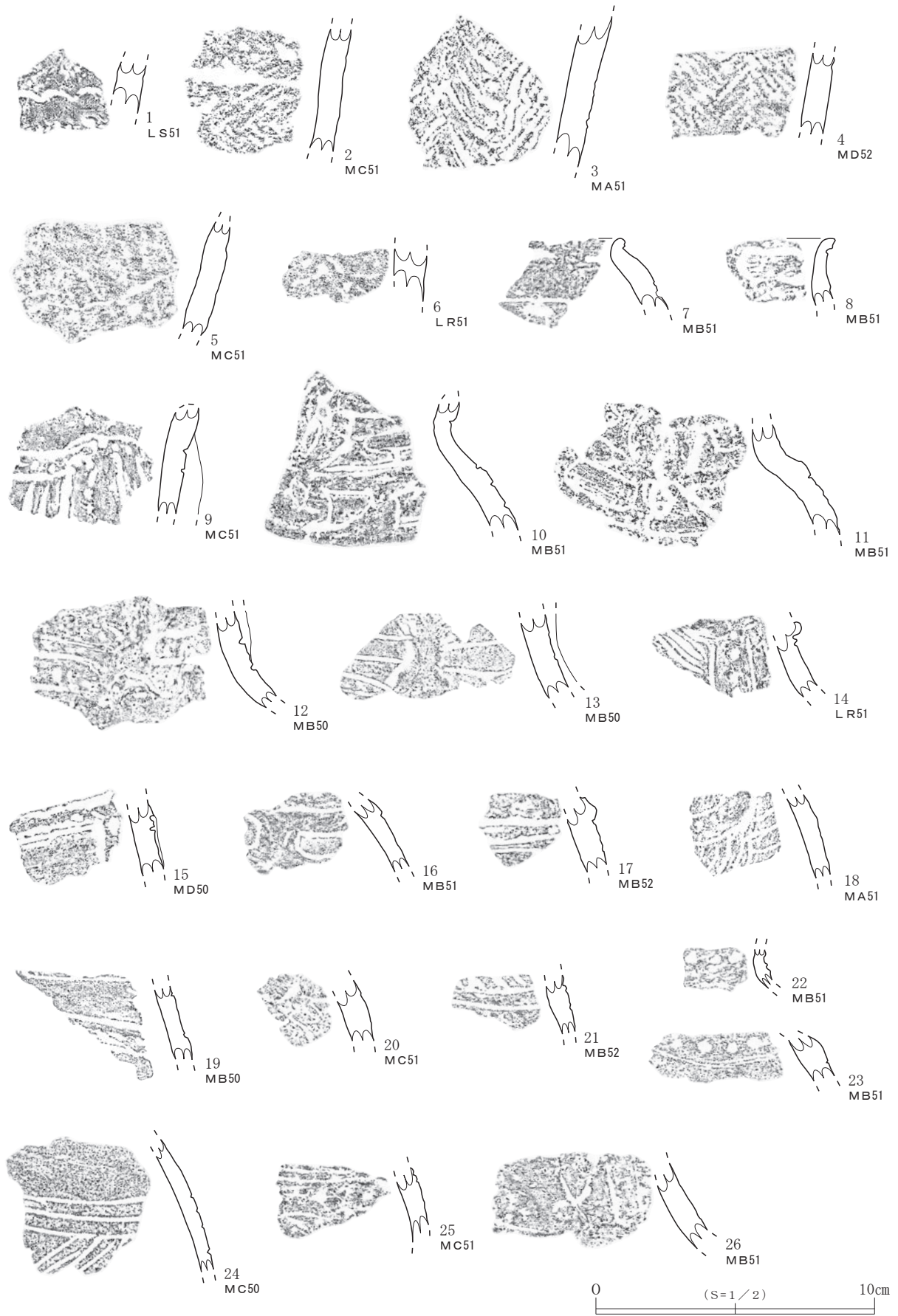
番号	器種	出土地点(区)	色調(底面除く外面)	文様	分類	備考
第23図5	深鉢形土器	MA52	10YR灰黄褐色6/2	沈線文	Ⅱ-1	
第23図6	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第23図7	深鉢形土器	MC50	10YRにぶい黄橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第23図8	深鉢形土器	MB・MC	5YR橙6/6	沈線文	Ⅱ-1	
第23図9	深鉢形土器	表採	10YRにぶい黄橙色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第23図10	深鉢形土器	ME52	7.5YRにぶい橙色6/4	沈線文	Ⅱ-1	
第23図11	深鉢形土器	MB52	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第23図12	深鉢形土器	MB51	5YR橙色7/6	沈線文	Ⅱ-1	
第23図13	深鉢形土器	MC52	10YRにぶい黄橙色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第23図14	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第23図15	深鉢形土器	MB50	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第23図16	深鉢形土器	MB51	7.5YRにぶい橙6/4	沈線文	Ⅱ-1	
第23図17	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第23図18	深鉢形土器	MB52	10YRにぶい黄橙7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第23図19	深鉢形土器	MB50	7.5YRにぶい褐色5/3	沈線文	Ⅱ-1	
第23図20	深鉢形土器	MB52	7.5YR褐灰色5/1	沈線文	Ⅱ-1	
第23図21	深鉢形土器	MA51	7.5YRにぶい橙6/4	沈線文	Ⅱ-1	
第23図22	深鉢形土器	MC49	5YR橙6/6	沈線文	Ⅱ-1	
第23図23	深鉢形土器	MB52	2.5YR橙色6/6	沈線文	Ⅱ-1	
第23図24	深鉢形土器	MB50	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第23図25	深鉢形土器	MB51	10YR灰黄褐色6/2	沈線文	Ⅱ-1	
第23図26	深鉢形土器	MC50	7.5YRにぶい褐色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第23図27	深鉢形土器	1トレンチ	7.5YRにぶい橙6/4	沈線文	Ⅱ-1	
第23図28	深鉢形土器	L T・MA50	5YRにぶい橙6/4	沈線文	Ⅱ-1	
第24図1	深鉢形土器	表採	7.5YRにぶい褐色	沈線・短沈線文	Ⅱ-1	
第24図2	深鉢形土器	ME54	7.5YRにぶい褐色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第24図3	深鉢形土器	MB・MC51	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第24図4	深鉢形土器	MC52	7.5YRにぶい橙7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第24図5	深鉢形土器	LO47	10YR褐灰色4/1	沈線文	Ⅱ-1	粘土紐接合痕
第24図6	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色6/3	沈線文	Ⅱ-1	外面に煤状炭化物
第24図7	深鉢形土器	MB50	7.5YR灰褐色4/2	沈線文	Ⅱ-1	
第24図8	深鉢形土器	MB50	10YR灰黄褐色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第24図9	深鉢形土器	MB51	10YR灰黄褐色4/2	沈線文	Ⅱ-1	
第24図10	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第24図11	深鉢形土器	MB50	10YR灰黄褐色4/2	沈線文	Ⅱ-1	
第24図12	深鉢形土器	MB50	10YRにぶい黄橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第24図13	深鉢形土器	MC51	7.5YR橙色6/6	沈線文	Ⅱ-1	
第24図14	深鉢形土器	MC51	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第24図15	深鉢形土器	LR51	10YRにぶい黄橙色7/2	沈線文	Ⅱ-1	
第24図16	深鉢形土器	表採	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第24図17	深鉢形土器	MF52	10YRにぶい黄橙7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第24図18	深鉢形土器	MB52	10YR灰黄褐色5/2	沈線文	Ⅱ-1	外面に煤状炭化物
第24図19	深鉢形土器	MB52	10YRにぶい黄橙7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第24図20	深鉢形土器	MB52	10YR黒褐色3/1	沈線文	Ⅱ-1	外面に煤状炭化物
第24図21	深鉢形土器	MB・MC51	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第24図22	深鉢形土器	LS51	7.5YR褐灰色4/1	沈線文	Ⅱ-1	
第24図23	深鉢形土器	MF52	7.5YR褐灰色6/1	沈線文	Ⅱ-1	
第24図24	深鉢形土器	MB52	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第24図25	深鉢形土器	MB52	7.5YRにぶい褐色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第24図26	深鉢形土器	MB52	7.5YRにぶい褐色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第24図27	深鉢形土器	MB51	7.5YR褐灰色5/1	沈線文	Ⅱ-1	
第24図28	深鉢形土器	MB52	5YRにぶい赤褐色5/4	沈線文	Ⅱ-1	

第6表 遺構外出土縄文土器観察表(4)

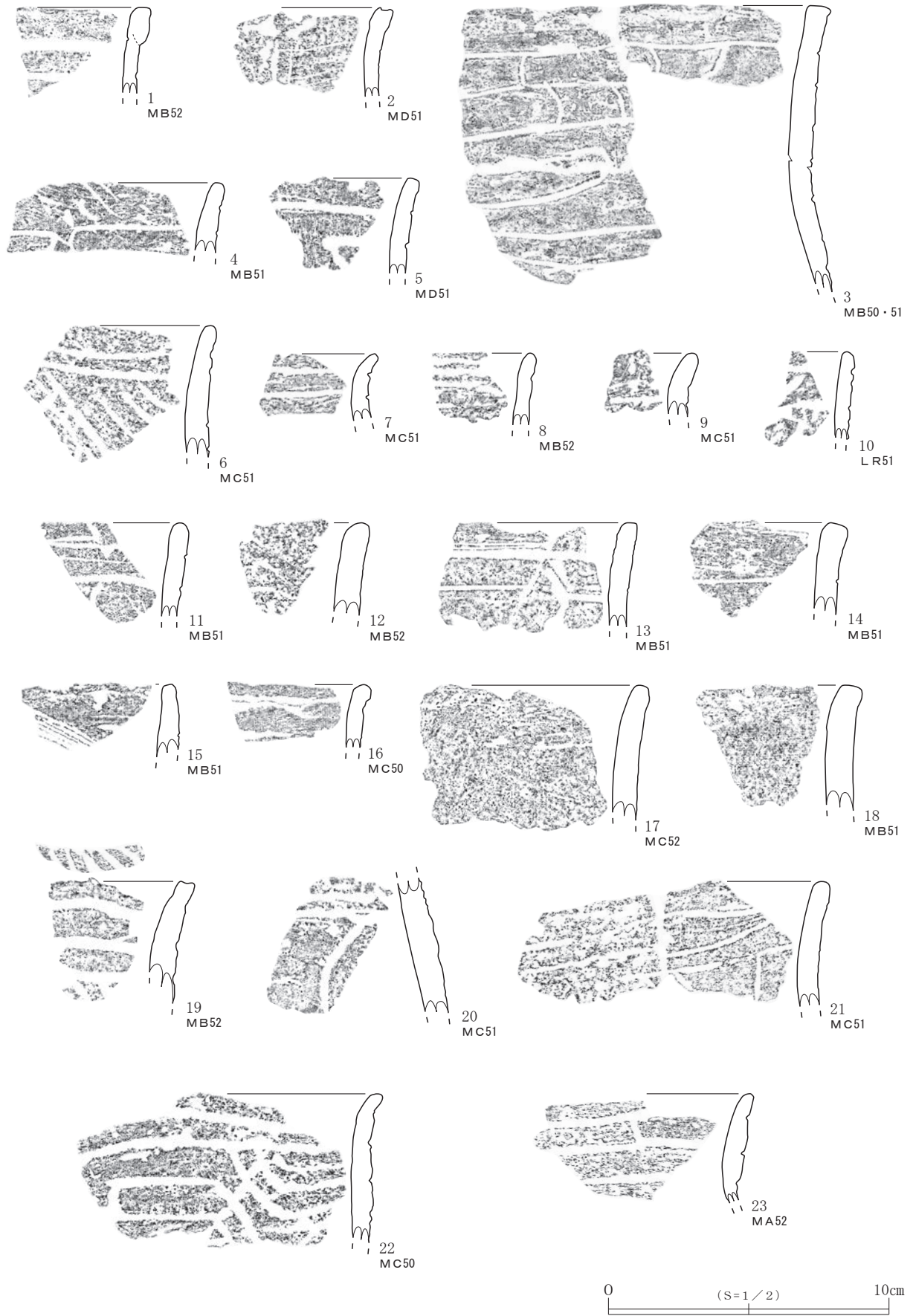
番号	器種	出土地点(区)	色調(底面除く外面)	文様	分類	備考
第25図1	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第25図2	深鉢形土器	MB51	7.5YRにぶい橙色6/4	沈線文	Ⅱ-1	内面に煤状炭化物
第25図3	深鉢形土器	MB51	5YRにぶい橙色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第25図4	深鉢形土器	LS49	10YR浅黄橙色8/4	沈線文	Ⅱ-1	
第25図5	深鉢形土器	MB・MC51	10YRにぶい黄橙7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第25図6	深鉢形土器	MB50	7.5YR灰褐色5/2	沈線文	Ⅱ-1	
第25図7	深鉢形土器	MB50	5YRにぶい赤褐色5/3	沈線文	Ⅱ-1	
第25図8	深鉢形土器	MB51	7.5YRにぶい橙6/4	沈線文	Ⅱ-1	
第25図9	深鉢形土器	MB52	7.5YR灰褐色6/2	沈線文	Ⅱ-1	
第25図10	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第25図11	深鉢形土器	MB51	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第25図12	深鉢形土器	MD50	10YRにぶい黄橙色7/2	沈線文	Ⅱ-1	
第25図13	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第25図14	深鉢形土器	MB52	10YRにぶい黄橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第25図15	深鉢形土器	MA52	7.5YRにぶい橙色6/4	沈線文	Ⅱ-1	
第25図16	深鉢形土器	MB51	7.5YRにぶい褐色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第25図17	深鉢形土器	MC51	7.5YR褐灰色4/1	沈線文	Ⅱ-1	
第25図18	深鉢形土器	ME54	5YRにぶい橙6/4	沈線文	Ⅱ-1	
第25図19	深鉢形土器	MC51	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第25図20	深鉢形土器	LT51	5YR橙色6/6	沈線・刻文	Ⅱ-1	
第25図21	深鉢形土器	MB51	7.5YR灰褐色5/2	沈線文	Ⅱ-1	
第25図22	深鉢形土器	表採	10YRにぶい黄橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第25図23	深鉢形土器	MB52	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第25図24	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙7/4	沈線・刺突文	Ⅱ-1	
第25図25	深鉢形土器	MB52	5YRにぶい赤褐色5/3	沈線文	Ⅱ-1	
第25図26	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第25図27	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第25図28	深鉢形土器	MC51	7.5YRにぶい橙色6/4	沈線文(格子目)	Ⅱ-1	
第26図1	深鉢形土器	MA49	7.5YRにぶい橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	横線は古い傷跡
第26図2	深鉢形土器	MB52	10YRにぶい黄橙色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第26図3	深鉢形土器	MC51	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第26図4	深鉢形土器	MC52	10YRにぶい黄橙色7/2	沈線文	Ⅱ-1	
第26図5	深鉢形土器	MF52	5YR橙色6/6	沈線文	Ⅱ-1	
第26図6	深鉢形土器	LS50	7.5YR褐灰色4/1	沈線文	Ⅱ-1	
第26図7	深鉢形土器	MB52	5YRにぶい橙色6/4	沈線文	Ⅱ-1	
第26図8	深鉢形土器	MB50	7.5YRにぶい褐色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第26図9	深鉢形土器	MC53	7.5YR灰褐色5/2	沈線文	Ⅱ-1	
第26図10	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第26図11	深鉢形土器	MC51	7.5YRにぶい褐色5/2	沈線文	Ⅱ-1	
第26図12	深鉢形土器	MB・MC51	7.5YRにぶい橙7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第26図13	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第26図14	深鉢形土器	MB51	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第26図15	深鉢形土器	LS51	7.5YR灰褐色4/2	沈線文	Ⅱ-1	
第26図16	深鉢形土器	MC53	7.5YRにぶい褐色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第26図17	深鉢形土器	MC52	7.5YRにぶい褐色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第26図18	深鉢形土器	MB52	7.5YRにぶい橙7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第26図19	深鉢形土器	MB51	2.5Y黄灰色6/1	沈線文	Ⅱ-1	
第26図20	深鉢形土器	MB52	10YRにぶい黄橙色6/3	沈線文	Ⅱ-1	
第26図21	深鉢形土器	MD52	7.5YR灰褐色6/2	沈線文	Ⅱ-1	
第26図22	深鉢形土器	LT51	7.5YR灰褐色4/1	沈線文	Ⅱ-1	表面に黒色付着物
第26図23	深鉢形土器	MB50	7.5YR褐灰色6/1	沈線文	Ⅱ-1	
第26図24	深鉢形土器	MC51	7.5YR褐灰色6/1	沈線文	Ⅱ-1	

第7表 遺構外出土縄文土器観察表(5)・土製品観察表

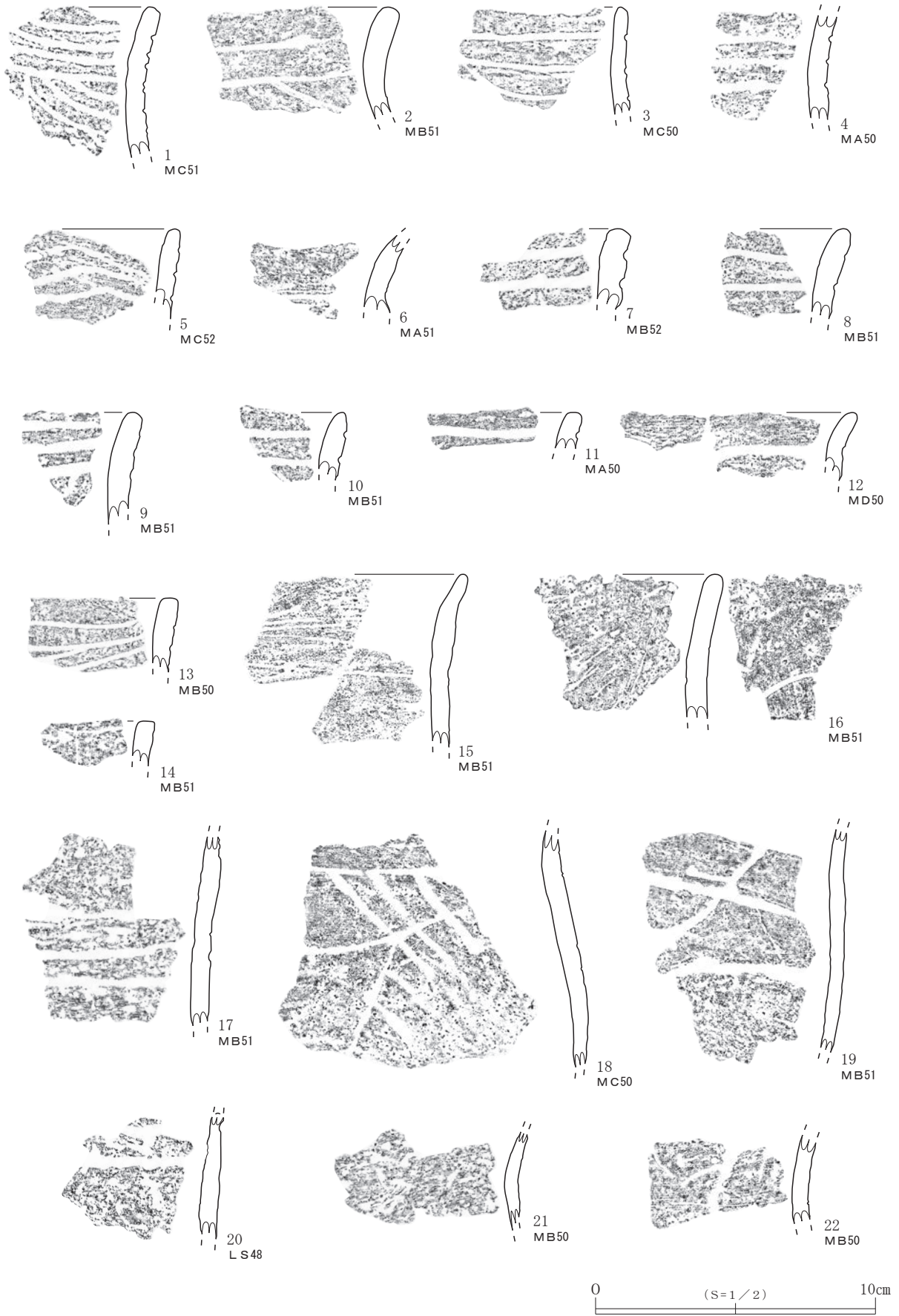
番号	器種	出土地点(区)	色調(底面除く外面)	文様	分類	備考
第26図25	深鉢形土器	MB51	7.5YRにぶい橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第26図26	深鉢形土器	MB51	7.5YR橙色6/6	沈線文	Ⅱ-1	
第26図27	深鉢形土器	MF52	7.5YRにぶい橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第26図28	深鉢形土器	MD50	7.5YRにぶい橙色7/3	沈線文	Ⅱ-1	
第26図29	深鉢形土器	MB52	7.5YR浅黄橙色8/6	沈線・刺突文	Ⅱ-1	
第27図1	深鉢形土器	MC51	7.5YRにぶい褐色6/3	縄文・沈線	Ⅱ-2	
第27図2	深鉢形土器	MB51	7.5YR黒褐色3/1	縄文・沈線	Ⅱ-2	
第27図3	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色	縄文・沈線	Ⅱ-2	
第27図4	深鉢形土器	MB51	10YR灰黄褐色5/2	縄文・沈線	Ⅱ-2	
第27図5	深鉢形土器	MC51	10YRにぶい黄橙色7/3	縄文・沈線	Ⅱ-2	
第27図6	深鉢形土器	MC50	10YRにぶい黄橙色7/3	縄文・沈線	Ⅱ-2	
第27図7	深鉢形土器	MB50	10YRにぶい黄橙色6/3	縄文・沈線	Ⅱ-2	
第27図8	深鉢形土器	MB・MC51	10YRにぶい黄橙色7/3	縄文・沈線	Ⅱ-2	
第27図9	深鉢形土器	MA51	7.5YRにぶい褐色5/3	縄文・沈線	Ⅱ-2	
第27図10	深鉢形土器	MA51	7.5YR褐灰色4/1	縄文・沈線	Ⅱ-2	
第27図11	深鉢形土器	MC51	7.5YR灰褐色6/2	縄文・沈線	Ⅱ-2	
第27図12	深鉢形土器	MB52	10YRにぶい黄橙色6/4	縄文・沈線	Ⅱ-2	
第27図13	深鉢形土器	MC51	10YRにぶい黄橙色7/3	縄文・沈線	Ⅱ-2	
第27図14	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色6/3	縄文・沈線	Ⅱ-2	
第27図15	深鉢形土器	MB50	5YRにぶい橙色6/3	縄文	Ⅱ-2	
第27図16	深鉢形土器	MF56	10YRにぶい黄橙色7/3	縄文	Ⅱ-2	
第27図17	深鉢形土器	MB52	7.5YR橙色7/6	縄文	Ⅱ-2	
第27図18	深鉢形土器	MB52	7.5YR橙色7/4	縄文	Ⅱ-2	
第27図19	深鉢形土器	MB52	7.5YR橙色7/6	縄文	Ⅱ-2	
第27図20	深鉢形土器	MA52	7.5YR橙色7/6	縄文	Ⅱ-2	
第27図21	深鉢形土器	MB52	7.5YRにぶい橙色7/4	縄文	Ⅱ-2	
第27図22	深鉢形土器	MB51	10YRにぶい黄橙色7/4	縄文	Ⅱ-2	
第27図23	鉢形土器	LR51	7.5YR橙色6/6	沈線文	Ⅱ-1	
第27図24	鉢形土器	MB52	10YRにぶい黄橙色7/4	沈線文	Ⅱ-1	
第27図25	鉢形土器	表採	10YR褐灰色4/1	—	Ⅲ	
第27図26	キノコ形土製品	MC51	10YRにぶい黄橙色7/4	—	土製品	
第27図27	環状土製品	MC51・52	2.5YR黄灰色5/1	刺突文	土製品	
第27図28	注口土器	MB51	10YR灰黄褐色5/2	刻文・刺突文	Ⅲ	外面に煤状炭化物
第27図29	壺形土器	ME51	10YR灰黄褐色6/2	隆起線文	Ⅲ	
第28図1	深鉢形土器	MD51	5YRにぶい橙色7/4	—	Ⅳ	
第28図2	深鉢形土器	MC50	5YRにぶい橙色7/3	—	Ⅳ	
第28図3	深鉢形土器	MB50	5YRにぶい橙色7/3	—	Ⅳ	
第28図4	深鉢形土器	MC50	5YR灰褐色6/2	—	Ⅳ	
第28図5	深鉢形土器	MC53	10YR浅黄橙色8/4	—	Ⅳ	
第28図6	深鉢形土器	MC51	10YRにぶい黄橙色7/4	—	Ⅳ	
第28図7	深鉢形土器	MB・MC	7.5YR橙色6/6	—	Ⅳ	
第28図8	深鉢形土器	MB51	7.5YRにぶい褐色6/3	—	Ⅳ	
第28図9	深鉢形土器	MB51	7.5YRにぶい橙色7/3	—	Ⅳ	
第28図10	深鉢形土器	MC53	7.5YRにぶい橙色7/3	—	Ⅳ	
第28図11	深鉢形土器	MC51	7.5YR灰褐色6/2	—	Ⅳ	
第28図12	深鉢形土器	MB52	5YR橙色6/6	—	Ⅳ	
第28図13	深鉢形土器	MC51	10YRにぶい黄橙色7/3	—	Ⅳ	
第28図14	深鉢形土器	表採	10YRにぶい黄橙色7/3	—	Ⅳ	底部に煤状炭化物
第28図15	深鉢形土器	MB51	10YR浅黄橙色8/3	—	Ⅳ	
第28図16	深鉢形土器	LR51	7.5YR橙6/6	—	Ⅳ	
第28図17	深鉢形土器	MB50	5YRにぶい橙色7/3	—	Ⅳ	
第28図18	深鉢形土器	MC53	5YRにぶい橙色7/3	—	Ⅳ	



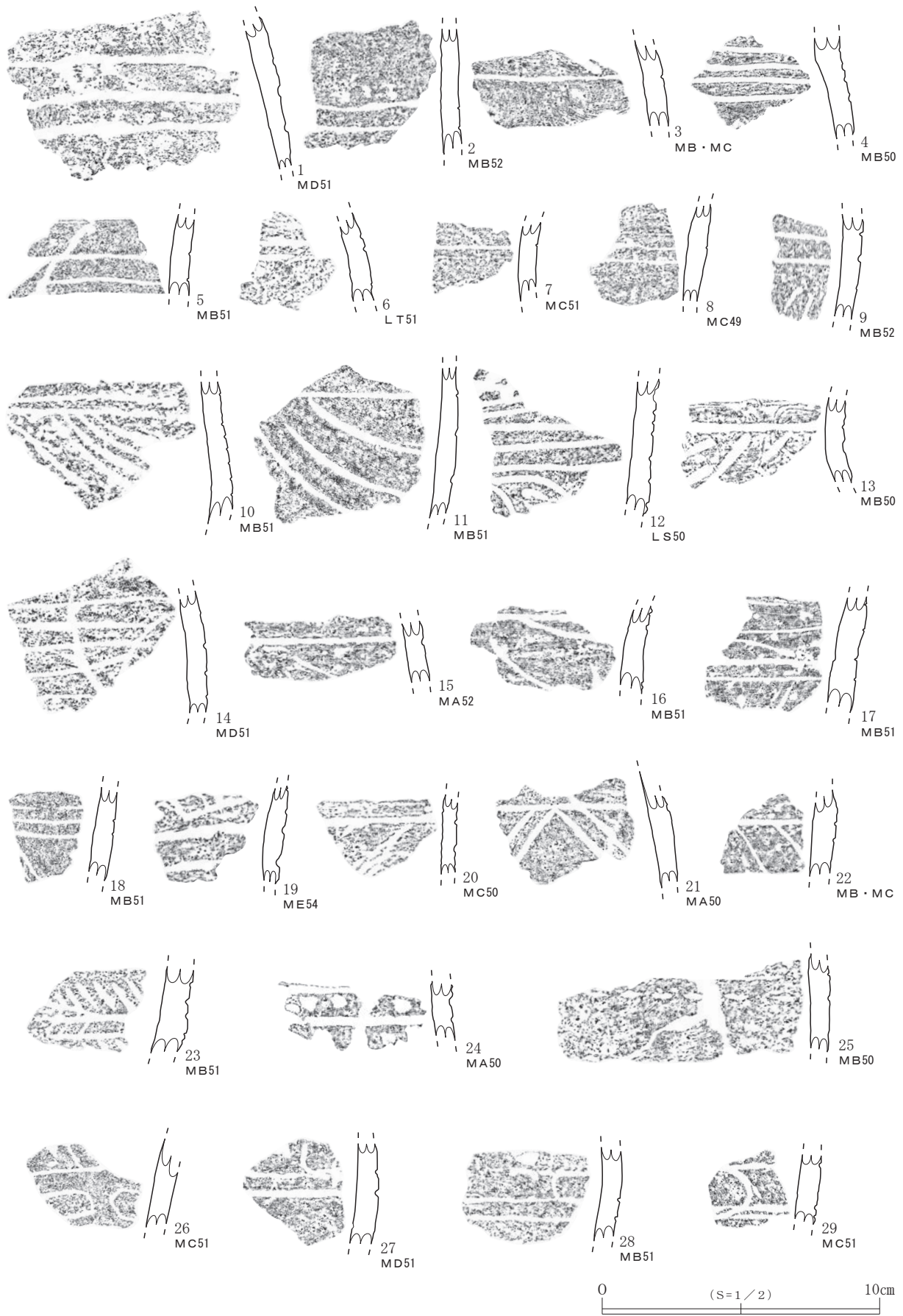
第19図 遺構外出土縄文土器(1)



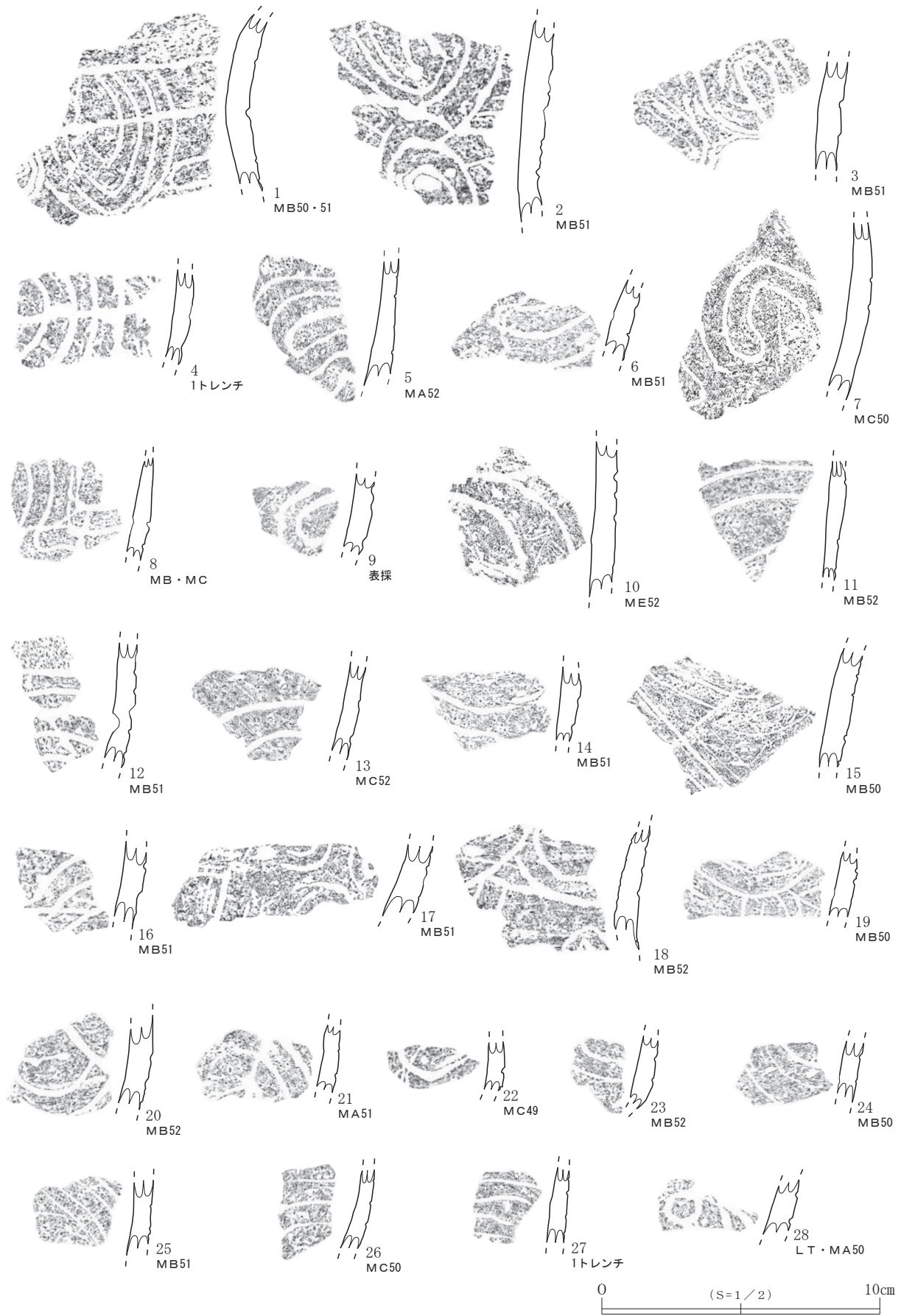
第20図 遺構外出土縄文土器(2)



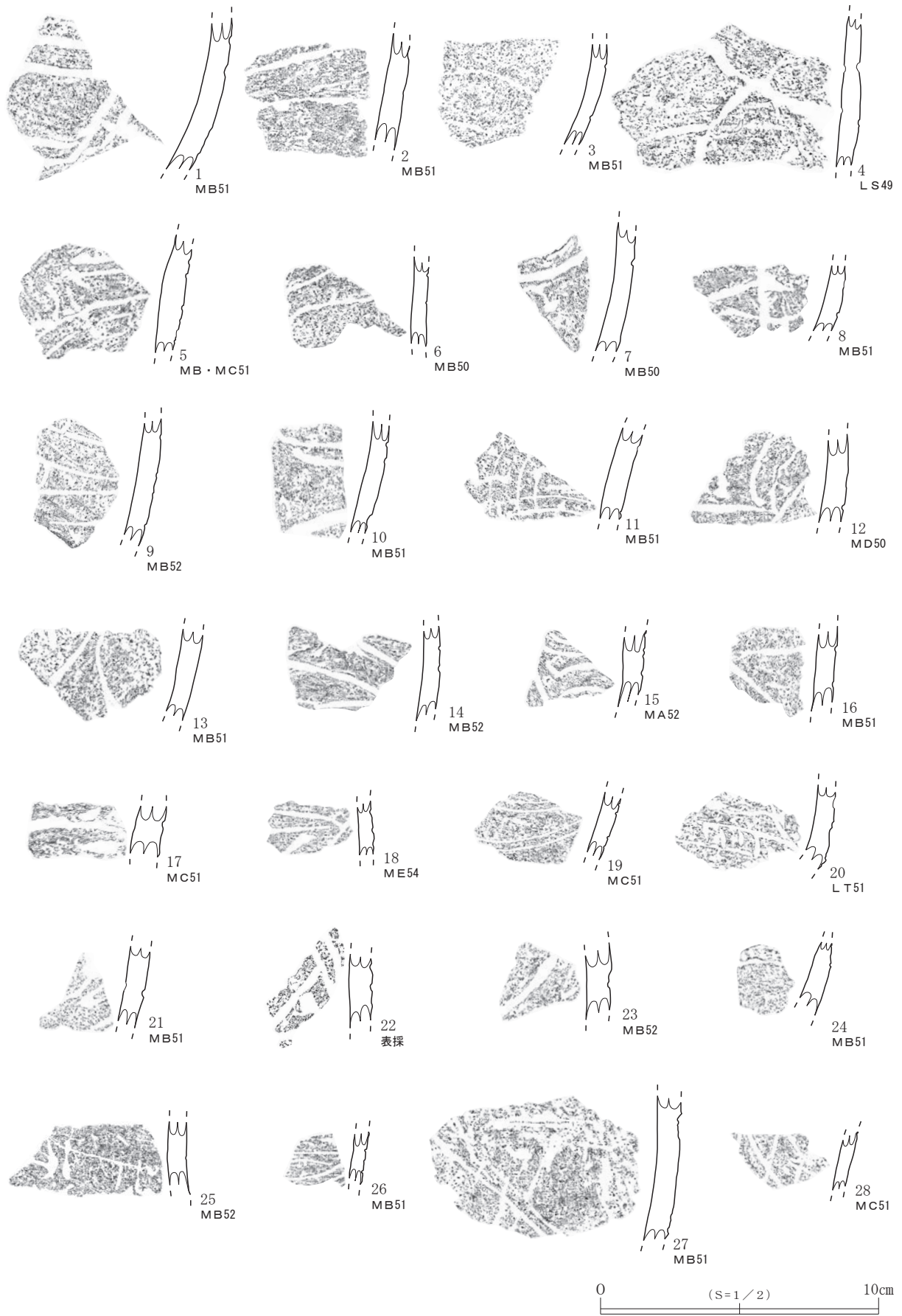
第21図 遺構外出土縄文土器(3)



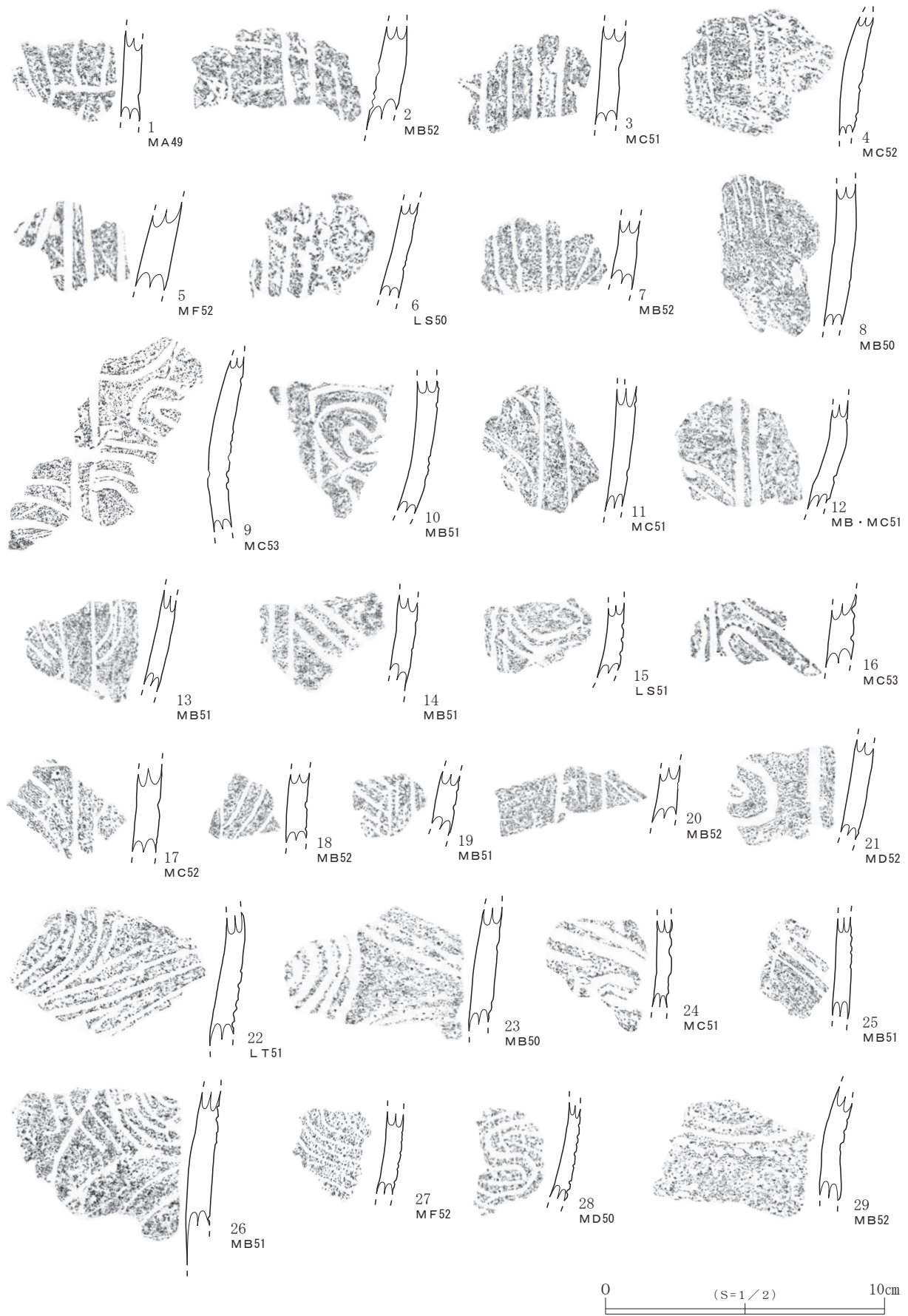
第22図 遺構外出土縄文土器（4）



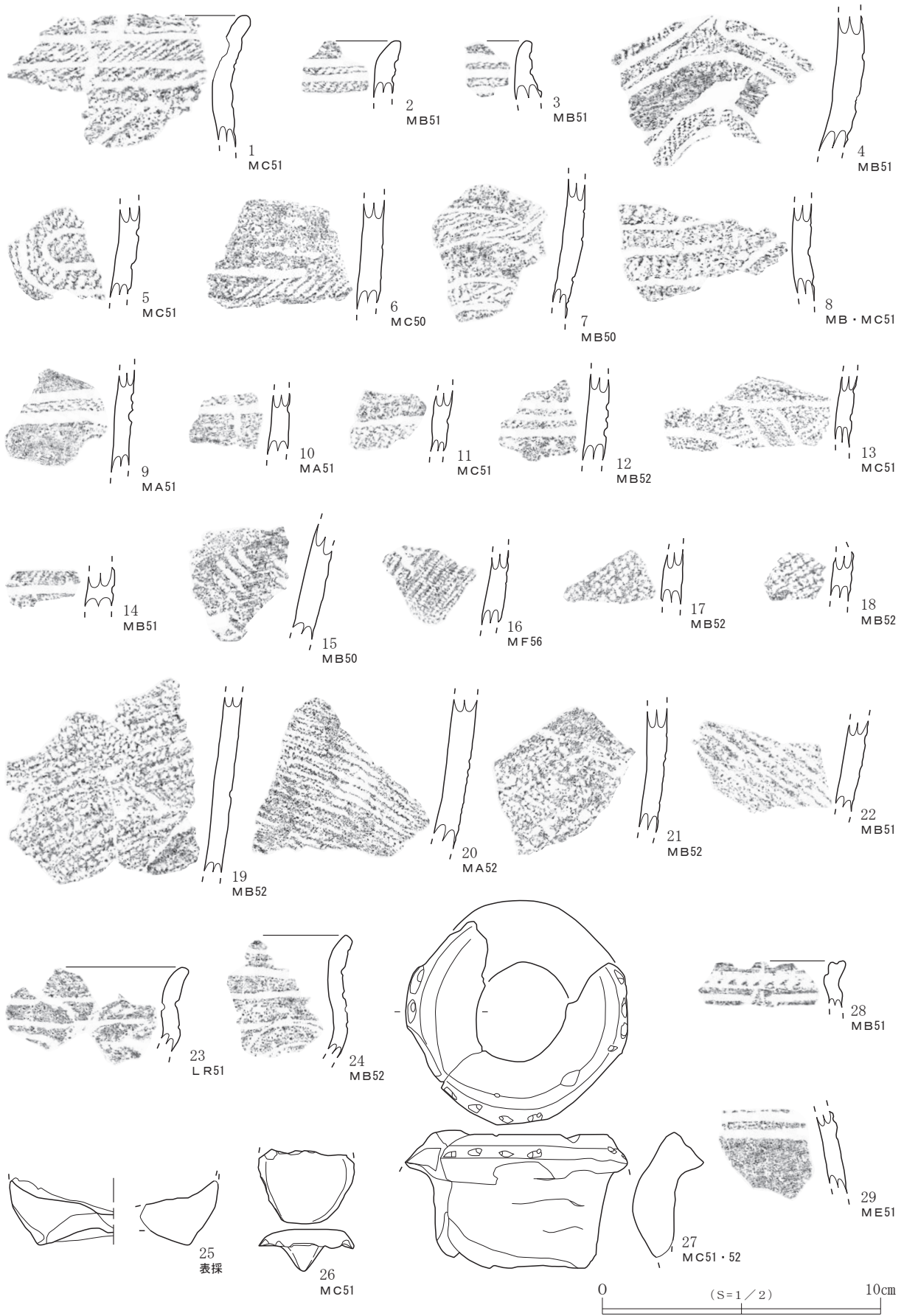
第23図 遺構外出土縄文土器（5）



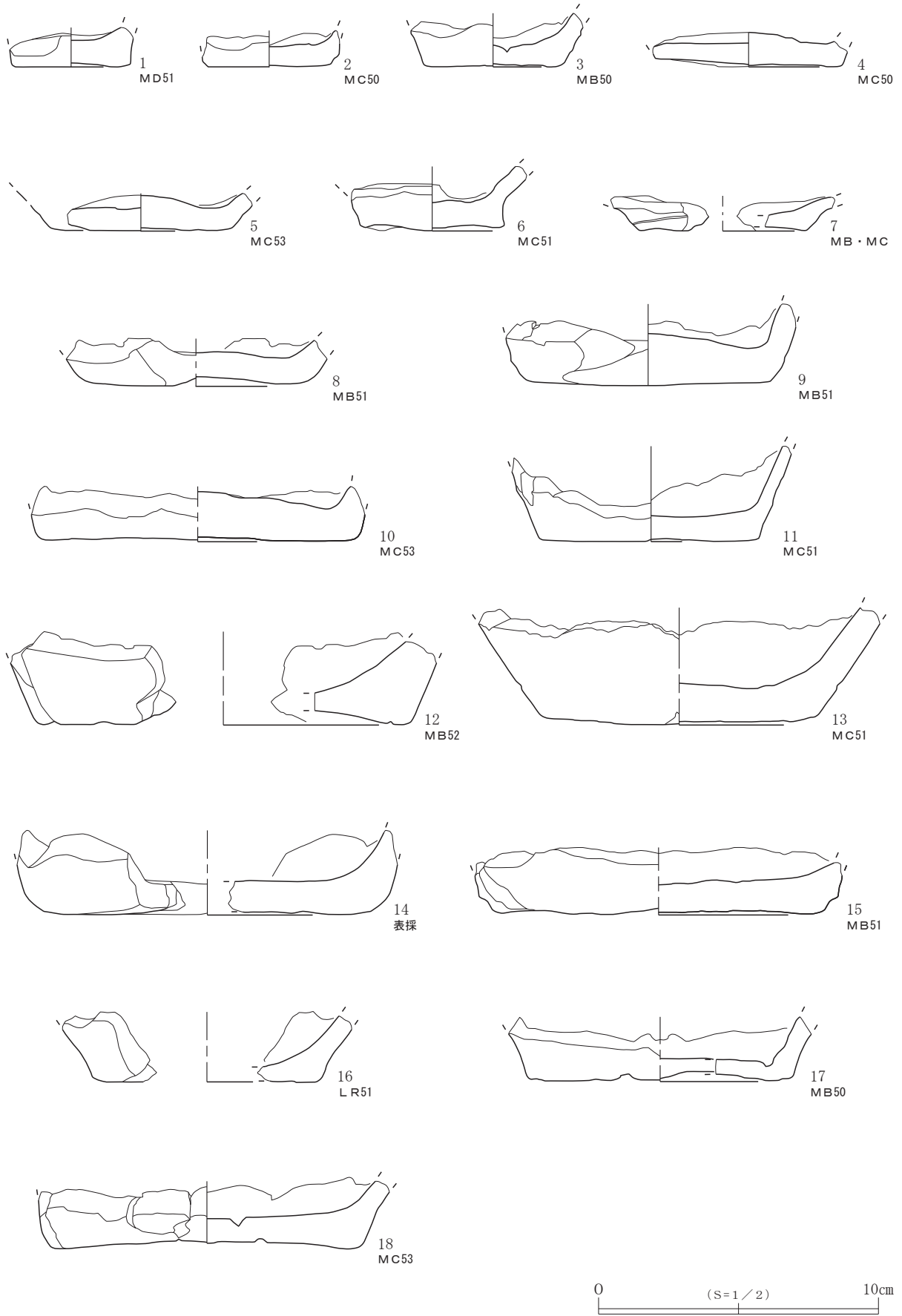
第25図 遺構外出土縄文土器(7)



第26図 遺構外出土縄文土器(8)



第27図 遺構外出土縄文土器(9)・土製品



第28図 遺構外出土縄文土器(10)

③石器（第18・29～42図、第8・9表、図版39～49）

遺構内出土石器も含めて記述する。縮尺は器種に応じて異なるため、各図ごとに縮尺を記載した。

掲載した石器の器種は、石鏃、石槍、石錐、棒状尖頭器、石匙、石篋、搔器、石核、磨石、凹石、敲石、石皿である。個々の石器の帰属時期は、出土土器の時期から縄文時代後期に属するものが多いと推定される。

剥片石器の石材は、頁岩が多用され、黒曜石の剥片もわずかながら出土していることから、数種類の石材が持ち込まれていたと推定される。なお、黒曜石については、産地同定分析を実施しており、その結果は第4章に掲載した。礫石器の石材は、安山岩質のものが多い。

掲載した石器の総数は、91点である。

石鏃（第29図、第8表、図版39）

10点出土し、中茎の有無で次のように分類した。

6～10は中茎を有するもので、6・7は基部が突出する凸基有茎鏃、8～10は基部が丸みを帯びる円基鏃である。11～13は中茎がないもので、11・12は基部が直線的な平基無茎鏃、13は基部に抉入のある凹基無茎鏃である。14・15は基部を欠損しており、中茎の有無は分からない。

石槍（第18・29図、第8表、図版39・45）

4点出土している。

3は基部のみの資料である。16は調整剥離が表裏全面に見られる。17・18は先端部を欠損している。

石錐（第18・29・30図、第8表、図版39・40・45）

7点出土している。

1は先端を細く作り出し、基部の端部にまで微細剥離が施された完形品である。19～21は撮み状の頭部をもち、短い錐部を作り出している。22・23は剥片の縁辺を、24は断面三角形の剥片の頂部を調整剥離して錐部を作り出している。

棒状尖頭器（第30図、第8表、図版40）

25は両面に細かな調整剥離が施されており、先端部を欠損している。

石匙（第18・30図、第8表、図版40・45）

3点出土している。

2は縦長剥片を素材とした薄手の縦型石匙で、完形品である。打点と反対側に撮み部が作り出されている。26・27はいずれも撮み部を欠損している。縦長の剥片を調整剥離し、両側縁が先端に向かって収束し、先端部が尖る形状をしている。

石篋（第30図、第8表、図版40）

28はほぼ左右対称で、上方が狭く、下方が広がっており、主に片面を調整剥離で加工し、片刃の丸刃である。

搔器（第30～32図、第8表、図版41～43）

21点出土している。

29～49で、さまざまな形態の剥片の表裏または片面を調整剥離し、周縁、両側縁か片側縁に刃部を作っているものである。

石核 (第33～35図、第8・9表、図版43～45)

9点出土している。

縦長、横長さらに円形の石材を加工し、石器の剥片素材を剥ぎとったものである。53、54は平坦な礫面に多様な調整を施した後、打点を変えながら連続して目的剥片を獲得していたと考えられる。55～58は礫の平坦部を利用して任意の剥片を得ている。

磨製石斧 (第35図、第9表、図版45)

59は全面が研磨されており、断面は隅丸長方形を呈する。基部は欠損しており、推定される長さは100mm以上になると見られる。石質は泥岩質である。

磨石 (第36・37図、第9表、図版45・46)

7点出土した。

円形、楕円形、不整形の礫の表裏や側面に磨った面があるものを磨石とした。60は全面が磨られていて、1側面を叩きを使用して使用している。61は全面が赤褐色を呈する。磨り面が存在することから磨石に含めているが、割れ口も赤褐色であることから砕いて赤色顔料的な使われ方をしたのかもしれない。63は断面三角形の一边を磨り面としている。66は表面に、67は表裏面に凹みが見られる。67は表面が研磨されたようになっており、黒色の付着物が僅かに残る。石質は安山岩質が多い。

凹石 (第37～39図、第9表、図版46・47)

7点出土しており、円形や不整形の礫の片面や表裏面に凹みがあるものを凹み石とした。

65は不整形で、比較的薄い礫の両面に2か所ずつ凹みが見られる。70は断面が隅丸三角形を呈しており、3面に凹みが見られる。石質は安山岩質が多い。

敲石 (第39図、第9表、図版47)

74は細長く、断面形が隅丸長方形の礫先端部に敲打痕があり、裏面には凹みが見られる。石質は泥岩質である。

石皿 (第18・39・40図、第8・9表、図版45・47)

6点出土した。

扁平礫を素材とし、特に周縁加工を施さずに平坦面を使用するものが多い。4はほぼ完形品である。表面全面が磨り面となっており、裏面は平らに調整されている。表面が使用面で、裏面の調整は石皿を安定させるためと考えられる。5もほぼ4と同様の特徴をもつ。75は中央を凹ませて周縁部を明瞭に高く作り出している。78は表裏面が磨り面となっており、被熱している。石質は安山岩質が多く、75は砂岩質である。

④石製品 (第40～42図、第9表、図版48・49)

三脚石器

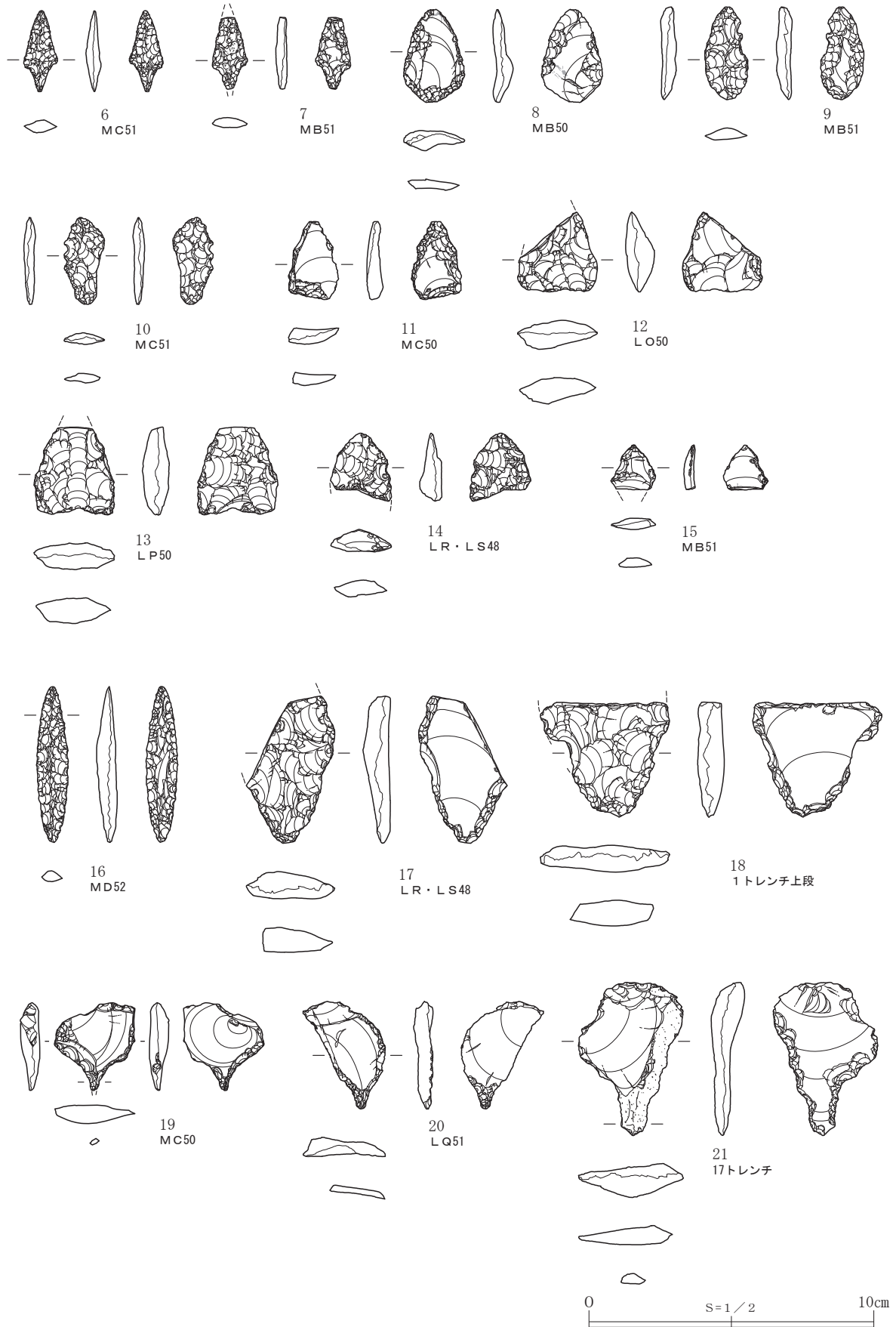
自然面を残し、盤状の礫を調整剥離して3つの脚部を作り出している石器である。79・80・82・83は3脚とも残存しており、他は1脚ないしは2脚を欠損している。裏面は若干調整されている程度で、中央部を明確に窪ませているものはない。表面での付着物や被熱痕跡は認められなかった。石質は泥岩質のものがほとんどで、69のみ頁岩製である。69は形状から三脚石器の脚の一部と判断した。

第8表 遺構外出土石器観察表(1)

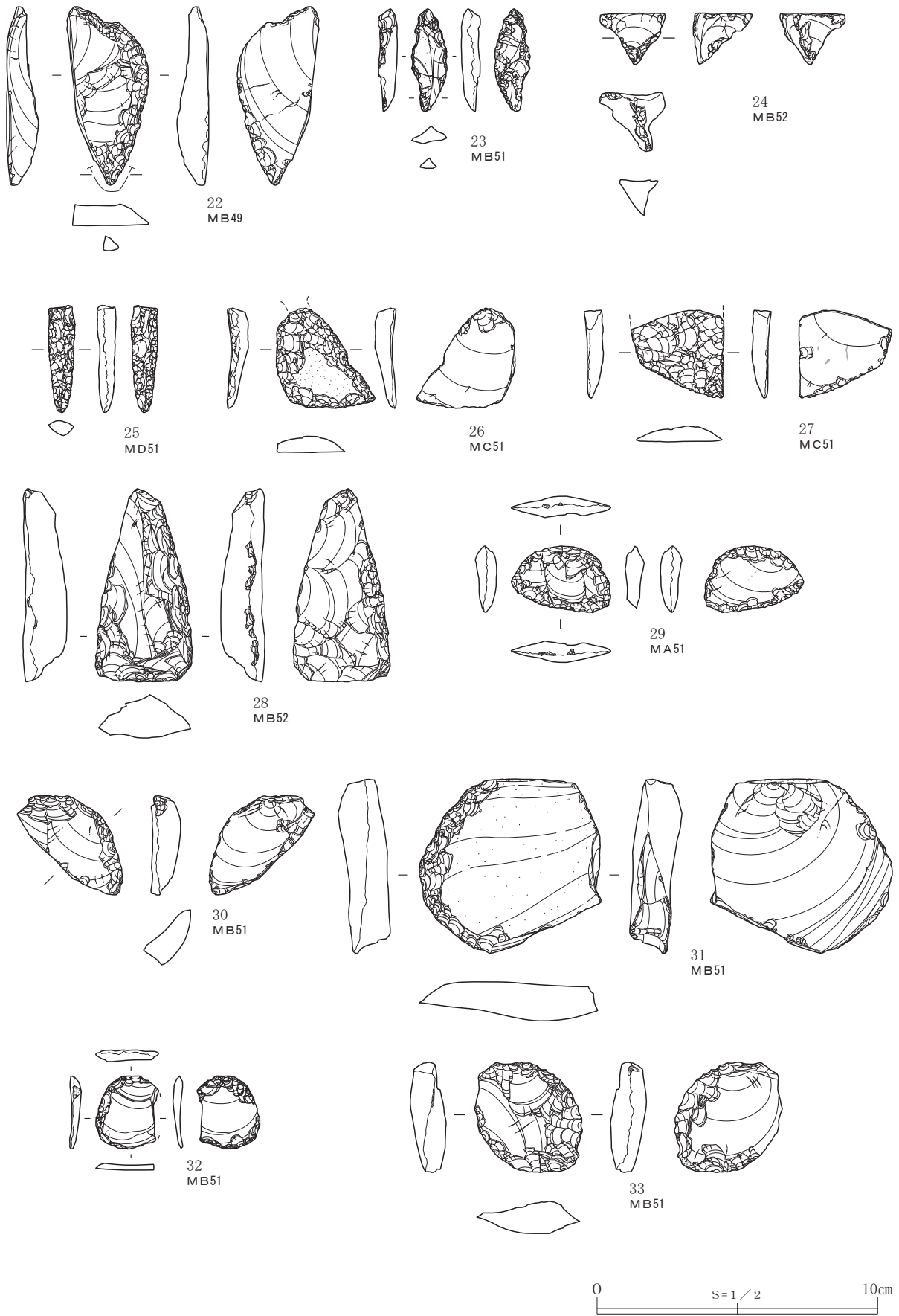
挿図番号	No.	出土地点(区)	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	図版番号
第18図	1	SK21	—	石錐	38.9	11.0	5.2	2.2	45-1
第18図	2	SK21	Ⅱ層	石匙	42.0	29.1	7.3	7.7	45-2
第18図	3	SK20	—	石槍	30.2	27.0	9.8	9.6	45-3
第18図	4	SKP106	—	石皿	189.4	100.5	45.3	1000.0	45-4
第18図	5	SKP123	—	石皿	163.5	112.2	46.2	1140.0	45-5
第29図	6	MC51	Ⅱ層	石鏃	28.1	11.6	4.7	0.9	39-6
第29図	7	MB51	攪乱	石鏃	24.9	12.0	3.7	1.0	39-7
第29図	8	MB50	Ⅰ層	石鏃	32.2	21.2	5.6	2.9	39-8
第29図	9	MB51	—	石鏃	32.2	14.8	5.0	2.2	39-9
第29図	10	MC51	Ⅱ層上	石鏃	29.9	13.9	3.6	1.5	39-10
第29図	11	MC50	Ⅱ層	石鏃	26.6	17.3	5.3	2.4	39-11
第29図	12	LO50	—	石鏃	27.3	27.4	9.8	5.5	39-12
第29図	13	LP50	Ⅰ層	石鏃	29.5	27.8	9.0	8.1	39-13
第29図	14	LR・LS48	Ⅰ層	石鏃	20.5	20.6	7.5	2.8	39-14
第29図	15	MB51	Ⅱ層上	石鏃	15.6	15.0	3.5	0.9	39-15
第29図	16	MD52	Ⅱ層	石槍	54.3	11.1	6.5	3.7	39-16
第29図	17	LR・LS48	Ⅰ層	石槍	49.0	26.1	8.8	12.1	39-17
第29図	18	1トレンチ上段	—	石槍	39.6	44.8	9.2	16.9	39-18
第29図	19	MC50	Ⅱ層	石錐	30.8	28.4	6.9	4.8	39-19
第29図	20	LQ51	I～Ⅱ層	石錐	33.1	21.8	6.0	3.5	40-20
第29図	21	17トレンチ	Ⅰ層	石錐	53.3	34.2	10.3	12.1	40-21
第30図	22	MB49	Ⅰ層	石錐	63.6	29.2	11.4	18.1	40-22
第30図	23	MB51	Ⅱ層	石錐	36.6	12.7	6.8	2.6	40-23
第30図	24	MB52	—	石錐	17.9	22.9	20.4	4.3	40-24
第30図	25	MD51	—	棒状尖頭器	37.3	9.2	6.5	2.5	40-25
第30図	26	MC51	Ⅱ層上	石匙	35.0	30.8	6.7	7.1	40-26
第30図	27	MC51	Ⅱ層上	石匙	29.5	32.9	6.1	6.4	40-27
第30図	28	MB52	—	石篋	68.9	34.6	15.7	31.4	40-28
第30図	29	MA51	—	搔器	23.8	35.5	7.7	5.4	41-29
第30図	30	MB51	Ⅱ層	搔器	35.4	37.5	10.6	10.9	41-30
第30図	31	MB51	—	搔器	62.1	65.0	18.7	69.4	41-31
第30図	32	MB51	Ⅱ層	搔器	26.1	22.4	4.3	2.4	41-32
第30図	33	MB51	Ⅱ層	搔器	39.3	38.4	12.8	17.6	41-33
第31図	34	LQ51	I～Ⅱ層	搔器	63.4	45.7	12.2	28.7	41-34
第31図	35	MA51	—	搔器	68.7	40.1	9.8	22.5	41-35
第31図	36	LP50	—	搔器	44.5	69.2	14.7	35.5	41-36
第31図	37	MC50	Ⅱ層	搔器	91.7	48.4	29.6	87.6	42-37
第31図	38	MC51	Ⅱ層上	搔器	26.5	38.5	12.3	16.5	42-38
第31図	39	MB51	Ⅱ層	搔器	45.4	47.3	22.5	41.2	42-39
第31図	40	MB51	Ⅱ層	搔器	43.0	22.5	11.1	6.6	42-40
第31図	41	MB50	Ⅰ層	搔器	52.0	44.8	13.6	23.6	42-41
第31図	42	MC52	—	搔器	23.6	37.2	11.5	9.3	42-42
第32図	43	MB51	—	搔器	34.5	74.7	13.4	33.6	42-43
第32図	44	MB52	—	搔器	43.6	33.9	10.1	9.3	42-44
第32図	45	MC53	Ⅰ層	搔器	88.3	54.6	20.2	69.0	43-45
第32図	46	MB50	Ⅱ層	搔器	53.3	46.2	14.9	41.7	43-46
第32図	47	MC53	Ⅰ層	搔器	69.7	65.0	19.4	45.0	43-47
第32図	48	MC51	Ⅱ層	搔器	53.6	37.2	28.5	46.1	43-48
第32図	49	ME52	Ⅱ層	搔器	48.4	60.1	20.1	65.4	43-49
第33図	50	MB50	Ⅰ層	石核	57.9	70.1	27.9	100.5	43-50
第33図	51	MA51	—	石核	25.4	55.6	34.3	43.4	44-51
第33図	52	MB50	Ⅰ層	石核	25.4	31.1	21.9	15.6	44-52

第9表 遺構外出土石器観察表(2)

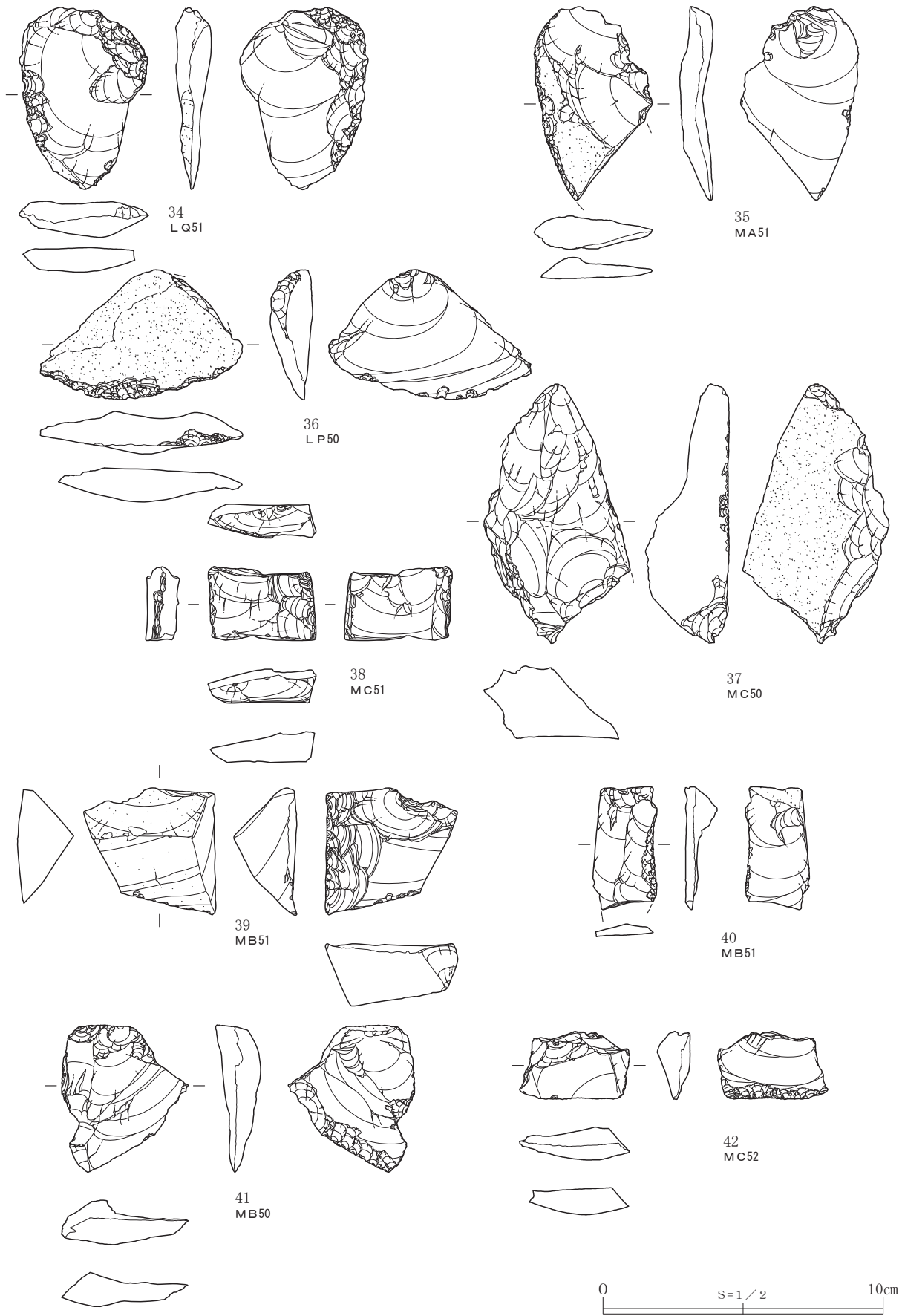
挿図番号	No.	出土地点(区)	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	図版番号
第33図	53	MC51	Ⅱ層	石核	34.1	75.0	33.0	88.3	44-53
第34図	54	MC51	Ⅱ層	石核	42.7	85.8	32.9	108.6	44-54
第34図	55	MB51	Ⅱ層	石核	48.2	60.5	53.4	167.5	44-55
第34図	56	MB50	Ⅱ層	石核	56.0	83.2	38.0	157.5	44-56
第35図	57	MB51	Ⅱ層	石核	49.1	76.4	72.1	268.6	45-57
第35図	58	MD51 1トレンチ	—	石核	82.7	86.6	94.3	920.0	45-58
第35図	59	MB51	Ⅱ層	磨製石斧	67.2	44.7	24.2	117.9	45-59
第36図	60	MD52	—	磨石	115.6	94.6	55.0	700.0	45-60
第36図	61	表採	—	磨石	69.7	68.8	59.2	345.2	45-61
第36図	62	MC51	—	磨石	105.1	80.8	59.9	670.0	45-62
第36図	63	MB51	—	磨石	170.9	86.6	54.5	1160.0	46-63
第37図	64	MC52	—	磨石	102.4	77.9	60.9	650.0	46-64
第37図	65	MB51	Ⅱ層	凹石	127.9	59.2	30.6	276.7	46-65
第37図	66	MB51	Ⅱ層	磨石	94.9	89.6	60.4	670.0	46-66
第37図	67	MB52	Ⅱ層	磨石	86.4	78.5	51.7	450.0	46-67
第38図	68	ME54	—	凹石	86.5	83.0	57.6	490.0	46-68
第38図	69	ME52	—	凹石	134.6	62.7	33.0	359.3	46-69
第38図	70	LO47	—	凹石	115.8	59.3	54.3	440.0	47-70
第38図	71	MA50	I層	凹石	118.1	74.0	31.5	343.7	47-71
第38図	72	MB52	Ⅱ層	凹石	93.3	81.1	63.0	590.0	47-72
第39図	73	MC51	—	凹石	110.1	92.8	67.5	820.0	47-73
第39図	74	MC53	I層	敲石	132.2	65.8	36.0	500.0	47-74
第39図	75	MD51	Ⅱ層	石皿	73.4	49.1	20.2	54.2	47-75
第39図	76	ME52	—	石皿	181.1	118.7	63.2	1460.0	47-76
第39図	77	MC52	Ⅱ層	石皿	99.4	58.8	64.0	430.0	47-77
第40図	78	MC52	—	石皿	132.9	136.5	46.5	880.0	47-78
第40図	79	MD52	Ⅱ層	三脚石器	57.8	75.7	20.2	39.8	48-79
第40図	80	MC50	Ⅱ層	三脚石器	50.2	57.8	24.6	49.3	48-80
第40図	81	MB51	—	三脚石器	83.7	57.8	28.2	118.4	48-81
第41図	82	MC51	Ⅱ層	三脚石器	36.5	48.8	14.2	17.4	48-82
第41図	83	MB52	—	三脚石器	43.9	53.9	15.7	20.0	48-83
第41図	84	MB50	—	三脚石器	43.6	37.5	23.3	24.0	48-84
第41図	85	MB51	—	三脚石器	48.0	41.5	13.8	17.1	49-85
第41図	86	LO49	I層	三脚石器	68.3	58.0	21.1	60.2	48-86
第42図	87	MC51	—	三脚石器	45.4	54.0	14.6	22.8	49-87
第42図	88	MB51	Ⅱ層	三脚石器	38.6	50.4	20.1	32.6	49-88
第42図	89	MB50	Ⅱ層	三脚石器?	50.5	68.0	24.2	98.8	49-89
第42図	90	LT・MA50	I層	三脚石器?	44.0	53.9	15.2	36.0	49-90
第42図	91	MB51	—	三脚石器?	50.8	53.7	28.9	56.6	49-91



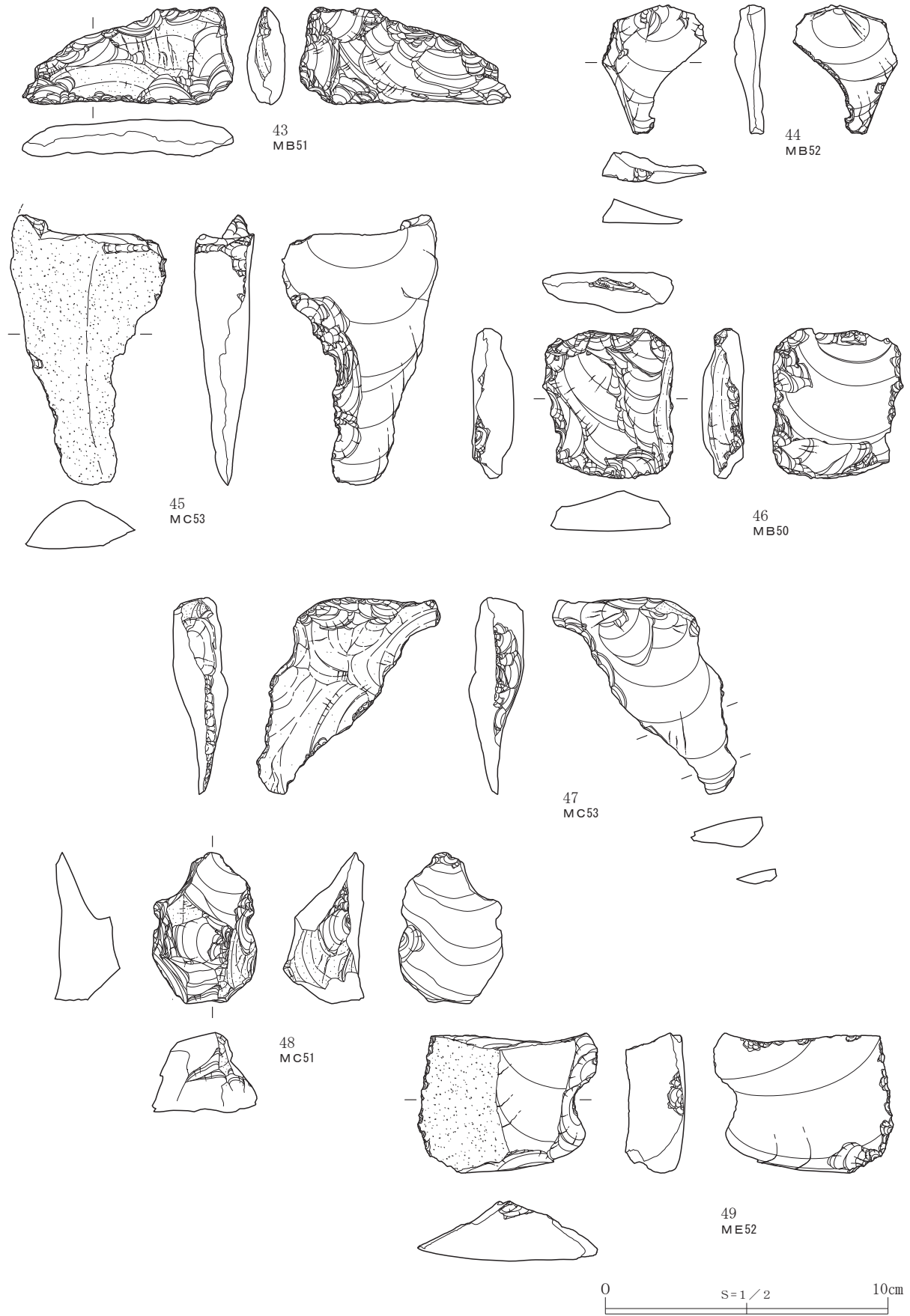
第29図 遺構外出土石器(1)



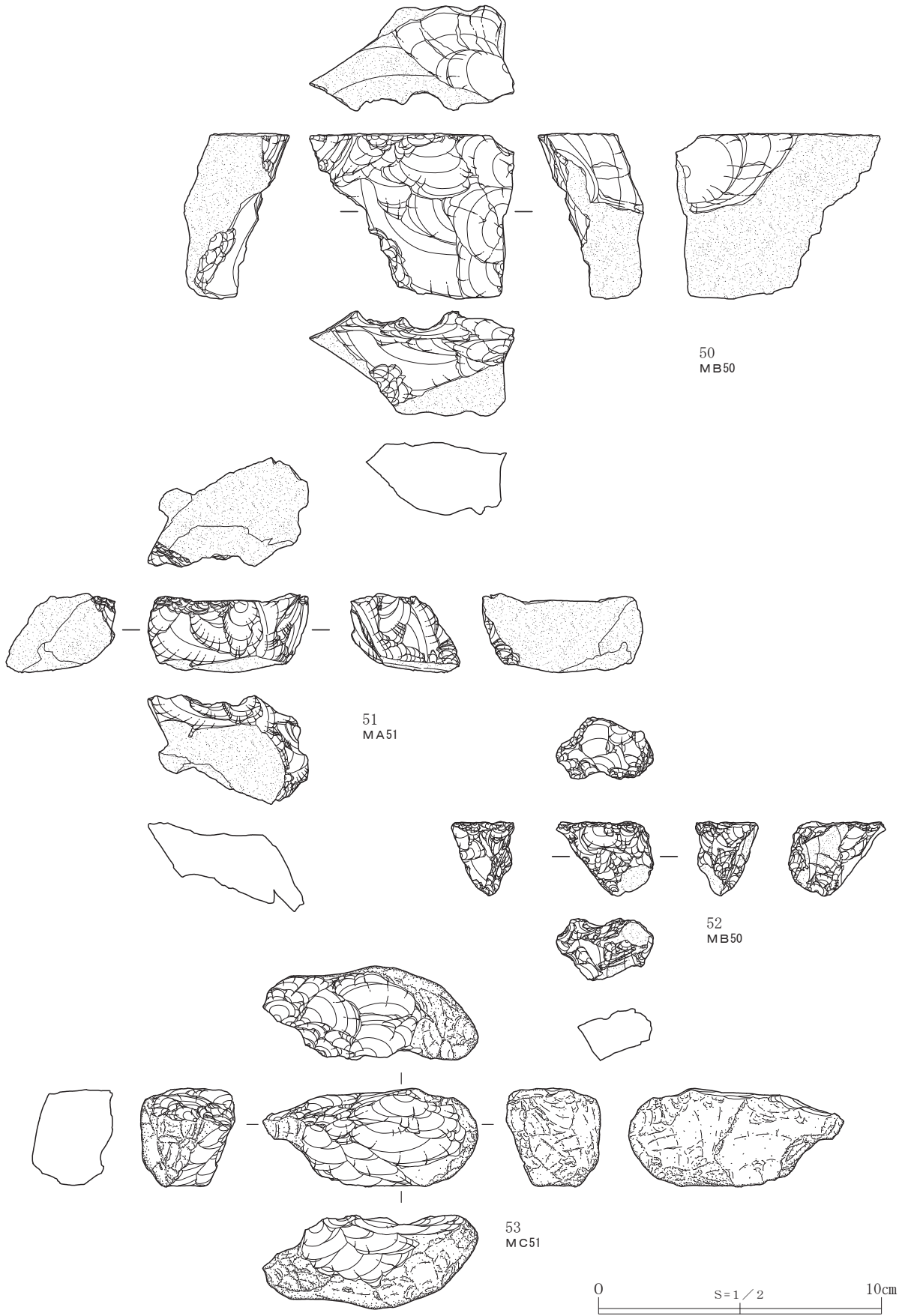
第30図 遺構外出土石器(2)



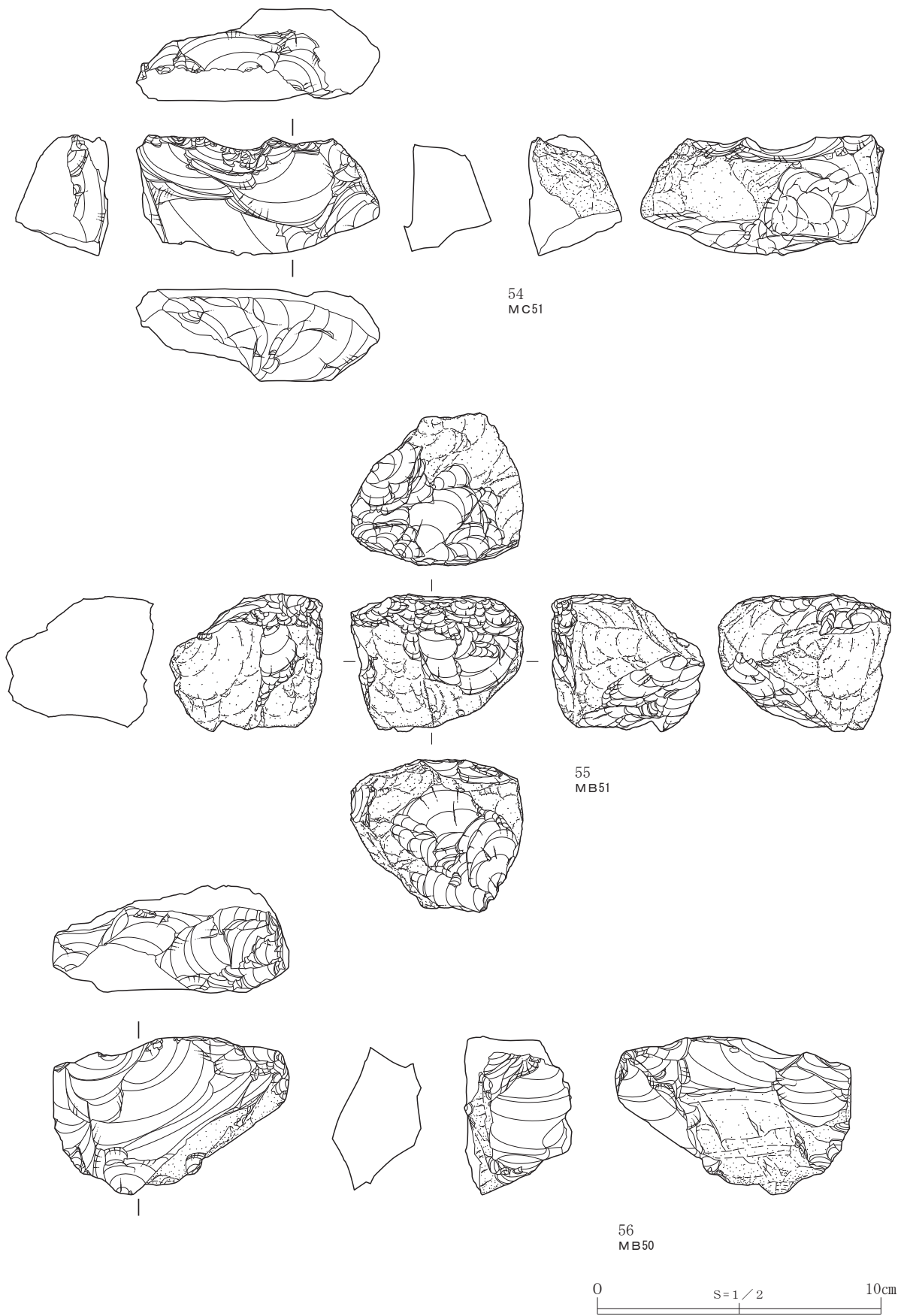
第31図 遺構外出土石器(3)



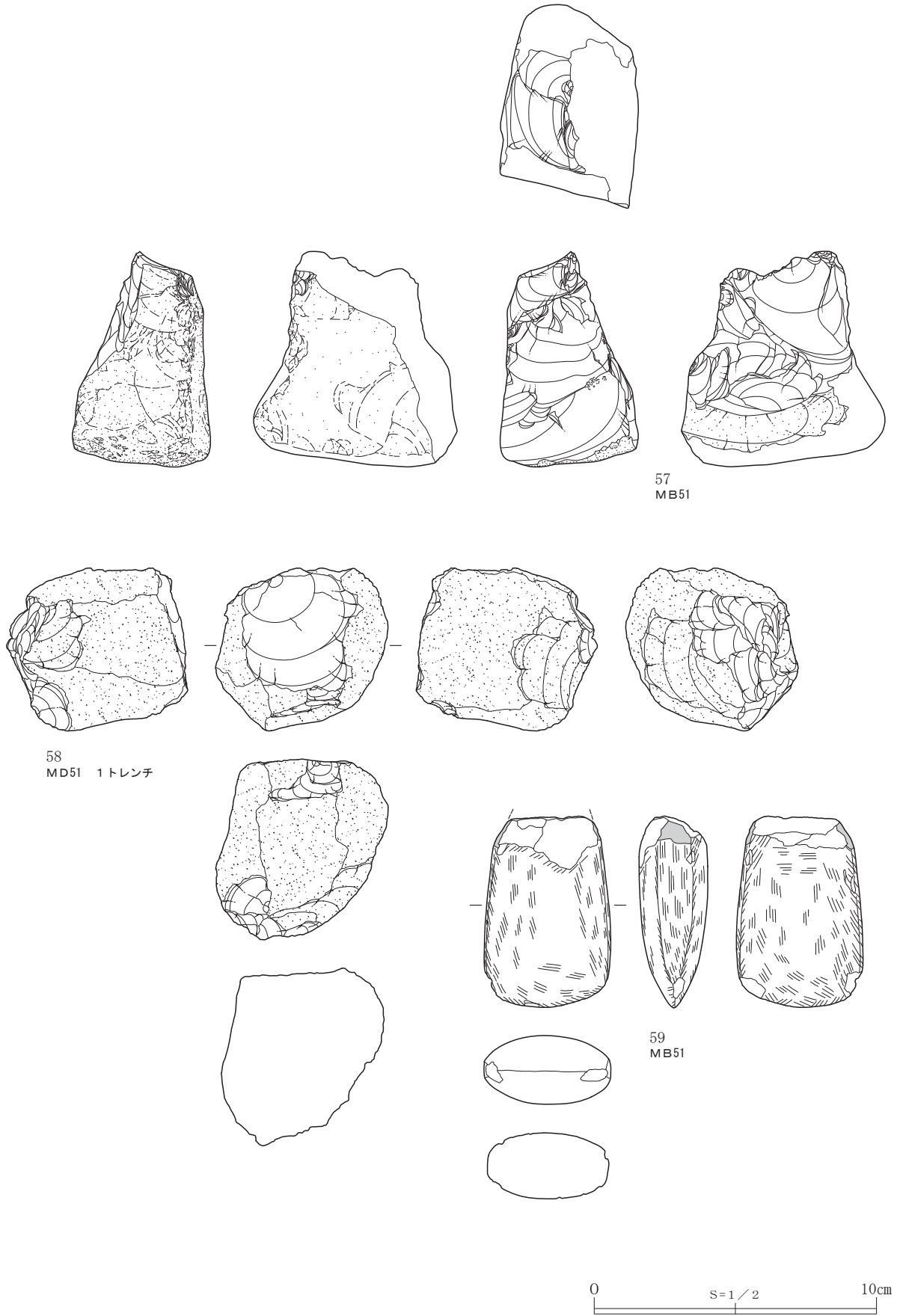
第32図 遺構外出土石器(4)



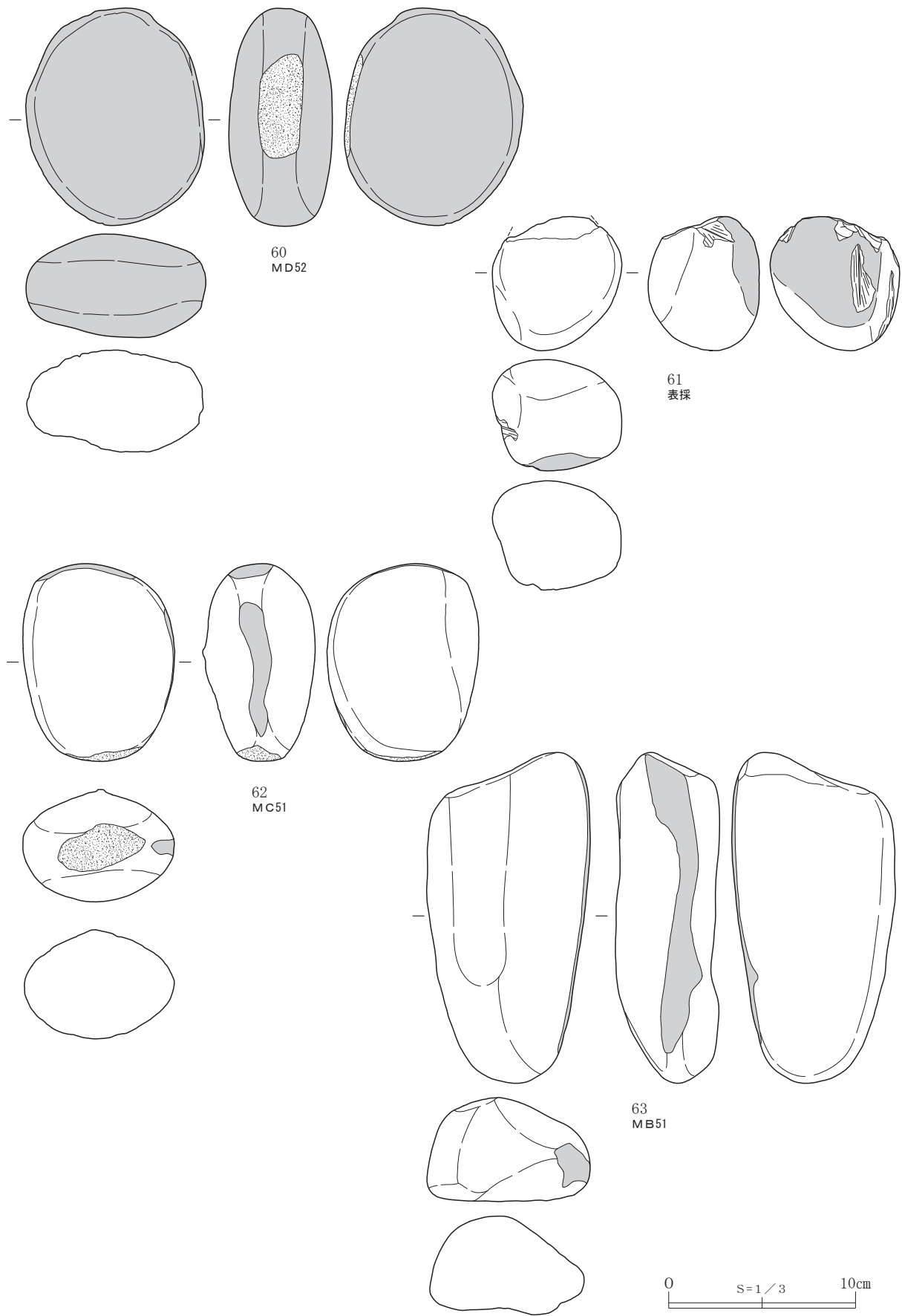
第33図 遺構外出土石器(5)



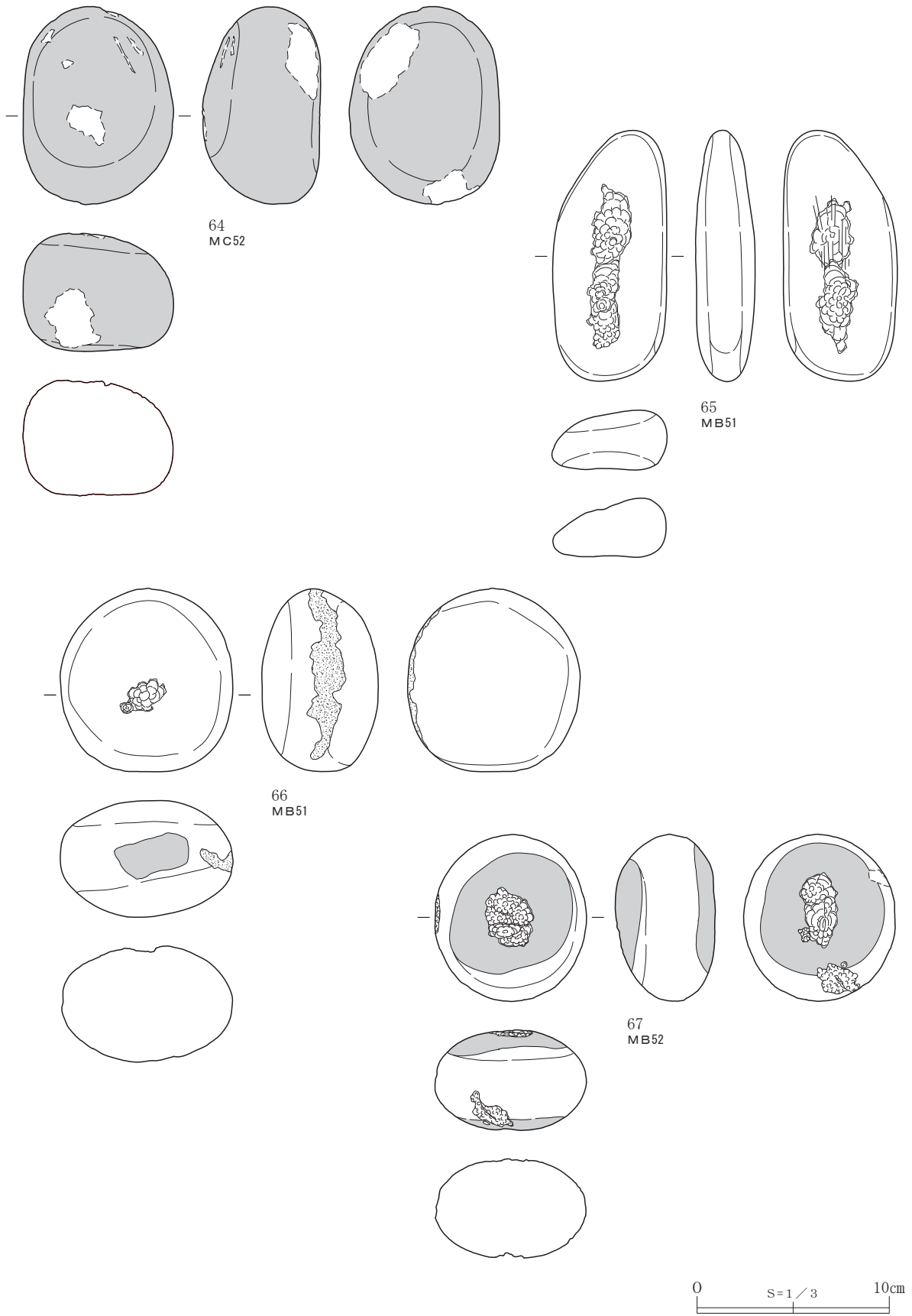
第34図 遺構外出土石器(6)



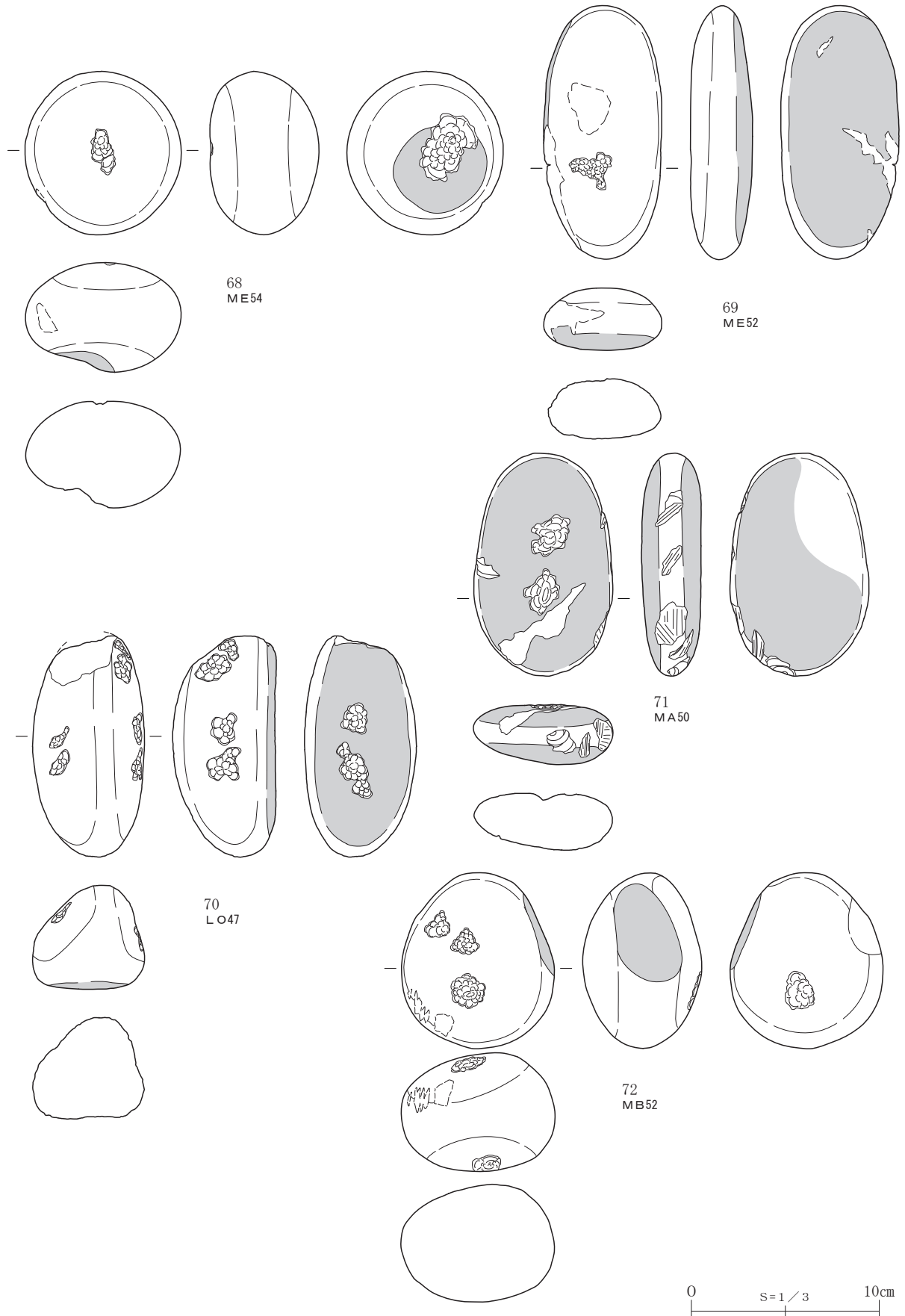
第35図 遺構外出土石器(7)



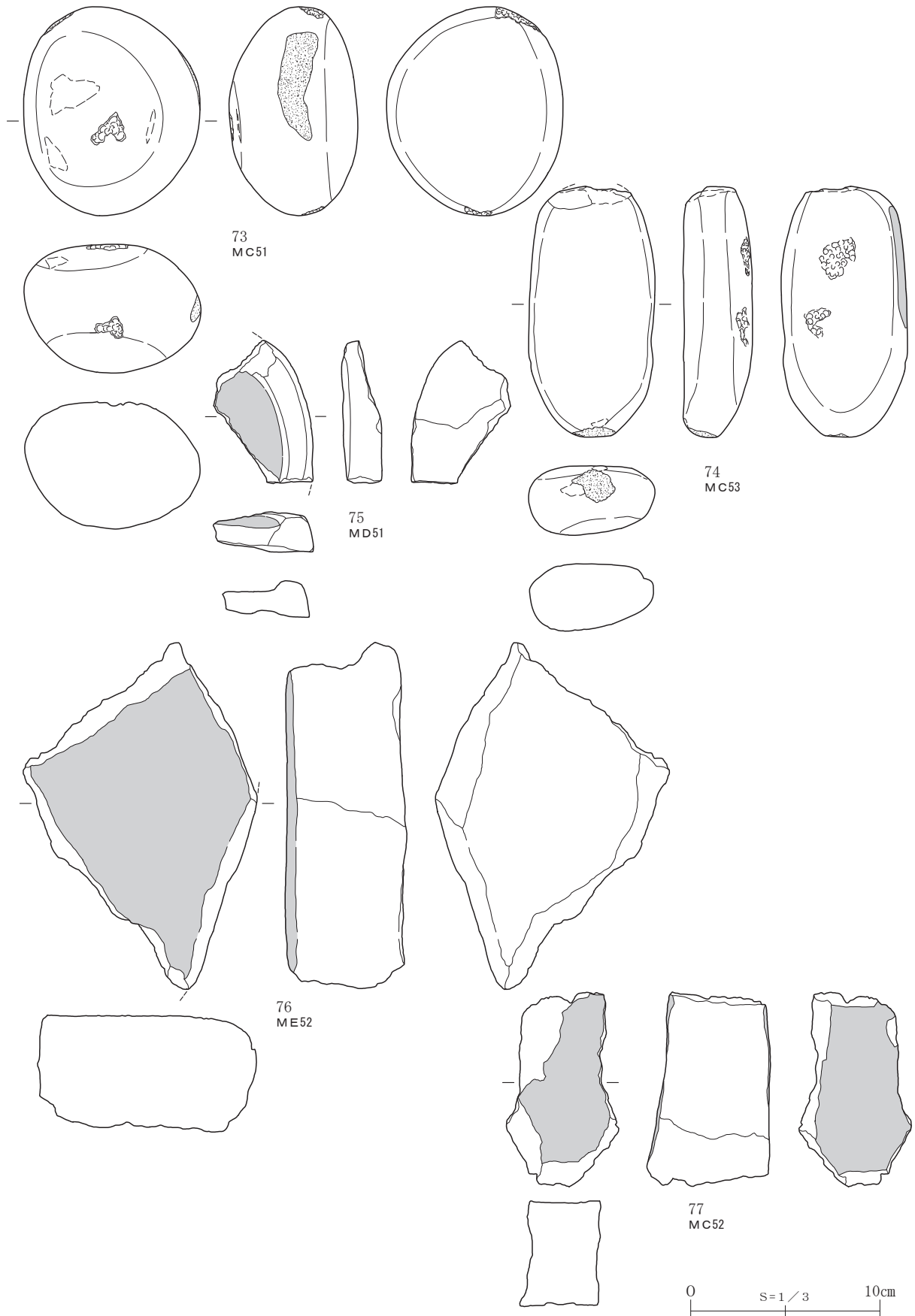
第36図 遺構外出土石器(8)



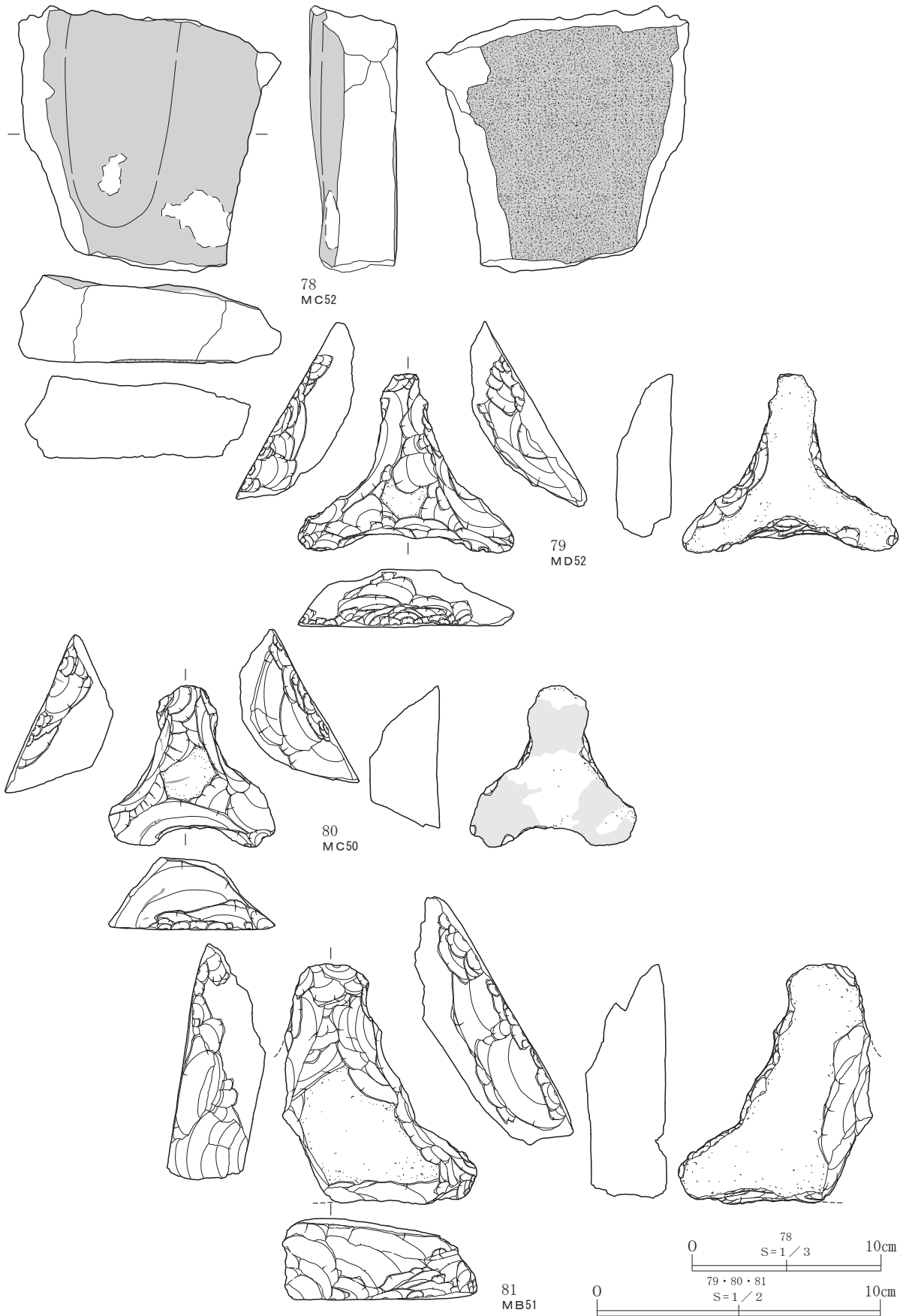
第37図 遺構外出土石器(9)



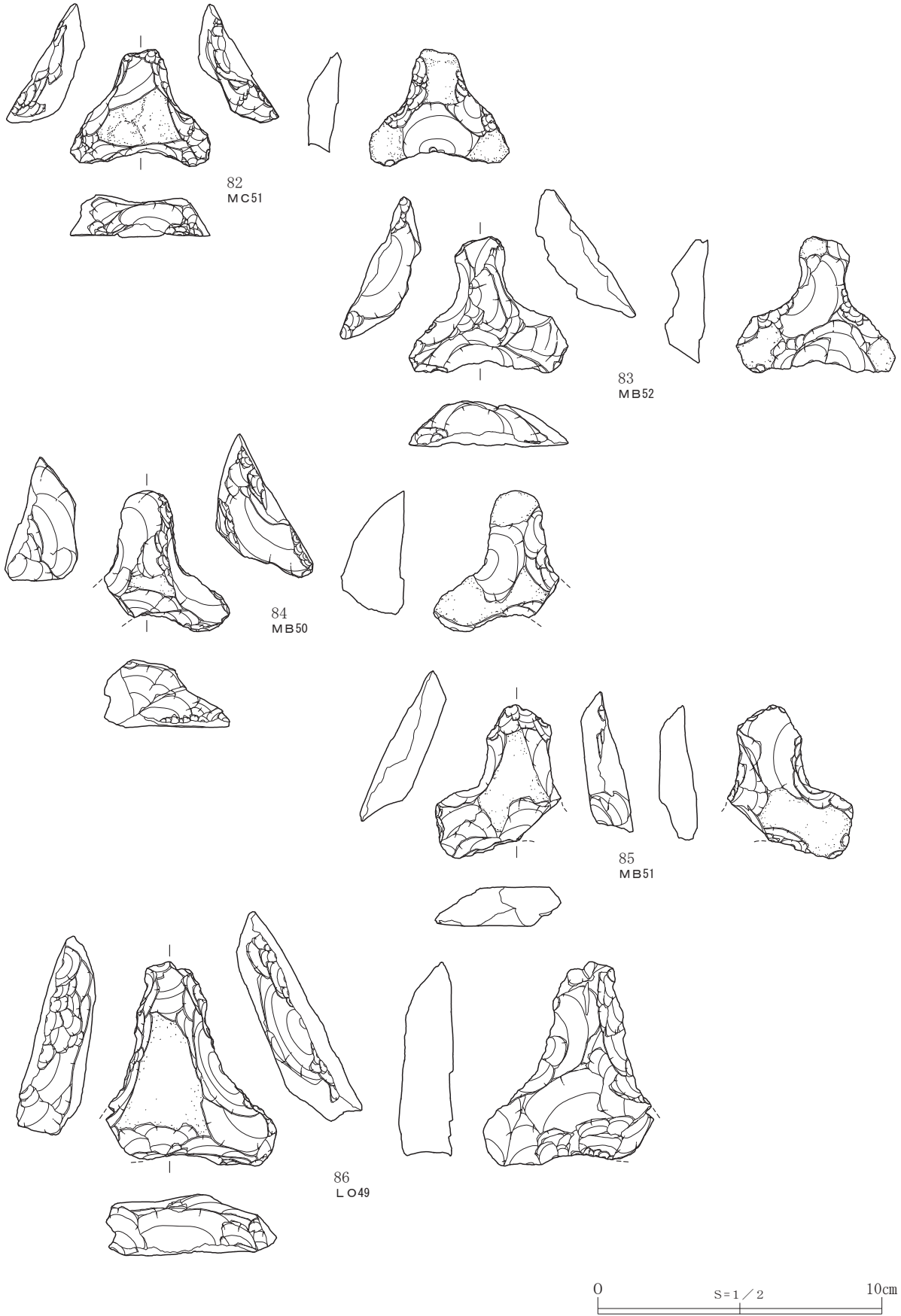
第38図 遺構外出土石器(10)



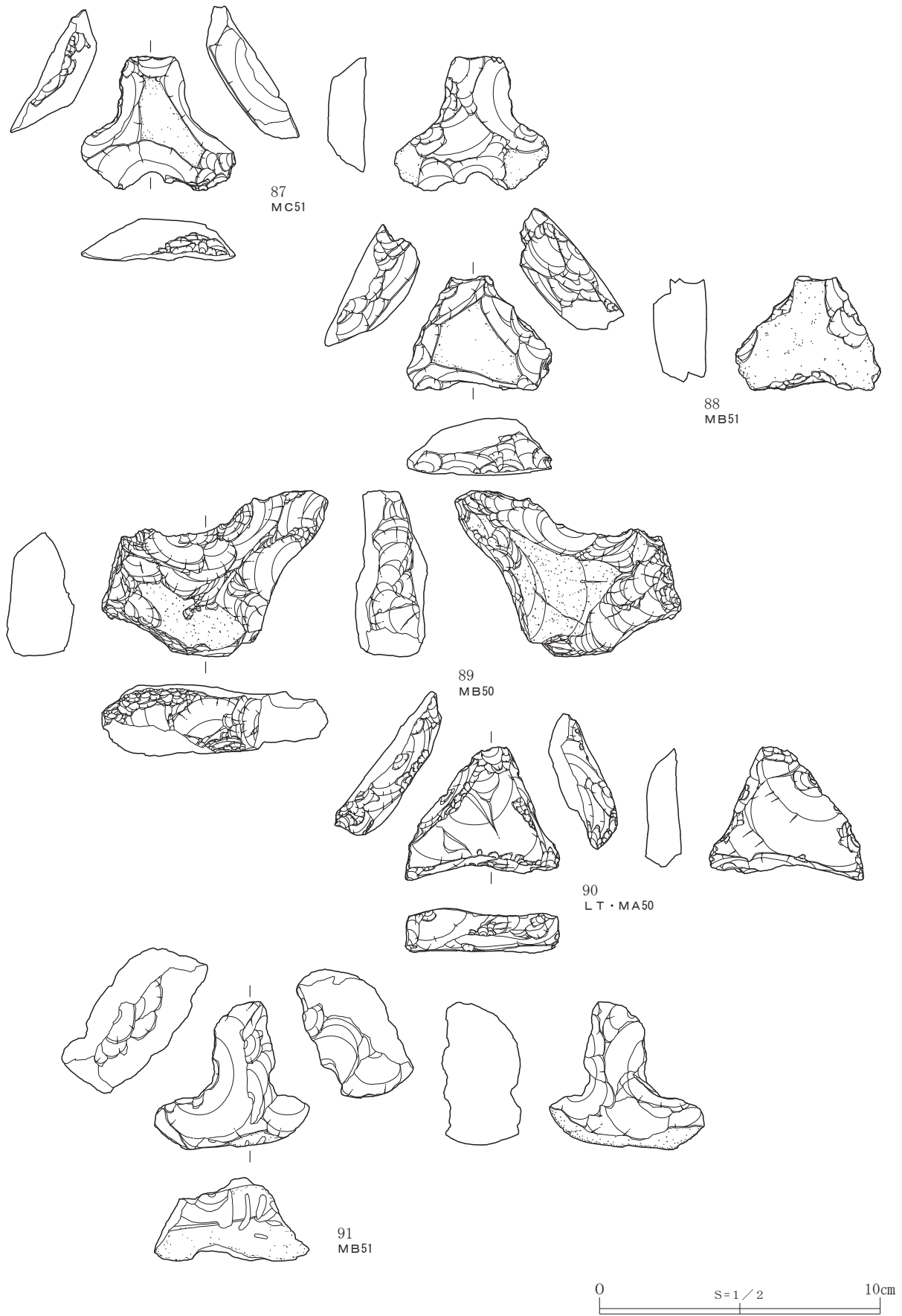
第39図 遺構外出土石器(11)



第40図 遺構外出土石器(12)



第41図 遺構外出土石器(13)



第42図 遺構外出土石器(14)

2 中世以降

(1) カマド状遺構と窪地

カマド状遺構は、便宜的に焚き口部・焚き口・燃烧部・煙道に分けた。燃烧部が平面形で窄まり、括れを作る部分を焚き口、焚き口手前の被熱部分を焚き口部とした。焚き口部底面は下り勾配及び平坦、燃烧部底面は登り勾配及び平坦なのが、当該遺跡の全般的な傾向である。本遺跡では、複数のカマド状遺構が共有する竪穴状遺構があり、これには遺構番号を付しSV37とした。なお、カマド状遺構が環状に集中する区域は、窪地の緩面を利用している。はじめに窪地について、触れておきたい。

本調査区の東端には、カマド状遺構が集中している窪地1と、この北側一部には調査区外に及ぶ窪地2がある(第43図)。窪地1には、少なくともSO01・02・11・13・35の5つのカマド状遺構と竪穴状遺構のSV37が存在していた。耕作土下面での規模は、およそ東西約9m南北約7.5mの不整形で、高低差0.5m内外であった。自然の窪地を利用して、カマド状遺構や竪穴状遺構を構築したと考えられる。東側緩斜面には大きな攪乱が点在し、中央北寄りには電柱を支えるアンカーを埋め込んだ長方形の掘り方等もあった。中心部まで重機の横断した痕跡が認められる。現状では太い杉根が存在し、礫集中部分を含む塵溜めとして利用されている。

窪地2は、およそ10m程の長さで北北東に緩く傾斜する。現状では杉の立木が密集している。この境目に当たる部分には、SO03・04・34が存在する。

(2) カマド状遺構

SO01 (第44図、図版14)

LP48・49区に位置する。I層除去後に楕円形褐色土プランを窪地1緩斜面際で確認した。主軸は北東―南西を指し、焚き口部はSV37と連結する。規模は焚き口部端から煙道端までが1.55m、燃烧部は長軸0.85m主軸、短軸0.8m、焚き口部は長軸0.55m(主軸)、短軸0.45m、焚き口幅は0.4mである。煙出は直径0.2m程で主軸線上に付設する。焚き口の両壁際には、礫の抜き取り痕がある。主軸上の底面は、焚き口部が緩やかに燃烧部側へ下り、緩く窪んだ燃烧部中央より斜面上方へ湾曲して立ち上がる。燃烧部の底面と壁、煙道の一部には被熱痕が認められた。主軸はSV37壁に対して、垂直方向を示していない。焚き口部が、SV37に堆積したSO02と想定される炭化層を切り込むので、SO02より新しいと考えられる。燃烧部には、直径3cm程で長さ10cm以上の炭化物がややまとまって出土した。燃料材が炭化したものと考えられる。併せて剥離した礫が出土しており、壁芯材として使用したと考えられる。

SO02 (第44図、図版14・15)

LP48区に位置する。I層除去後に、円形及びそれに連続する長方形褐色土プランを窪地1緩斜面際で確認した。主軸は北北東―南南西を指し、焚き口部はSV37と連結する。本体に接した西側には煙道が付設される。ただし、煙道北側から焚き口部にかけて攪乱が著しい。規模は焚き口部端から燃烧部端までが1.35m、燃烧部は長軸0.85m(主軸)、短軸0.75m、焚き口部は縦軸0.5m(主軸側)、横軸0.5m、焚き口幅も0.5mである。煙道は、燃烧部底より0.15m程上位の右壁中央から斜めに取り付く。大きさは長さ0.8m、幅0.4mで、煙出は丸味を帯びる。主軸上の底面は、焚き口部が緩やかに燃烧部側へ下り、緩く窪んだ燃烧部より斜面上方へ湾曲して立ち上がる。燃烧部の底面と壁には被熱痕が認められた。主軸は、SV37の壁に対して垂直方向を示す。本体の炭化物層が、SV37に連続し

て堆積した様子が窺える。燃焼部に目立った遺物はない。

S O03A (第46図、図版15・16)

L P51区に位置する。I層除去後に、円形の暗褐色土プランを斜面で確認した。主軸は東—西を指し、東側に開口する。燃焼部と焚き口の一部が確認できたのみで、焚き口部は消滅していた。規模は、燃焼部は長軸0.75m(主軸)、短軸0.6mである。燃焼部の北西側を除く底面と壁の一部、焚き口北側の壁に被熱痕が認められた。窪地1と窪地2の境は尾根状を呈すが、同時にS O03とS O04の間は、東西緩斜面の低位に当たる。本遺構も緩い勾配を意識して構築されていた。遺物は出土していない。

S O03B (第46図、図版15・16)

L P51区に位置する。東西のトレンチ調査で、地山を窪めた円形焼土として確認されていた。周辺のカマド状遺構の在り方と、掘り方が浅く楕円形で中央側底面が被熱を帯びていることから、カマド状遺構の燃焼部と判断した。規模は長軸0.8m、短軸0.65mである。長軸方向や隣接するS O03の在り方から、東側に焚き口が開口していたと考えられる。

S O04 (第45図、図版16・17)

L O50区に位置する。I層除去後に、楕円形の黒色土プラン及びそれに接続した黒褐色土の三角形プランを緩斜面際で確認した。主軸は西北西—東南東を指し、西北西に開口する。規模は焚き口部端から燃焼部端まで1.2m、燃焼部は長軸0.8m(主軸)、短軸0.7m、焚き口部は縦軸0.4m(主軸側)、横軸0.4m(最狭部)である。焚き口部に接続する灰原区域は、長軸約1.95m、短軸約1.4mの浅い不整形を成していた。主軸上の底面は、焚き口部が緩やかに燃焼部側に下り、緩く窪んだ燃焼部より斜面上方へ湾曲して立ち上がる。この燃焼部尻は、立ち上がり方が上部で変わり、この部分が煙道と考えられる。底面と壁、焚き口部の壁の一部には被熱痕が認められた。燃焼部と焚き口部の底面には、粉状の炭化物が充填していた。遺物は、燃焼部尻側埋土より長さ0.2m、幅0.1mでやや厚めの礫が2点出土した。どちらも被熱を受けており、煙道の閉塞等に関連したものと考えられる。また同じ埋土中より、直径0.23m、長さ0.25~0.3mの炭化物が2点見ついている。

S O11 (第46図、図版17・18)

L O48区に位置する。I層除去後の攪乱層を除去する過程で、にぶい黄褐色土や暗褐色土の不整楕円形プランを、窪地1の緩斜面際で確認した。全体が、木の根等で著しく破壊されていた。僅かに残存した底面や壁の被熱部分より、主軸が北北東—南南西を指す楕円形の燃焼部と判断された。規模は長軸0.8m、短軸0.7mである。底面は燃焼部尻が湾曲せず急な角度で外傾する。燃焼部手前には、長さ0.55m・幅0.40m・厚さ0.15mの砂岩質の切石が、破損した礫2点と共に出土した。

S O13 (第46図、図版18・19)

L O49区に位置し、S O35・36と近接する。S O35と重複し、僅かな断面によって本遺構が新しいと判断した。I層除去と攪乱土を除去する過程で、炭化物の目立つにぶい黄褐色土の楕円形プランを、窪地1の緩斜面際で確認した。全体が削平を受け、南側は攪乱による影響がみられた。斜面上位側の床面と壁が被熱していたことから、燃焼部と判断した。主軸は南西—北東を指し、南西に開口すると考えられる。規模は長軸1m、短軸0.6m位と思われる。残存埋土の深さも0.1mに満たず、遺物の出土もない。

S O14 (第45図、図版19)

L P・L Q49区に位置する。I層除去後に、円形暗褐色土プランを窪地1緩斜面際で確認した。主軸は東北東—西南西を指し、焚き口部はS V37と連結する。規模は焚き口部端から燃焼部端までが約1m、燃焼部は長軸約0.75m、短軸0.7m、焚き口部は長さ0.25m(主軸側)、幅0.3mである。主軸上の底面は、焚き口部が下方に緩やかに傾斜する。燃焼部は焚き口から緩やかに下り、中央から斜面上方へ湾曲して立ち上がる。燃焼部の底面と壁には被熱痕が認められた。遺物は出土していない。

S O35 (第46図)

L O49区に位置する。電柱用アンカーと関連した穴や攪乱の断面で、炭化物の充填した底面を確認した。底面は長軸0.3m、短軸0.2mの範囲が平坦で、被熱を受けた面であることからカマド状遺構と判断した。断面で本遺構の存在は確認できたが、平面を辿ることができなかった。S O13底面との高低差は0.2mである。遺物は出土していない。

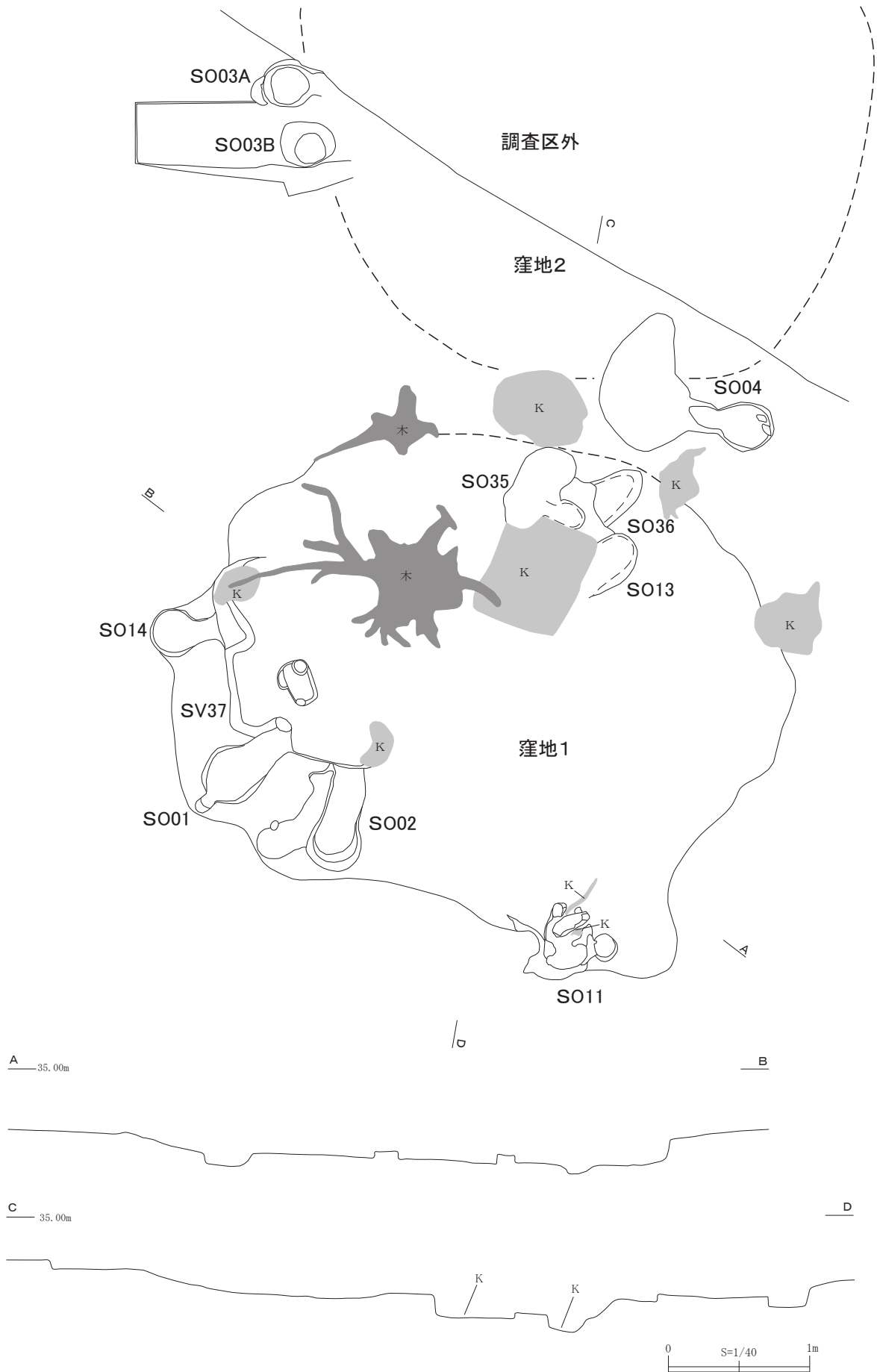
S O36 (第46図)

L O49区に位置する。I層除去後に、炭化物の顕著な楕円形状のプランとして窪地1の緩斜面際で確認した。南側に位置するS O35とは重複するようであるが、切り合い関係は把握できなかった。規模は、残存長軸0.8m(主軸)、短軸0.65mである。S O35底面との高低差は約0.2mである。本遺構は床や壁に被熱面が認められず、形態的にも燃焼部とは考えられない。しかし、埋土に炭化物を顕著に含むこと、遺構の構築に当たり斜面を意識していることから、カマド状遺構の一部と判断した。遺物は出土していない。

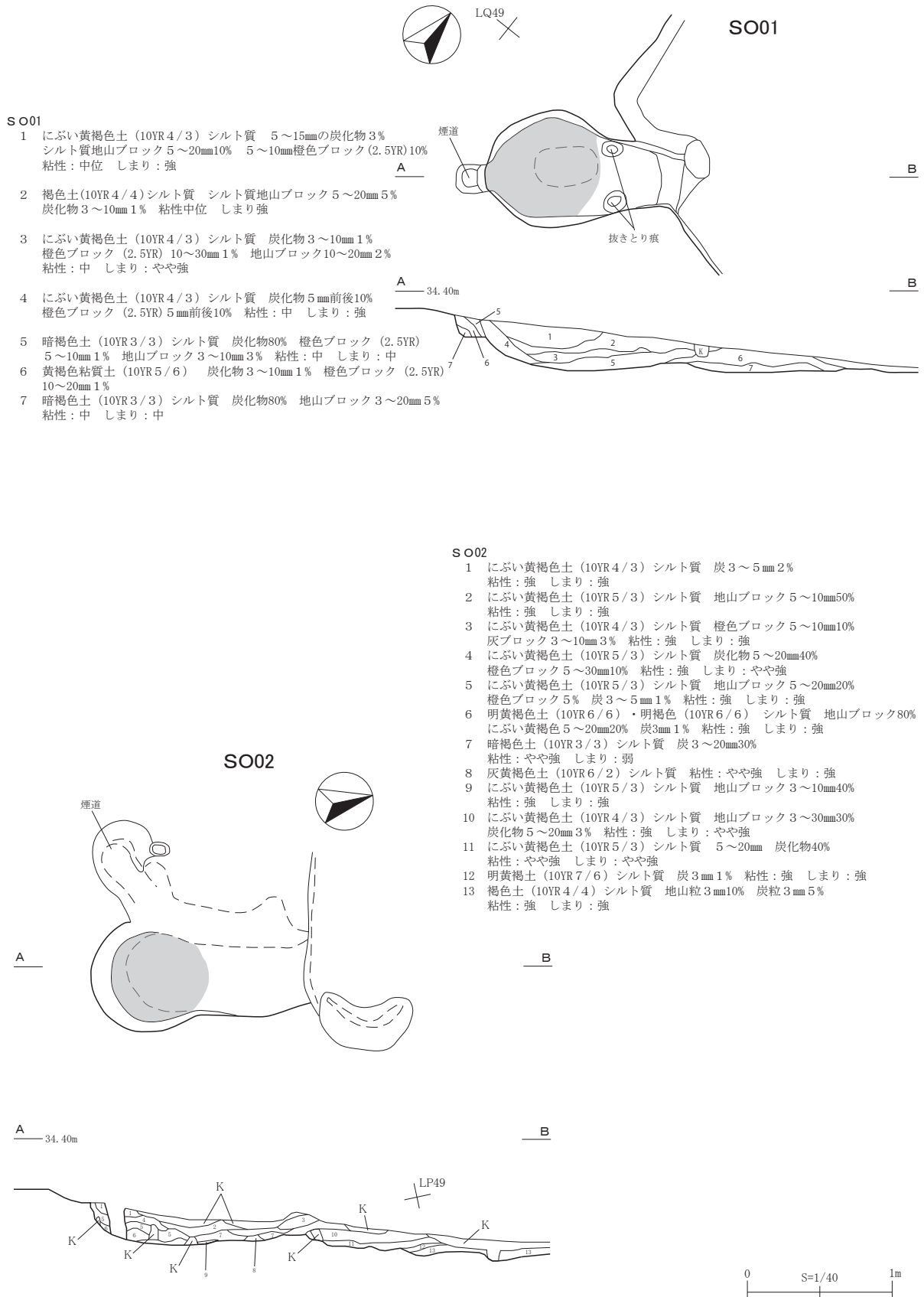
(3) 竪穴状遺構

S V37

L P48・49区に位置する。西側から南側にかけて、L字状の不整な段が形成されていた。その底面は明確な平坦ではないものの、それを意識させるようであった。この西や南の段には、S O14・01・02が連結し、カマド状遺構の作業場と考えられる。規模は長軸3.5m、短軸1.2mである。S O14とS O02は壁に垂直、S O01は斜めに付設される。S O14とS O01には、焚き口部下方に連続して不整な張り出しが認められた。作業場エリアの中央には、長軸0.65m、短軸0.4m、深さ0.1mのピットを検出した。S V37に付随したもので、その長軸はS O01の主軸と直交する。



第43図 カマド状遺構と窪み地形

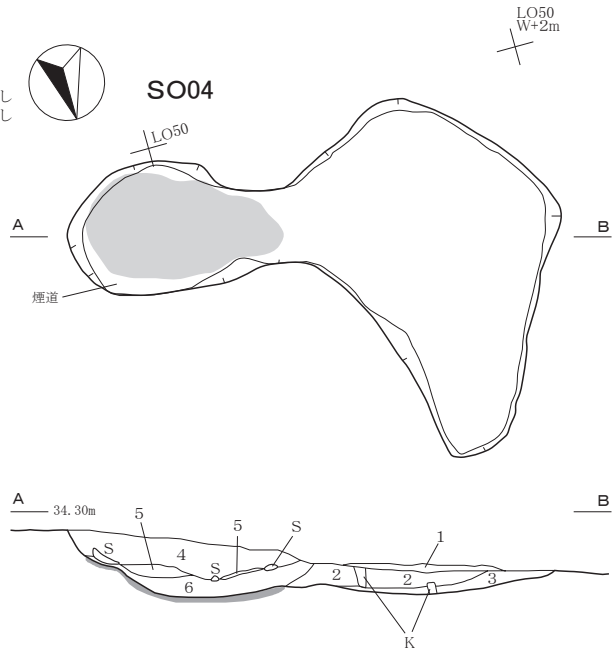


第44図 カマド状遺構 (1) SO01・02

第3章 調査の方法と成果

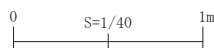
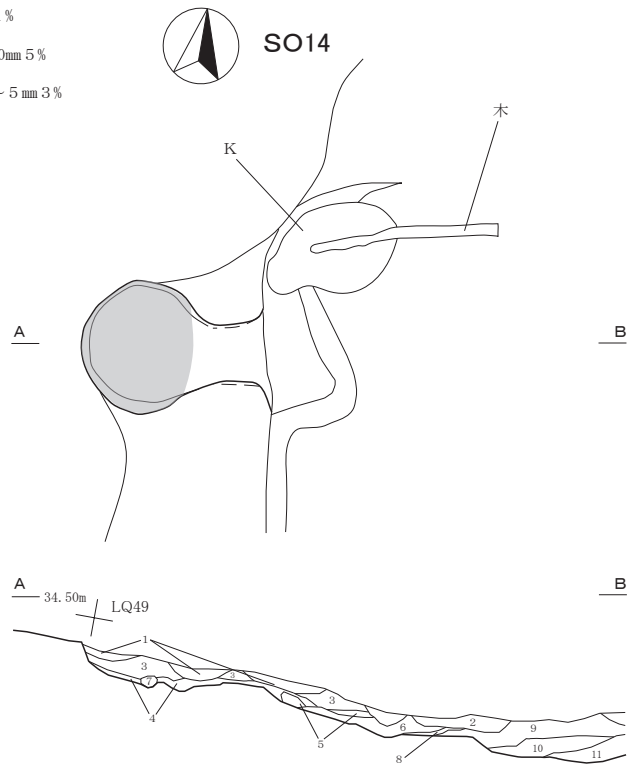
SO04

- 1 黄褐色土 (10YR 5/6) シルト 粘性:弱 しまり:弱 混入物:なし
- 2 黒褐色土 (10YR 2/3) シルト 粘性:弱 しまり:弱 混入物:なし
- 3 黒褐色土 (10YR 2/3) シルト 粘性:弱 しまり:弱
混入物:炭化物粒小1~2mm 5%
焼土ブロック小1~2mm 10%
- 4 黒色土 (10YR 2/1) シルト 粘性:弱 しまり:弱
混入物:炭化物粒小1~2mm 50%
- 5 褐色土 (10YR 4/4) シルト 粘性:弱 しまり:弱
混入物:地山土塊極小5mm 3%
- 6 暗褐色土 (10YR 3/3) シルト 粘性:弱 しまり:弱
混入物:地山土塊 塊極小5mm以下 3%



SO14

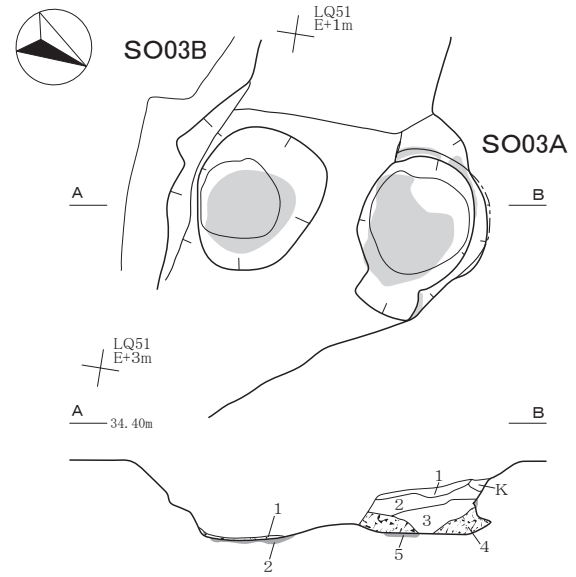
- 1 暗褐色土 (10YR 3/3) シルト質 炭粒3mm前後1% 地山粒3mm前後1%
粘性:強 しまり:強
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) 炭化物5~10mm 5% 地山ブロック5~10mm 5%
粘性:やや強 しまり:中位
- 3 暗褐色土 (10YR 3/3) シルト質 地山ブロック5~30mm 10% 炭粒3~5mm 3%
灰黄褐色ブロック (10YR 5/2) 5mm 2% 粘性:強 しまり:強
- 4 暗褐色土 (10YR 3/3) シルト質 炭化物5~20mm 40%
粘性:やや強 しまり:やや強
- 5 にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) シルト質 地山ブロック3~30mm 30%
炭3mm前後3% 粘性:強 しまり:強
- 6 灰黄褐色土 (10YR 4/2) シルト質 地山ブロック5~30mm 40%
炭3~10mm 1% 粘性:強 しまり:強
- 7 にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) シルト質 地山ブロック5~10mm 2%
炭3~5mm 3% 粘性:強 しまり:強
- 8 灰黄褐色土 (10YR 5/2) シルト質 灰黄褐色 (10YR 4/2) グライ化
粘性:強 しまり:強
- 9 にぶい黄褐色土 (10YR 5/4) シルト質 白色ブロック2~7cm 10%
粘性:強 しまり:強
- 10 褐色土 (10YR 4/4) シルト質 炭5~20cm 20% 炭化物層
橙色ブロック5mm前後3% 粘性:強 しまり:弱
- 11 にぶい黄色土 (10YR 6/4) シルト質 酸化ブロック10~30cm 5%
粘性:強 しまり:弱



第45図 カマド状遺構 (2) SO04・14

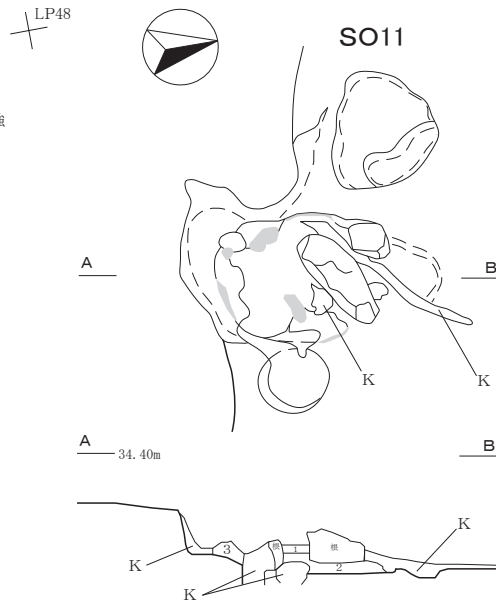
SO03A・SO03B

- 1 明褐色土(7.5YR 5/3)シルト
混入物：橙色土(7.5YR 6/6) 焼土ブロック 5~60mm 5%
にぶい橙色土(7.5YR 7/4) 焼土ブロック 5~20mm 3%
黒褐色土(7.5YR 2/2) 焼土ブロック 10~50mm 30%
粘性：弱 しまり：強
- 2 極暗褐色焼土(7.5YR 3/4)・黒色焼土(7.5YR 2/1)
混入物：にぶい赤褐色焼土(2.5YR 4/4) 幅10mm西に集中
地山土の硬化ブロック(10YR 5/6) 10~30mm
粘性：弱 しまり：強
- 3 暗赤褐色土(7.5YR 3/4) 粘性：弱 しまり：強
- 4 褐色土(7.5YR 4/4)
混入物：炭粒1mm以下~5mm 1% 褐灰色粘土(10YR 5/1) 5~50mm 30%
炭塊 2~5mm 1%未満
粘性：弱 しまり：強
- 5 黒褐色土(10YR 2/3)
混入物：焼土20~50mm 30%
粘性：弱 しまり：強



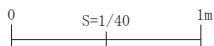
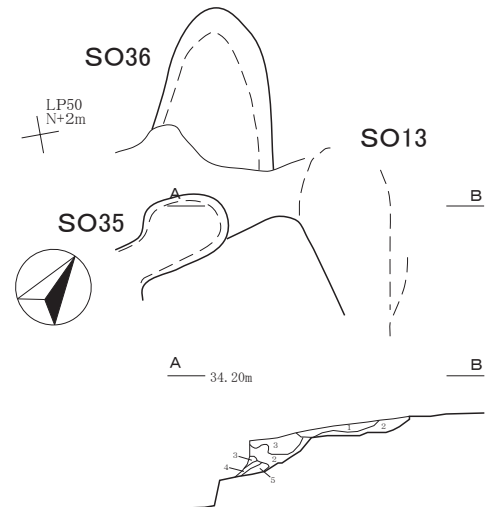
SO11

- 1 にぶい黄褐色土(10YR 4/4)シルト質 粘性：やや強 しまり：やや強
- 2 暗褐色土(10YR 3/3)シルト質 粘性：やや強 しまり：やや強
- 3 明赤褐色土(5YR 5/6)窯壁ブロック主体 炭化物3~5mm 1%
粘性：弱 しまり：弱



SO13・35・36

- 1 にぶい黄褐色土(10YR 4/3)シルト質 混入物：橙ブロック 5~10mm 3%
炭化物 5~10mm 5% 粘性：強 しまり：やや弱
- 2 黒色(10YR 2/1) にぶい黄褐色 5mm前後 2% 粘性：中 しまり：やや弱
- 3 にぶい黄褐色土(10YR 4/3)シルト質 橙ブロック 3~10mm 1% 炭化物 2~5mm 3%
地山粒 2~5mm 1% 粘性：強 しまり：強
- 4 明黄褐色土(10YR 6/6)シルト質 地山ブロック 5~10mm 40% 炭粒 1mm 1%
粘性：強 しまり：強
- 5 にぶい黄褐色土(10YR 4/3) 炭化物 3~20mm 40% 粘性：中 しまり：やや強



第46図 カマド状遺構(3) SO03・11・13・35・36

3 時期不明

柱穴様ピット（第6～10図、第10～12表）

調査区のMC～MGラインとMB～LQラインに集中している。特にMB～LQラインに目立って検出されている。覆土が縄文時代のものではなく、遺物も検出されなかったことから時期不明のものと考えた。

第10表 柱穴様ピット観察表(時期不明)(1)

番号	挿図番号	所在グリッド	長軸(cm)	短軸 (cm)	平面形	深さ(m)	底面標高(m)
105	7	L048	74	56	楕円形	0.389	33.784
113	8	LR50	20	18	円形	0.197	34.087
118	8	LQ51	20	16	楕円形	0.191	34.262
119	8	LQ51	22	18	楕円形	0.381	33.876
120	8	LR51	22	16	楕円形	0.142	34.08
121	8	LR51	24	22	円形	0.023	34.236
122	8	LR51	24	22	円形	0.224	33.99
124	8	LR51	14	80	円形	0.066	34.154
125	8	LR51	20	16	楕円形	0.136	34.086
126	8	LR51	24	24	円形	0.091	34.066
130	8	LS51・52	40	24	楕円形	0.17	34.008
133	9	MA53	20	18	略円形	0.143	33.706
134	9	MA53	24	18	略円形	0.068	33.801
136	9	MB53	20	18	円形	0.074	33.801
137	9	MB53	24	22	円形	0.135	33.721
138	9	MB53	24	18	略円形	0.1	33.774
141	9	MB53	24	16	楕円形	0.022	33.868
146	9	MB54	22	21	円形	0.127	33.753
147	9	MB54	44	28	楕円形	0.207	33.641
148	8	LR51	24	18	不整円形	0.159	34.104
149	8	LR51	34	20	円形	0.138	34.106
151	9	MA53	20	20	円形	0.082	33.805
154	10	MD53	18	12	楕円形	0.124	33.916
155	10	MC53	14	12	楕円形	0.123	33.888
156	10	MC54	22	16	楕円形	0.101	33.92
159	10	MC54	26	14	楕円形	0.106	33.914
162	10	MD54	32	14	楕円形	0.257	33.689
164	10	MD54	18	14	円形	0.235	33.709
166	10	MD55	24	24	円形	0.155	33.787
167	10	ME55	32	22	楕円形	0.162	34.53
172	10	ME54	18	18	円形	0.083	33.787
173	10	MC54	22	20	円形	0.096	33.968
174	10	MC54	16	14	楕円形	0.121	33.756
176	10	MF53	18	14	楕円形	0.122	33.752
181	10	MH55	54	30	楕円形	0.148	33.722
185	10	MG56	20	18	円形	0.076	33.79
188	10	MG57	26	18	楕円形	0.155	33.699
190	10	MG57	14	12	円形	0.066	33.749
201	8	LS50	28	18	不整楕円形	0.095	34.163
203	8	LQ51	25	14	円形	0.214	33.981
205	8	LR51	44	32	楕円形	0.108	34.111
206	8	LS51	53	32	不定形	0.42	33.8
209	7	LP48	50	42	楕円形	0.221	34.027
211	7	LP48	24	20	楕円形	0.185	34.052

第11表 柱穴様ピット観察表(時期不明)(2)

番号	挿図番号	所在グリッド	長軸(cm)	短軸 (cm)	平面形	深さ(m)	底面標高(m)
212	7	LP48	20	16	楕円形	0.202	34.072
215	8	LR52	18	16	円形	0.127	34.072
216	8	LS51	20	18	円形	0.154	34.069
221	8	LS52	30	20	楕円形	0.12	34
222	8	LS51	20	16	不整円形	0.186	34.06
223	8	LS52	26	24	円形	0.027	34.167
225	8	LS50	26	20	不整円形	0.199	34.074
226	8	LR50	20	14	楕円形	0.156	34.083
229	8	LS49	16	14	楕円形	0.127	34.153
236	8	LS50	26	26	円形	0.13	34.114
237	8	LS50	28	22	不整円形	0.151	34.101
238	8	LS50	24	10	楕円形	0.079	34.174
240	8	LS50	16	12	楕円形	0.092	34.178
243	8	LS50	22	20	円形	0.089	34.159
245	8	LR・LS50	30	22	楕円形	0.113	34.172
251	7	LN49	20	20	円形	0.26	33.998
252	7	LN49	24	20	楕円形	0.105	34.161
253	7	LN49	24	18	円形	0.124	34.157
254	7	LN50	22	22	円形	0.169	34.089
255	7	LN50	20	18	円形	0.104	34.145
256	8	LT51・52	20	18	円形	0.207	34.043
257	8	LT51	28	26	円形	0.066	34.134
258	8	LT51	18	16	円形	0.06	34.131
259	8	LT51	30	22	不整円形	0.149	34.032
272	10	ME56	22	18	円形	0.118	33.54
275	10	MF53	32	24	楕円形	0.181	33.468
279	10	MF53	16	16	円形	0.16	33.597
281	10	ME53	20	20	円形	0.16	33.553
282	10	ME52	18	16	円形	0.157	33.586
283	10	ME53	18	12	円形	0.155	33.58
284	10	ME53	24	22	円形	0.274	33.459
285	10	ME53	14	14	円形	0.171	33.56
286	10	ME53	24	20	楕円形	0.146	33.594
296	10	MD53	14	10	円形	0.075	33.88
299	10	MD53	24	18	楕円形	0.096	33.911
302	10	MD53	18	16	楕円形	0.168	33.842
303	10	MD52	14	12	円形	0.187	33.632
304	10	MD52	26	26	円形	0.066	33.717
305	10	MD53	30	14	楕円形	0.078	33.9
306	10	MD52	18	16	円形	0.117	33.67
307	10	MD52	20	18	円形	0.12	33.662
343	7	LP50	26	18	楕円形	0.219	33.954
346	7	LP45	18	16	楕円形	0.163	34.164
350	7	LR47	26	26	円形	0.171	34.14
351	8	LT50・51	28	10	楕円形	0.164	34.028
352	9	MA51	32	30	不整円形	0.147	33.888
354	10	MD52	24	20	円形	0.182	33.604
360	8	LT50	24	22	楕円形	0.108	34.167
361	8	LT49	18	16	不整円形	0.203	34.074
363	8	MA49	30	20	不整楕円形	0.27	34.059
365	9	MA50	36	24	楕円形	0.121	34.024
366	9	MA50	44	40	不整円形	0.115	34.01

第12表 柱穴様ピット観察表(時期不明)(3)

番号	挿図番号	所在グリッド	長軸(cm)	短軸 (cm)	平面形	深さ(m)	底面標高(m)
367	9	MA50	24	12	円形	0.074	34.056
368	8	MA49・50	32	20	楕円形	0.147	34.051
369	9	MB50	56	34	楕円形	0.234	33.842
370	10	MD51	22	20	円形	0.195	33.544
371	10	MD51	10	10	円形	0.091	33.72
372	10	ME51	37	27	楕円形	0.15	33.62
377	10	ME52	20	20	円形	0.149	33.608
378	9	MB50	28	22	円形	0.188	33.899
379	9	MB50	22	22	円形	0.139	33.916
380	9	MB50	42	32	不整円形	0.127	33.935
382	10	MD51	20	20	楕円形	0.218	33.635
383	10	MD51	24	20	略円形	0.147	33.684
384	10	MD51	22	16	楕円形?	0.179	33.641
385	10	ME51	24	14	円形?	0.088	33.7
387	10	ME52	26	24	円形	0.196	33.572
388	10	MD52	24	10	円形	0.205	33.582
389	10	MD52	20	20	円形	0.174	33.636
390	10	MD52	20	20	円形	0.125	33.683
395	7	LR47	20	20	円形	0.219	34.056
399	10	MC53	26	22	不整円形	0.105	33.714
402	9	MC50	24	16	略円形	0.089	33.861
403	10	MD51	30	24	楕円形	0.099	33.718
404	10	MD52	34	30	不整楕円形	0.21	33.6
407	9	MC51	48	24	略円形	0.987	32.819
408	7	LQ47	24	16	楕円形	0.19	34.097
414	10	MC55	22	20	円形	0.166	33.672
420	7	LQ48	24	24	円形	0.109	34.127
422	7	LQ48	20	20	円形	0.253	34.078
423	7	LP50	26	22	楕円形	0.192	34.058
425	7	LP50	26	22	円形	0.176	34.056
426	7	LP50	26	18	楕円形	0.29	33.957
427	10	MC54	24	18	楕円形	0.178	33.704
428	10	MC54	20	18	円形	0.184	33.652
429	10	ME52	36	30	楕円形	0.2	33.58
431	9	MC50	20	16	略円形	0.112	33.837
433	7	LQ48	20	20	円形	0.08	34.205
451	7	LN50	24	16	楕円形	0.159	34.075
453	8	LQ51	26	22	円形	0.381	33.854
458	8	MA50	44	16	円形	0.26	33.985
459	8	LQ51	16	16	楕円形	0.095	34.144

第4章 理化学的分析

第1節 放射性炭素年代測定

株式会社パレオ・ラボ

はじめに

南秋田郡五城目町に位置する町村Ⅱ遺跡から出土した炭化材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料と方法

試料は、カマド状遺構SN01とSN04の燃焼部から出土した炭化材が各1点の、合計2点である。SN01出土の炭化材(PLD-33627)は最終形成年輪が残存しておらず部位不明だったが、SN04出土の炭化材(PLD-33628)は最終形成年輪が残存していた。遺構の時期は、どちらも中世～近世と推測されている。

測定試料の情報、調製データは第13表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第13表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-33627	遺構：SN01 層位：堆積土中 試料No. 1	種類：炭化材（マツ属複雑管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33628	遺構：SN04 層位：堆積土中 試料No. 2	種類：炭化材（スギ） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

結果

第14表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、暦年較正結果を、第47図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、

標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%である。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い (¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正には0xCal4.2 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、1σ 暦年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第14表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ ¹³ C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-33627 試料No. 1	-25.44±0.19	153±17	155±15	Post-bomb NH2 2013: 1678-1690 cal AD (9.4%) 1729-1765 cal AD (32.1%) 1772-1777 cal AD (3.3%) 1800-1810 cal AD (8.8%) 1926-1940 cal AD (13.3%) 1952-1953 cal AD (0.8%) 1953-1954 cal AD (0.5%)	Post-bomb NH2 2013: 1668-1695 cal AD (15.4%) 1726-1781 cal AD (41.6%) 1798-1814 cal AD (10.9%) 1836-1844 cal AD (1.6%) 1851-1868 cal AD (3.7%) 1872-1876 cal AD (0.6%) 1917-1947 cal AD (19.0%) 1948-1954 cal AD (2.6%)
PLD-33628 試料No. 2	-23.97±0.23	124±17	125±15	Post-bomb NH2 2013: 1685-1699 cal AD (10.0%) 1720-1732 cal AD (7.5%) 1808-1817 cal AD (6.6%) 1833-1879 cal AD (34.8%) 1915-1928 cal AD (8.9%) 1954-1954 cal AD (0.3%)	Post-bomb NH2 2013: 1682-1737 cal AD (27.4%) 1757-1761 cal AD (0.6%) 1804-1892 cal AD (52.7%) 1907-1936 cal AD (13.9%) 1952-1954 cal AD (0.8%)

考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち2σ 暦年代範囲 (確率95.4%) に着目して結果を整理する。

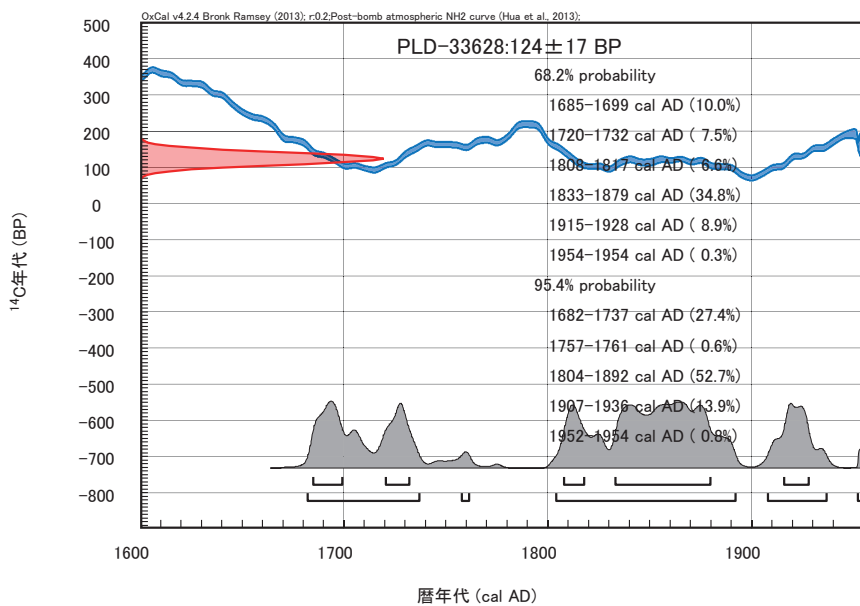
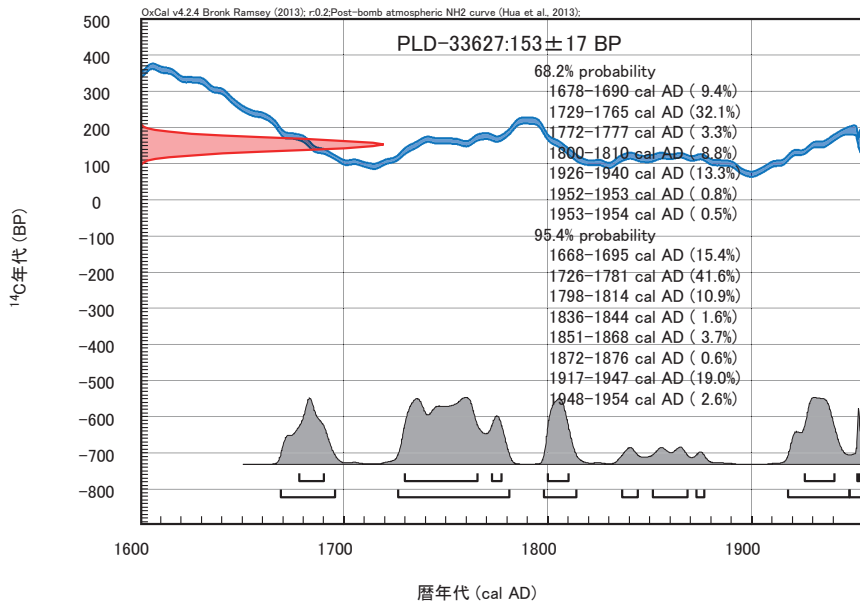
S N01出土の炭化材 (試料No. 1: PLD-33627) は、1668-1695 cal AD (15.4%)、1726-1781 cal AD (41.6%)、1798-1814 cal AD (10.9%)、1836-1844 cal AD (1.6%)、1851-1868 cal AD (3.7%)、1872-1876 cal AD (0.6%)、1917-1947 cal AD (19.0%)、1948-1954 cal AD (2.6%)であった。

S N04出土の炭化材 (試料No. 2: PLD-33628) は、1682-1737 cal AD (27.4%)、1757-1761 cal AD (0.6%)、1804-1892 cal AD (52.7%)、1907-1936 cal AD (13.9%)、1952-1954 cal AD (0.8%)であった。

どちらも17世紀後半～20世紀中頃の測定結果で、江戸時代前半～昭和時代に相当する。遺構は中世～近世と推定されていたが、年代測定の結果から近世以降の可能性が高いと考えられる。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
 Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.



第47図 暦年較正結果

第2節 黒曜石産地同定

株式会社パレオ・ラボ

はじめに

南秋田郡五城目町馬場目字町村に所在する町村Ⅱ遺跡から出土した縄文時代後期前葉の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

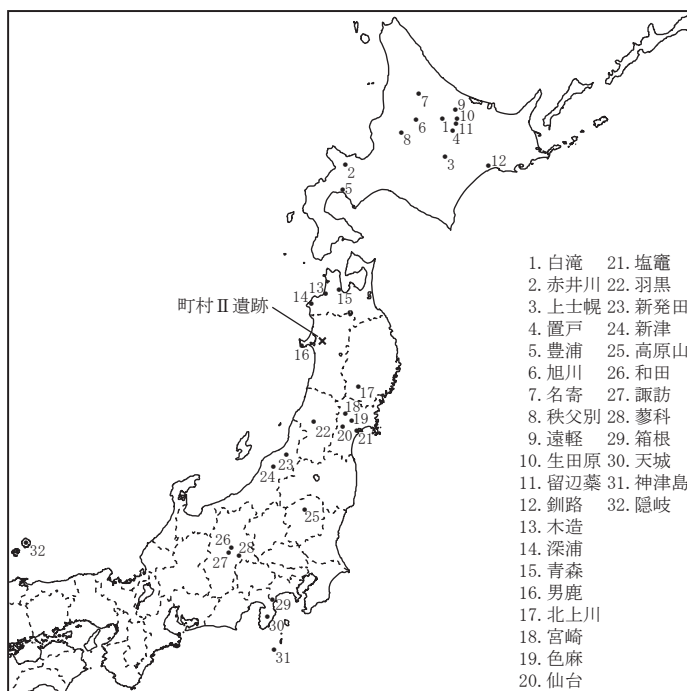
第15表 分析対象

分析No.	備考
1	MB52
2	MD52
3	1トレ上段
4	1トレ黒色土内 MD51

試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器4点である(第15表)。いずれも、土器や石器が集中する小規模な捨て場から出土しており、縄文時代後期前葉とみられている。試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。



第48図 黒曜石産地分布図(東日本)

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月, 1999など)。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps; count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) Rb分率=Rb強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 2) Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 3) Mn強度×100/Fe強度
- 4) log(Fe強度/K強度)

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み

合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log (Fe強度/K強度)の値が減少する (望月, 1999)。試料の測定面にはなるべく平滑な面を選び、測定前にメラミンフォーム製スポンジを用いて、表面の洗浄を行った。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第16表に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、第48図に各原石の採取地の分布図を示す。

分析結果

第17表に石器の測定値および算出した指標値を、第49図と第50図に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、3点が金ヶ崎群 (秋田県、男鹿エリア)の範囲にプロットされた。分析No. 4は合致する判別群がなく、産地不明であった。なお、分析No. 4は、表面が風化して荒れており、本来の組成を示していない可能性が高い。

第17表に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

おわりに

町村Ⅱ遺跡より出土した縄文時代後期前葉の黒曜石製石器4点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、1点は表面状態が悪く産地不明であったが、3点は男鹿エリア産と推定された。

第16表 東日本黒曜石産地の判別群

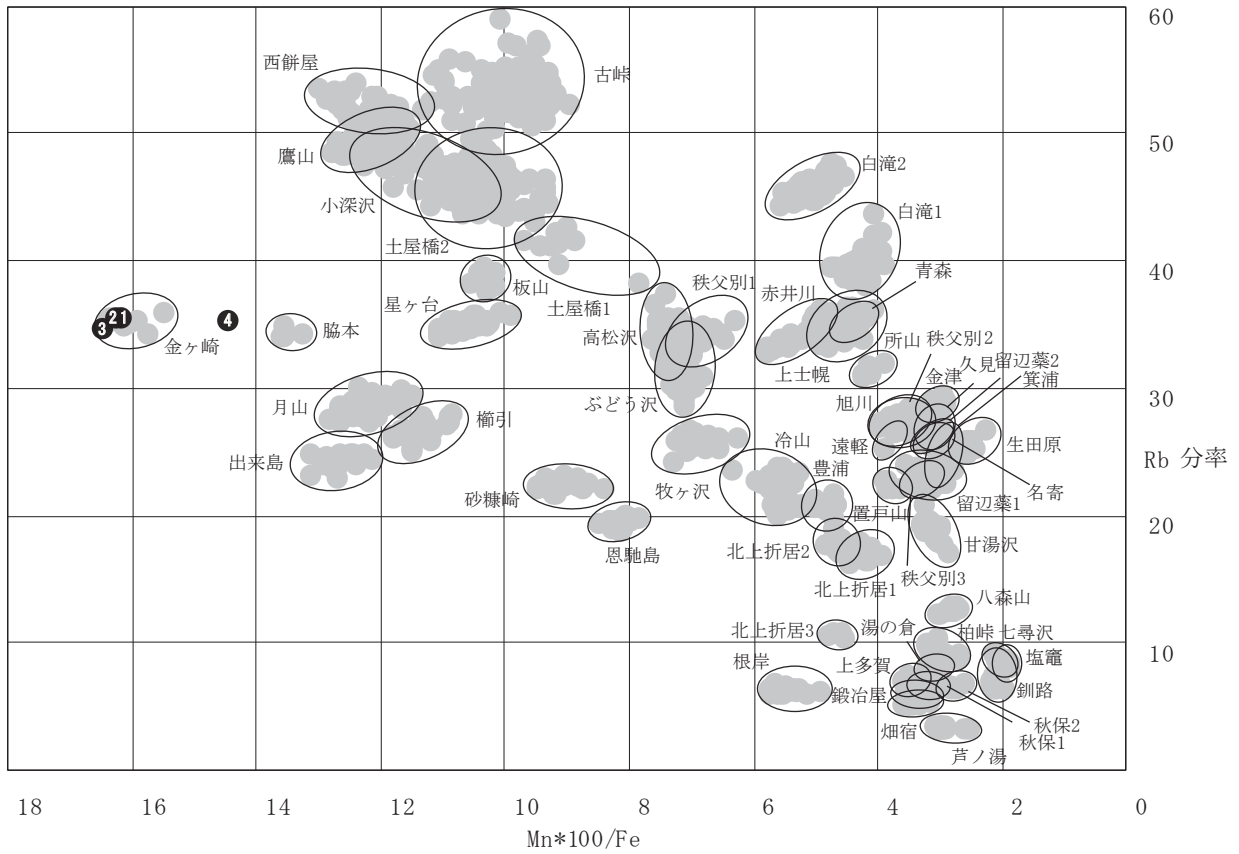
都道府県	エリア	判別群名	原石採取地	
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43)、八号沢露頭(15)	赤石山山頂、八号沢露頭、八号沢、黒曜の沢、幌加林道(36)
		白滝2	7の沢川支流(2)、IK露頭(10)、十勝石沢露頭直下河床(11)、アジサイの滝露頭(10)	
	赤井川	赤井川	曲川・土木川(24)	
	上士幌	上士幌	十勝三股(4)、タウンシュベツ川右岸(42)、タウンシュベツ川左岸(10)、十三ノ沢(32)	
	置戸	置戸山	置戸山(5)	
		所山	所山(5)	
	豊浦	豊浦	豊泉(10)	
	旭川	旭川	近文台(8)、雨紛台(2)	
	名寄	名寄	忠烈布川(19)	
	秩父別	秩父別1	中山(65)	
		秩父別2		
		秩父別3		
	遠軽	遠軽	社名淵川河床(2)	
	生田原	生田原	仁田布川河床(10)	
留辺蘂	留辺蘂1	ケシヨマップ川河床(9)		
	留辺蘂2			
釧路	釧路	釧路市宮スキー場(9)、阿寒川右岸(2)、阿寒川左岸(6)		
	木造	出来島	出来島海岸(15)、鶴ヶ坂(10)	
青森	深浦	八森山	岡崎浜(7)、八森山公園(8)	
	青森	青森	天田内川(6)	
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉(10)	
		脇本	脇本海岸(4)	
岩手	北上川	北上折居1	北上川(9)、真城(33)	
		北上折居2		
		北上折居3		
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉(40)	
		根岸	根岸(40)	
	仙台	秋保1	土蔵(18)	
		秋保2		
	塩竈	塩竈	塩竈(10)	
山形	羽黒	月山	月山荘前(24)、大越沢(10)	
		櫛引	たらのき代(19)	
新潟	新発田	板山	板山牧場(10)	
	新津	金津	金津(7)	
栃木	高原山	甘湯沢	甘湯沢(22)	
		七尋沢	七尋沢(3)、宮川(3)、枝持沢(3)	
長野	和田	西餅屋	芙蓉パーライト土砂集積場(30)	
		鷹山	鷹山(14)、東餅屋(54)	
		小深沢	小深沢(42)	
		土屋橋1	土屋橋西(10)	
		土屋橋2	新和田トンネル北(20)、土屋橋北西(58)、土屋橋西(1)	
		古峠	和田峠トンネル上(28)、古峠(38)、和田峠スキー場(28)	
		ブドウ沢	ブドウ沢(20)	
		牧ヶ沢	牧ヶ沢下(20)	
		高松沢	高松沢(19)	
		諏訪	星ヶ台	星ヶ台(35)、星ヶ塔(20)
	蓼科	冷山	冷山(20)、麦草峠(20)、麦草峠東(20)	
	神奈川	箱根	芦ノ湯	芦ノ湯(20)
畑宿			畑宿(51)	
鍛冶屋			鍛冶屋(20)	
上多賀			上多賀(20)	
静岡	天城	柏峠	柏峠(20)	
東京	神津島	恩馳島	恩馳島(27)	
		砂糠崎	砂糠崎(20)	
島根	隠岐	久見	久見パーライト中(6)、久見採掘現場(5)	
		箕浦	箕浦海岸(3)、加茂(4)、岸浜(3)	

第17表 測定値及び産地推定結果

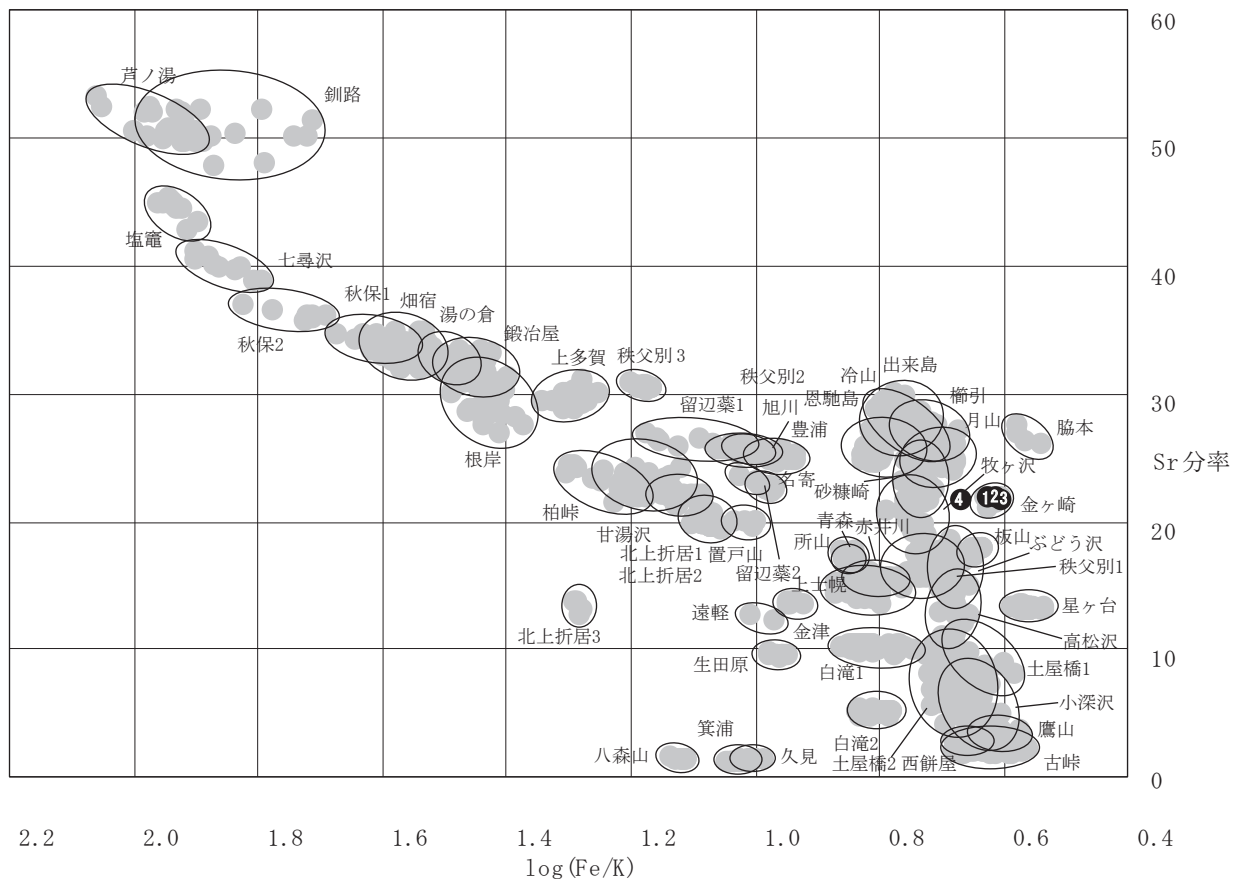
分析No.	K強度(cps)	Mn強度(cps)	Fe強度(cps)	Rb強度(cps)	Sr強度(cps)	Y強度(cps)	Zr強度(cps)	Rb分率	Mn*100 Fe	Sr分率	log Fe K	判別群	エリア	分析No.
1	273.1	187.7	1160.8	896.9	554.2	383.1	697.4	35.43	16.17	21.89	0.63	金ヶ崎	男鹿	1
2	308.2	205.8	1264.9	927.6	572.7	393.5	710.9	35.61	16.27	21.99	0.61	金ヶ崎	男鹿	2
3	263.3	175.4	1062.9	850.1	532.4	375.2	687.3	34.77	16.50	21.78	0.61	金ヶ崎	男鹿	3
4	323.7	218.4	1510.9	1037.8	637.7	439.2	818.1	35.39	14.46	21.74	0.67	?	不明	4

引用文献

望月明彦(1999) 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定. 大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡篇—」: 172-179, 大和市教育委員会.



第49図 黒曜石産地推定判別図(1)



第50図 黒曜石産地推定判別図(2)

第5章 総括

町村Ⅱ遺跡の発掘調査では縄文時代前期を主体とする遺構が検出され、主に縄文時代前期～晩期にかけての遺物が出土した。遺跡は農地造成により開削された形跡があり、調査範囲の大部分で耕作に伴う攪乱が見られたが、土器埋設遺構や陥し穴状遺構など、主に縄文時代の人々の活動の痕跡が残されていた。

以下に特徴的な遺構・遺物を取り上げ、本遺跡の性格について考察していく。

(1) 遺構について

①陥し穴状遺構（SKT05・09・12）

今回の調査では3基の陥し穴状遺構が検出された。LQ・LR50～51付近に3基集中しており、狩猟を行っていたことが想定される。なお、周辺より縄文時代前期の土器が出土していることから時期は縄文前期と推測される。

これらのことから縄文時代前期において本遺跡が狩猟場として機能していたことが考えられる。

②土器埋設遺構（SR08）

粗製の深鉢形土器が出土した。縄文時代後期前葉とみられる。

③カマド状遺構（SO01・02・03・04・11・13・14・35・36）

中世以降の遺構と考えられる。一般的にカマド状遺構は平坦部を掘り込み、焚き口部・燃焼部・煙道を設けている特徴を持つ。当遺跡のカマド状遺構は、調査区北部の窪地2か所で確認され、自然の窪地を利用し、環状にカマド状遺構が広がる独特の特徴を有している。

(2) 遺物について

①三脚石器

10点ほど出土している。県内では当遺跡の他に伊勢堂岱遺跡の184点、柏木岱Ⅱ遺跡の56点、藤株遺跡の46点、真壁地遺跡の46点、塚の下遺跡の25点、漆下遺跡の7点、萩ノ台Ⅱ遺跡の2点、家の下遺跡の2点、萩峠遺跡、萱刈沢Ⅰ遺跡、古館堤頭遺跡など（それぞれ1点）が出土地点として把握されている。点数では伊勢堂岱遺跡、柏木岱Ⅱ遺跡、藤株遺跡、真壁地遺跡が他の遺跡に比して圧倒的に多い傾向にある。三脚石器は県北の米代川流域の遺跡に多く出土する特徴を持つ。当遺跡は三脚石器が10点ほど出土しており、米代川流域よりも南に位置している中で比較的出土数が多いという特徴を有している。

三脚石器の用途については、利器としての実用品か非実用品かの両論があり、結論は得られていない。三脚石器を利器として考察したものには、「植物から繊維を採るのに用いた刃物」があり、非実用品と考察したものには「三脚という形態に意義をもつ呪術具」がある。伊勢堂岱遺跡では縄文時代中期末～後期初頭の共同墓域として使われたと考えられる土坑墓から出土しており、死者祭祀に伴い送られる道具に三脚石器が含まれている。柏木岱Ⅱ遺跡や真壁地遺跡の出土例では天然アスファルトの付着と一つの脚が欠損している事例があり、着柄の可能性が指摘されている。

②黒曜石製石器

当遺跡では4点ほど出土している。県内の黒曜石の産地は男鹿市の金ヶ崎・脇本・船越海岸であり、県内の主要な黒曜石の産地から石材としてもたらされたと考えられる。

第5章 総括

参考文献

- 秋田県教育委員会 『塚の下遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第61集 1979（昭和54）年
- 秋田県教育委員会 『萩峠遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第84集 1981（昭和56）年
- 秋田県教育委員会 『藤株遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第85集 1981（昭和56）年
- 秋田県教育委員会 『真壁地遺跡・蟻ノ台発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第102集 1983（昭和58）年
- 秋田県教育委員会 『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－餌釣遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第210集 1991（平成3）年
- 秋田県教育委員会 『萱刈沢Ⅰ遺跡・萱刈沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第231集 1993（平成5）年
- 秋田県教育委員会 『萩ノ台Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第236集 1993（平成5）年
- 秋田県教育委員会 『家の下遺跡（1）発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第256集 1995（平成7）年
- 秋田県教育委員会 『伊勢堂岱遺跡－県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』 秋田県文化財調査報告書第293集 1999（平成11）年
- 秋田県教育委員会 『柏木岱Ⅱ遺跡－高速交通関連道路整備事業県道琴丘上小阿仁線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第442集 2008（平成20）年
- 秋田県教育委員会 『漆下遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXⅢ－』 秋田県文化財調査報告書第464集 2011（平成23）年
- 秋田県教育委員会 『北檜岡中野遺跡－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』 秋田県文化財調査報告書第482集 2012（平成24）年
- 秋田県教育委員会 『船戸遺跡－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』 秋田県文化財調査報告書第490集 2014（平成26）年
- 秋田県教育委員会 『藤株遺跡（第2次）－一般国道7号鷹巣大館道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』 秋田県文化財調査報告書第494集 2014（平成26）年
- 秋田県教育委員会 『西板戸遺跡－雄物川上流河川改修事業（西板戸地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第501集 2016（平成28）年
- 秋田県教育委員会 『窪遺跡－雄物川上流河川改修事業（寺館大巻地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』 秋田県文化財調査報告書第501集 2016（平成28）年
- 秋田県教育委員会 『峰吉川中村遺跡－雄物川上流河川改修事業（中村芦沢地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第505集 2016（平成28）年
- 茅野嘉雄 「カマド状遺構の集成と今後の研究課題について」 『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』第13号 2008（平成20）年
- 小林克 「岳下遺跡検出の窠跡について」 『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第10号 1995（平成7）年
- 高橋忠彦 「米代川流域の三脚石器」 『よねしろ考古』第8号 よねしろ考古学研究会 1993（平成5）年
- 田村壮一 「陥し穴状遺構の形態と時期について」 『岩手県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅶ』 1987（昭和62）年



1 遺跡遠景(南→)



2 遺跡遠景



1 調査区北半部
表土除去後近景(西→)



2 調査区南半部
表土除去後近景(南東→)



3 調査区中央部(基本土層A
周辺)表土除去後近景(北→)



1 調査風景（北西→）



2 調査風景（北東→）



3 調査風景（南東→）



1 基本土層A (西→)



2 基本土層B (南東→)



3 基本土層C (北東→)



1 SB23完掘（北西→）



2 SR08確認状況（北→）



3 SR08土器埋設状況（東→）



1 S K T05確認状況 (南→)



2 S K T05土層断面 (南→)



3 S K T05完掘状況 (南→)



1 SKT09確認状況（東→）



2 SKT09土層断面（東→）



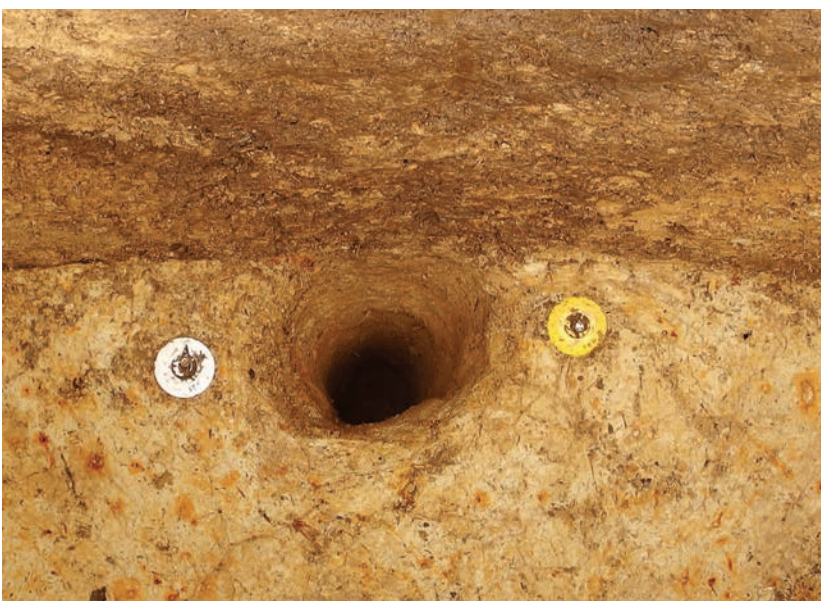
3 SKT09完掘状況（東→）



1 S K T12確認状況 (南西→)



2 S K T12土層断面 (南西→)



3 S K T12柱穴完掘状況
(南西→)



1 陥し穴状遺構全景(南→)
左からS K T 05・09・12



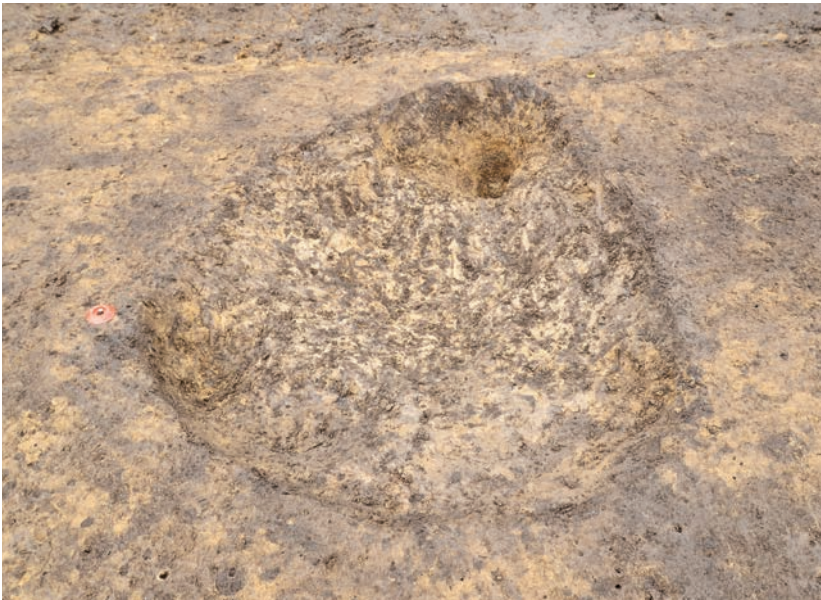
2 S K 17土層断面(南東→)



3 S K 17完掘状況(南東→)



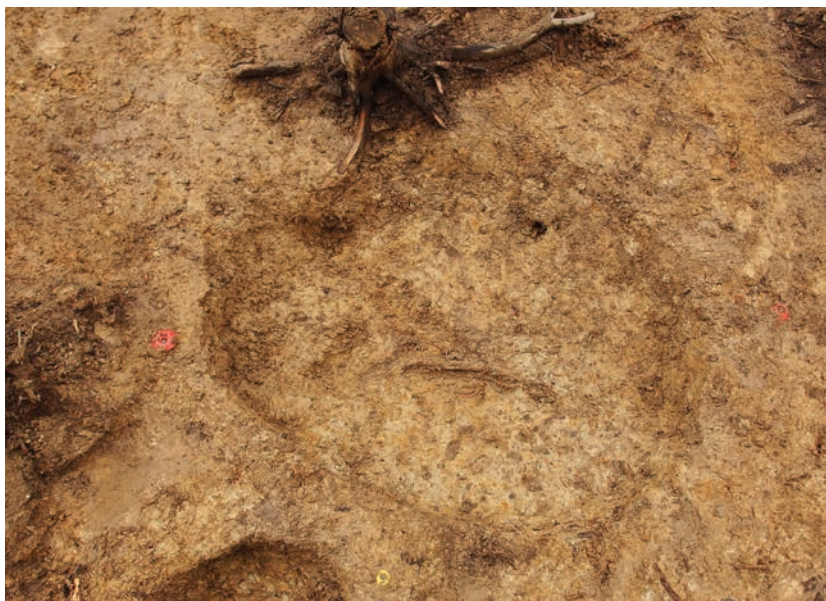
1 SK20土層断面（北→）



2 SK20完掘状況（北→）



3 SK21土層断面（南→）



1 S K21完掘 (南→)



2 S K25断面 (北東→)



3 縄文時代遺物集中区
(MB51) 調査状況 (南東→)



1 石槍（第29图16）出土状况



2 三脚石器（第40图80）
出土状况



3 土器出土状况
（第19图-9 图版22-19-9）



1 窪地1全景（南西→）



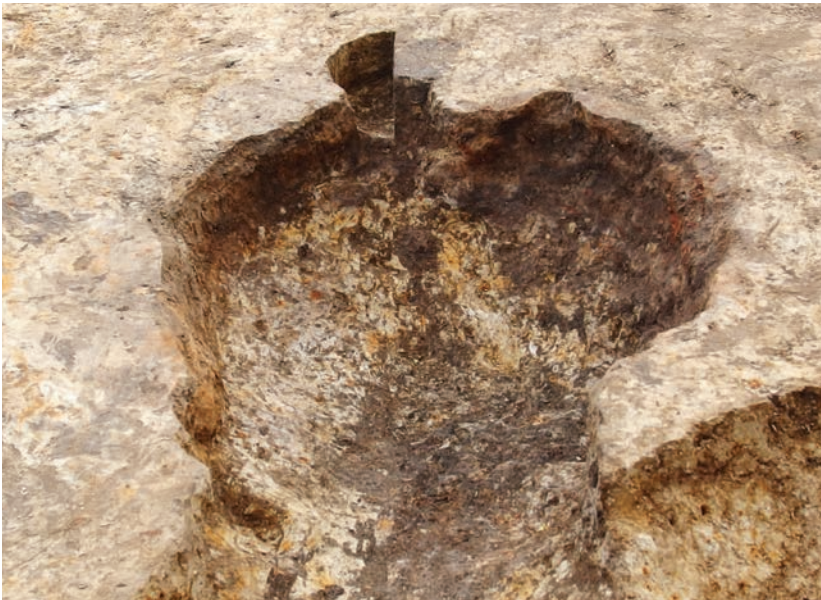
2 カマド状遺構（東→）



3 カマド状遺構（北西→）



1 S O01断面 (東→)



2 S O01完掘 (北東→)



3 S O02確認状況 (東→)



1 S O 02土層断面 (東→)



2 S O 02完掘状況 (北→)



3 S O 03確認状況 (南→)



1 S O 03土層断面 (東→)



2 S O 03完掘状況 (東→)



3 S O 04確認状況 (北→)



1 S O04土層断面（北→）



2 S O04完掘状況（西→）



3 S O11確認状況（北東→）



1 S O 11土層断面（東→）



2 S O 11完掘状況（南→）



3 S O 13確認状況（南→）



1 S O 13土層断面 (南→)



2 S O 14確認状況 (東→)



3 S O 14土層断面 (南東→)



1 調査終了状況 MD~MHライン (南東→)



2 調査終了状況 LO~LTライン (南西→)



遺構内出土縄文土器 1



遺構内出土縄文土器 2



遺構外出土縄文土器 1



遺構外出土縄文土器 2



遺構外出土繩文土器 3



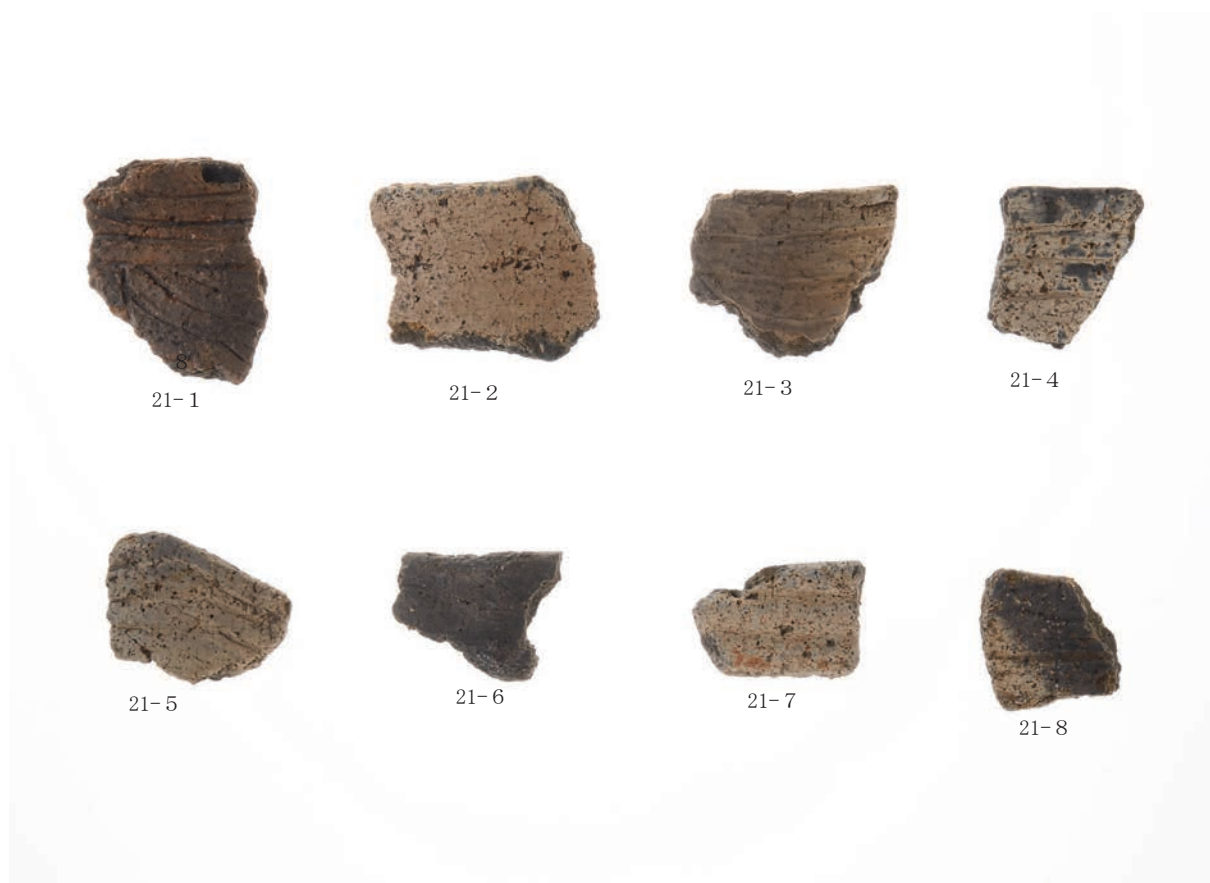
遺構外出土繩文土器 4



遺構外出土縄文土器5



遺構外出土縄文土器6



遺構外出土繩文土器 7



遺構外出土繩文土器 8



21-17



21-18



21-19



21-21



21-20



21-22



22-1

遺構外出土縄文土器9



22-2



22-3



22-4



22-5



22-6



22-7



22-8



22-9

遺構外出土縄文土器10



22-10



22-11



22-12



22-13



22-14



22-15

遺構外出土繩文土器 11



22-16



22-17



22-18



22-19



22-20



22-21



22-22



22-23

遺構外出土繩文土器 12



遺構外出土縄文土器 13



遺構外出土縄文土器 14



遺構外出土繩文土器 15



遺構外出土繩文土器 16



24-1



24-2



24-3



24-4



24-5



24-6



24-7



24-8

遺構外出土縄文土器17



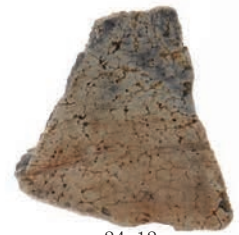
24-9



24-10



24-11



24-12



24-13



24-14



24-15

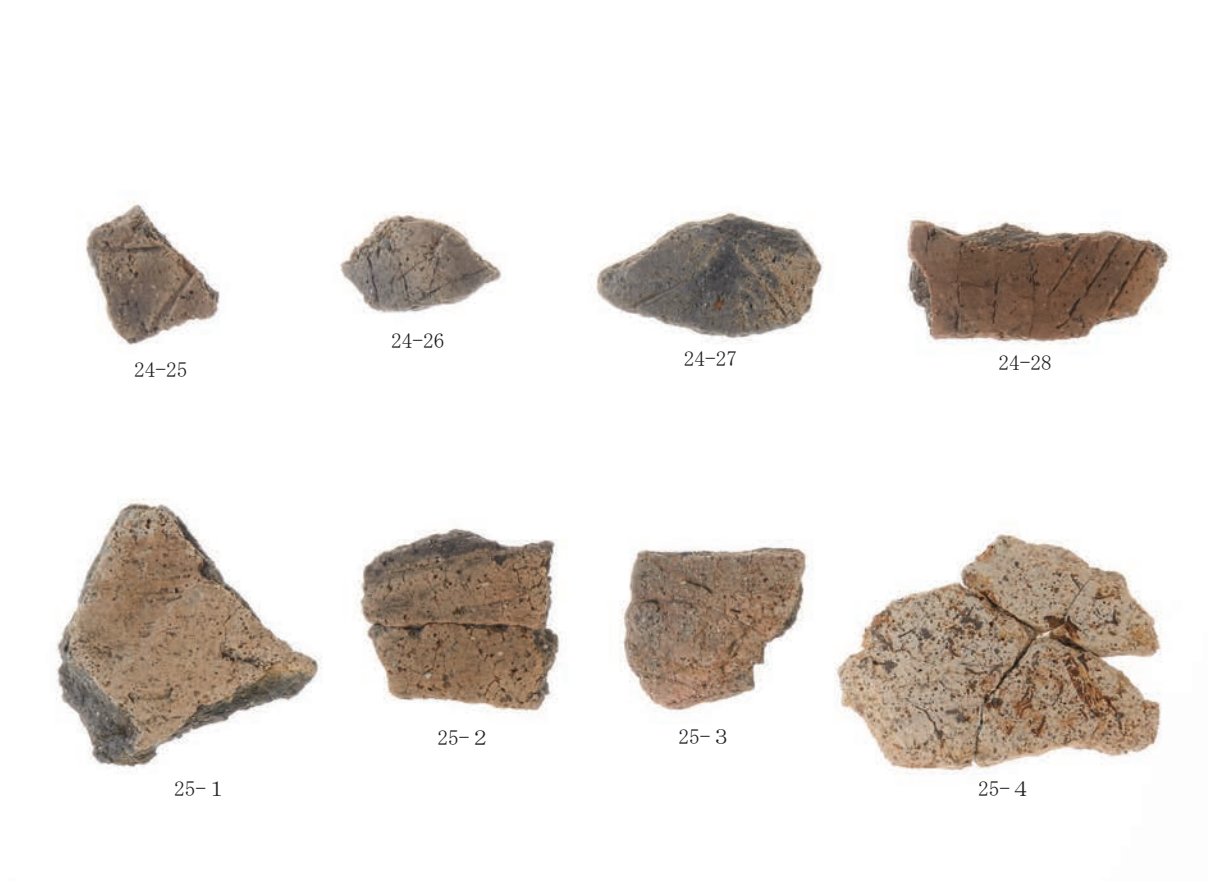


24-16

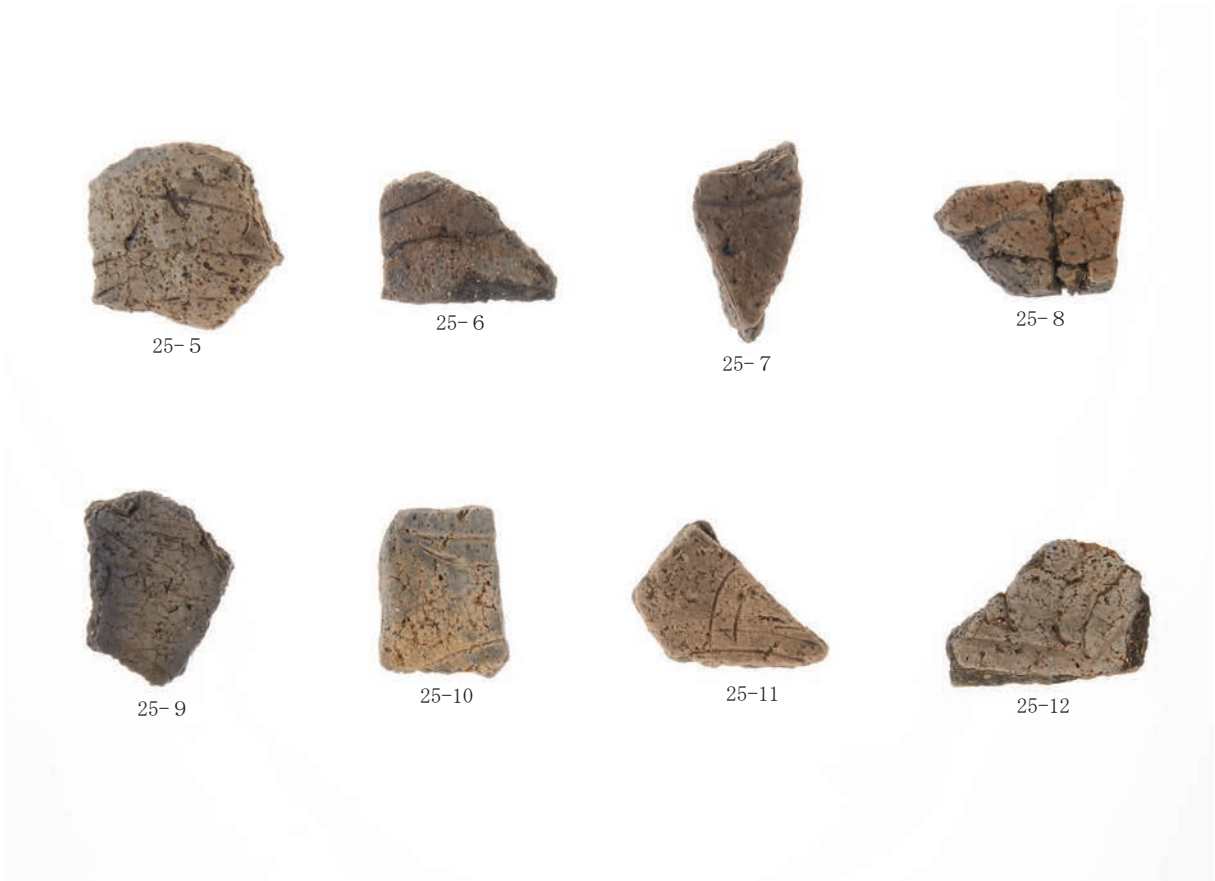
遺構外出土縄文土器18



遺構外出土繩文土器19



遺構外出土繩文土器20



遺構外出土縄文土器21



遺構外出土縄文土器22



25-21



25-22



25-23



25-24



25-25



25-26



25-27



25-28

遺構外出土繩文土器23



26-1



26-2



26-3



26-4



26-5



26-6



26-7



26-8

遺構外出土繩文土器24



遺構外出土縄文土器25



遺構外出土遺物26



遺構外出土繩文土器27



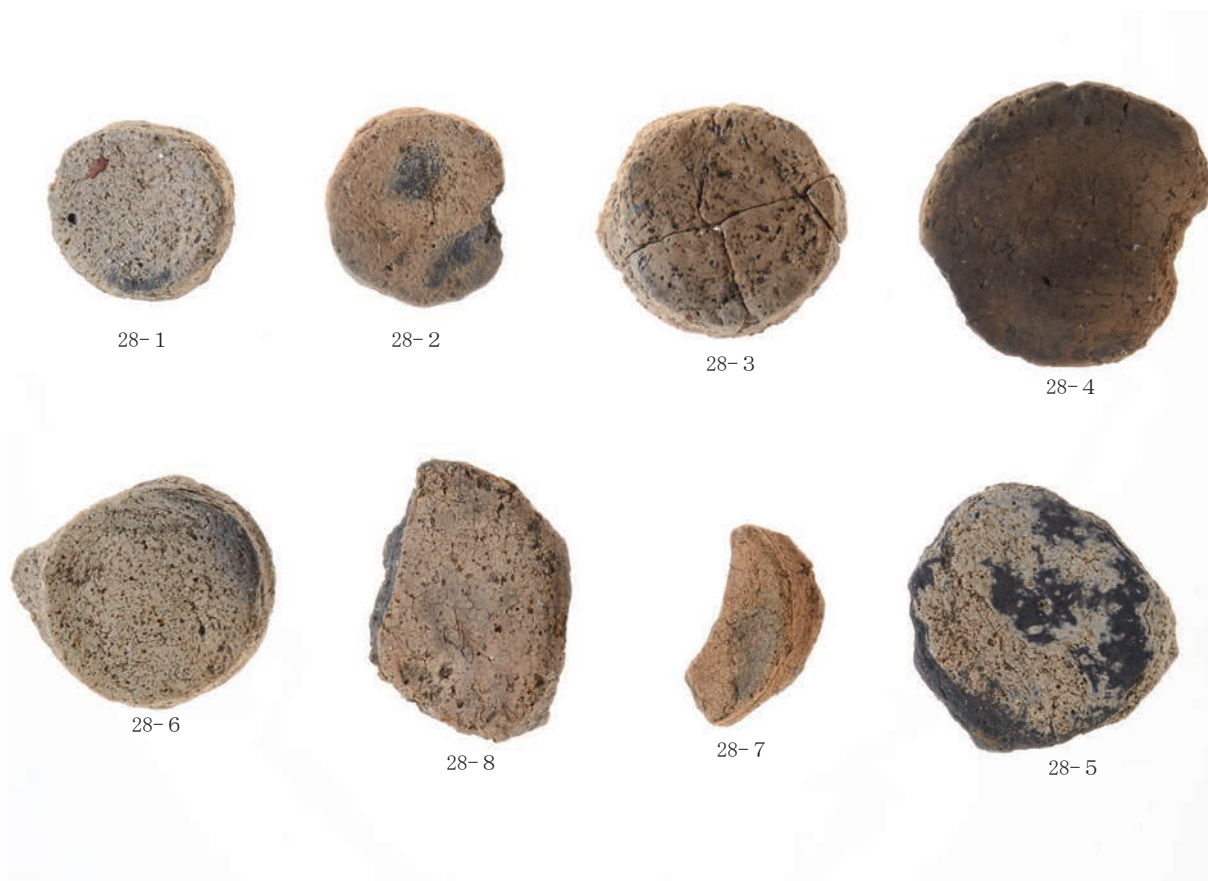
遺構外出土繩文土器28



遺構外出土縄文土器29



遺構外出土縄文土器30



遺構外出土縄文土器31



遺構外出土縄文土器32

図版 38 遺構外出土縄文土器 33・遺構外出土土製品 1



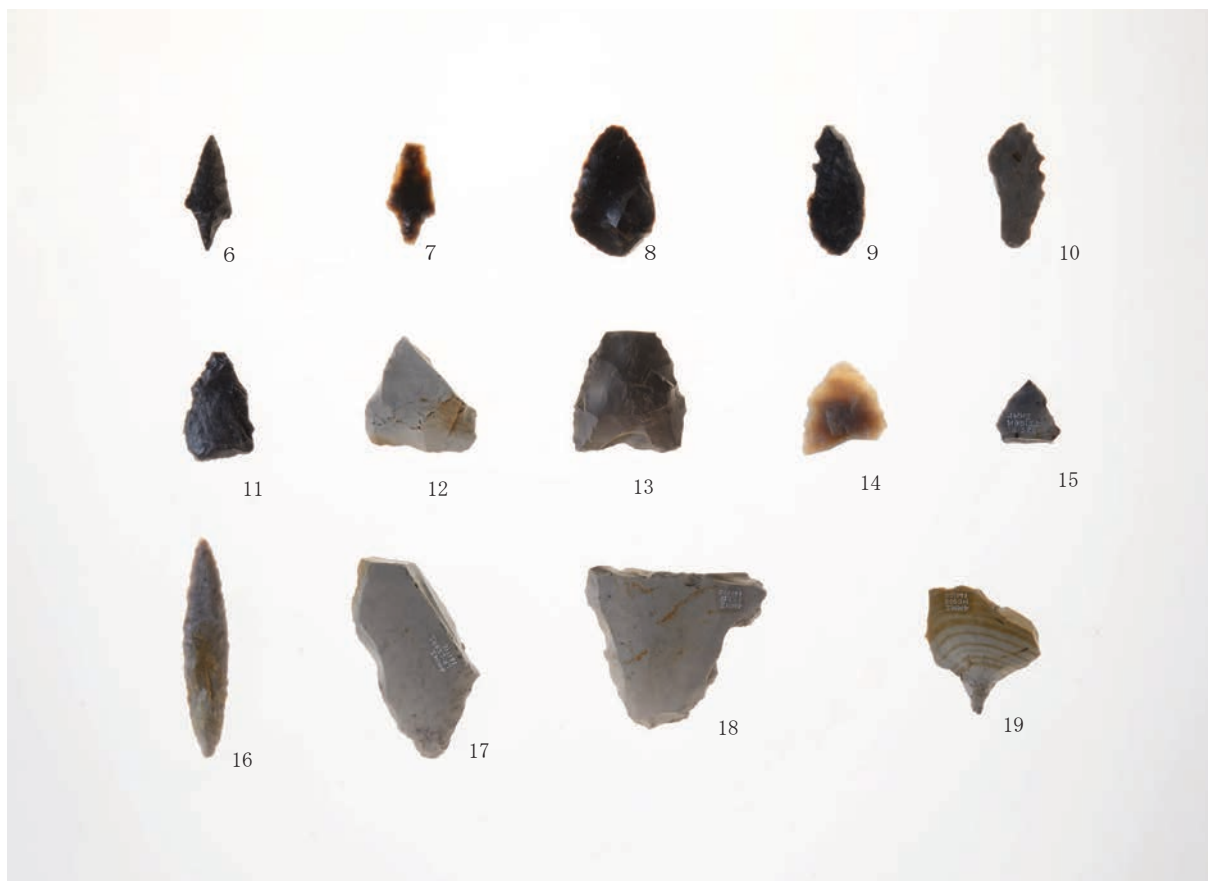
遺構外出土縄文土器33



遺構外出土土製品 1



遺構外出土石器 1 表



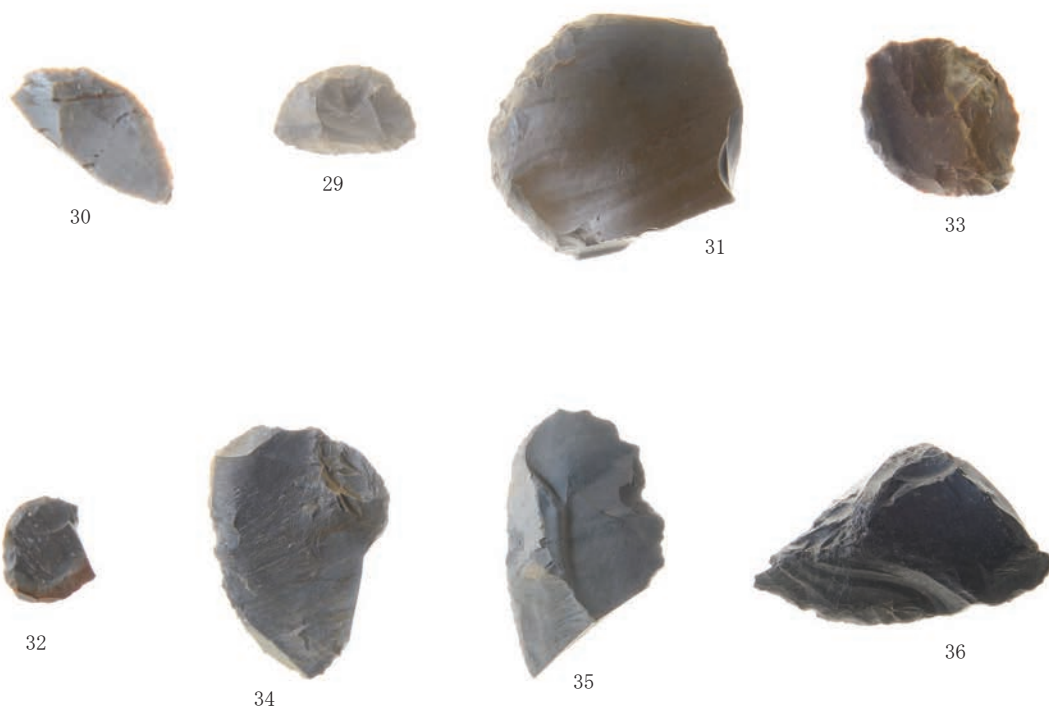
遺構外出土石器 1 裏



遺構外出土石器 2 表



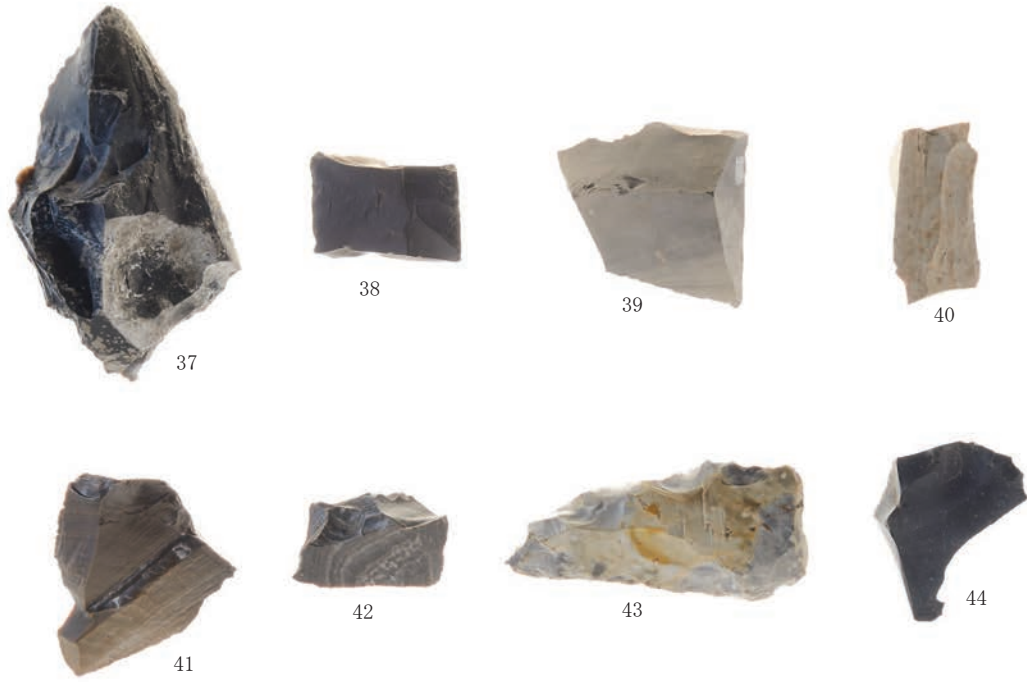
遺構外出土石器 2 裏



遺構外出土石器 3 表



遺構外出土石器 3 裏



遺構外出土石器 4 表



遺構外出土石器 4 裏



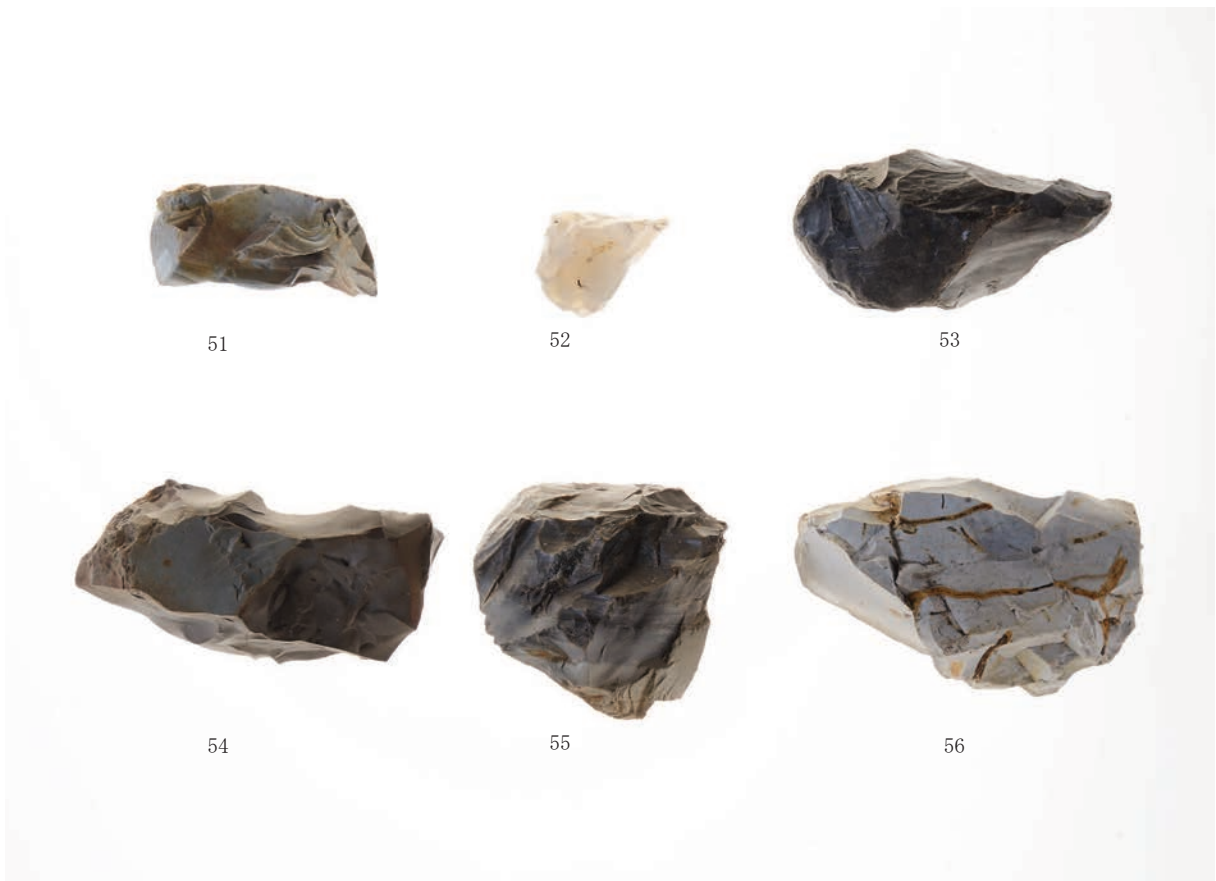
遺構外出土石器 5 表



遺構外出土石器 5 裏



遺構外出土石器 6 表



遺構外出土石器 6 裏



遺構内出土石器 SK20・21 SKP106・123



遺構外出土石器7



63



64



65

遺構外出土石器 8



66



67



68

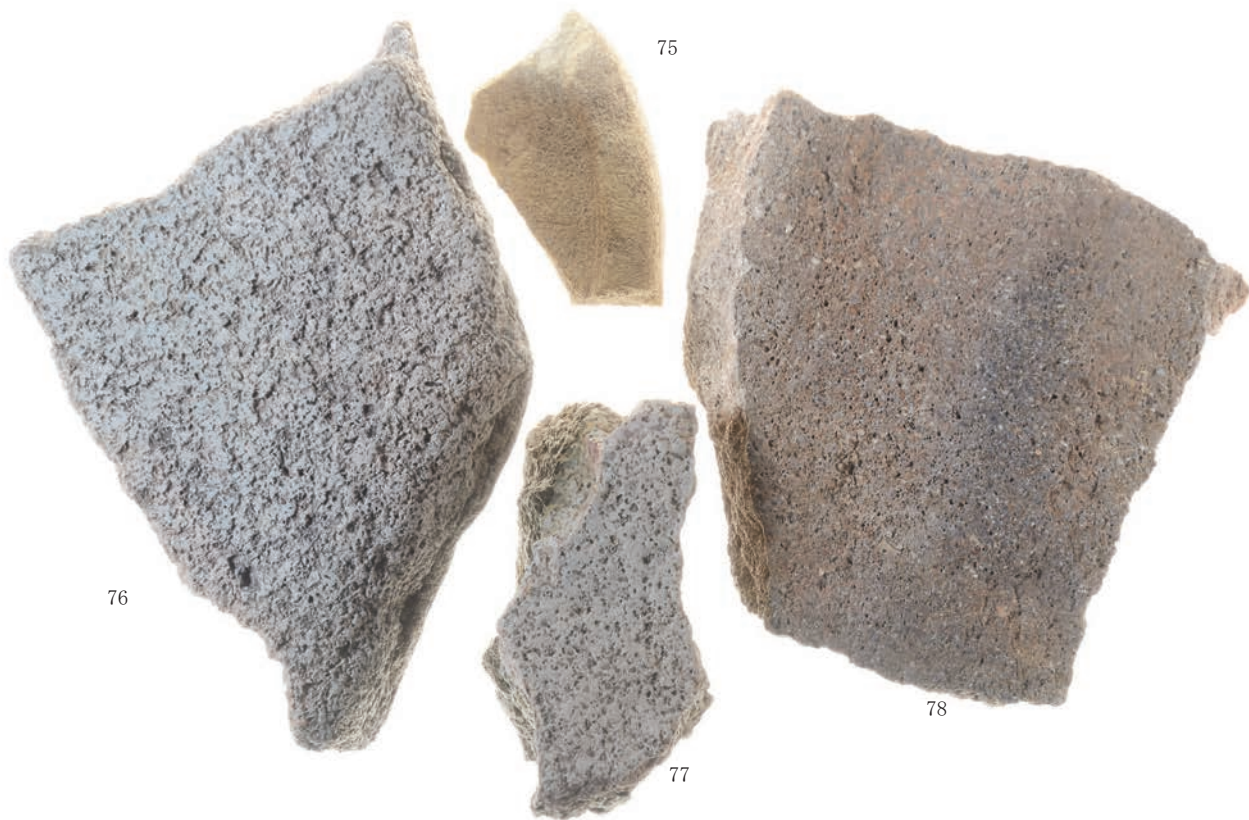


69

遺構外出土石器 9



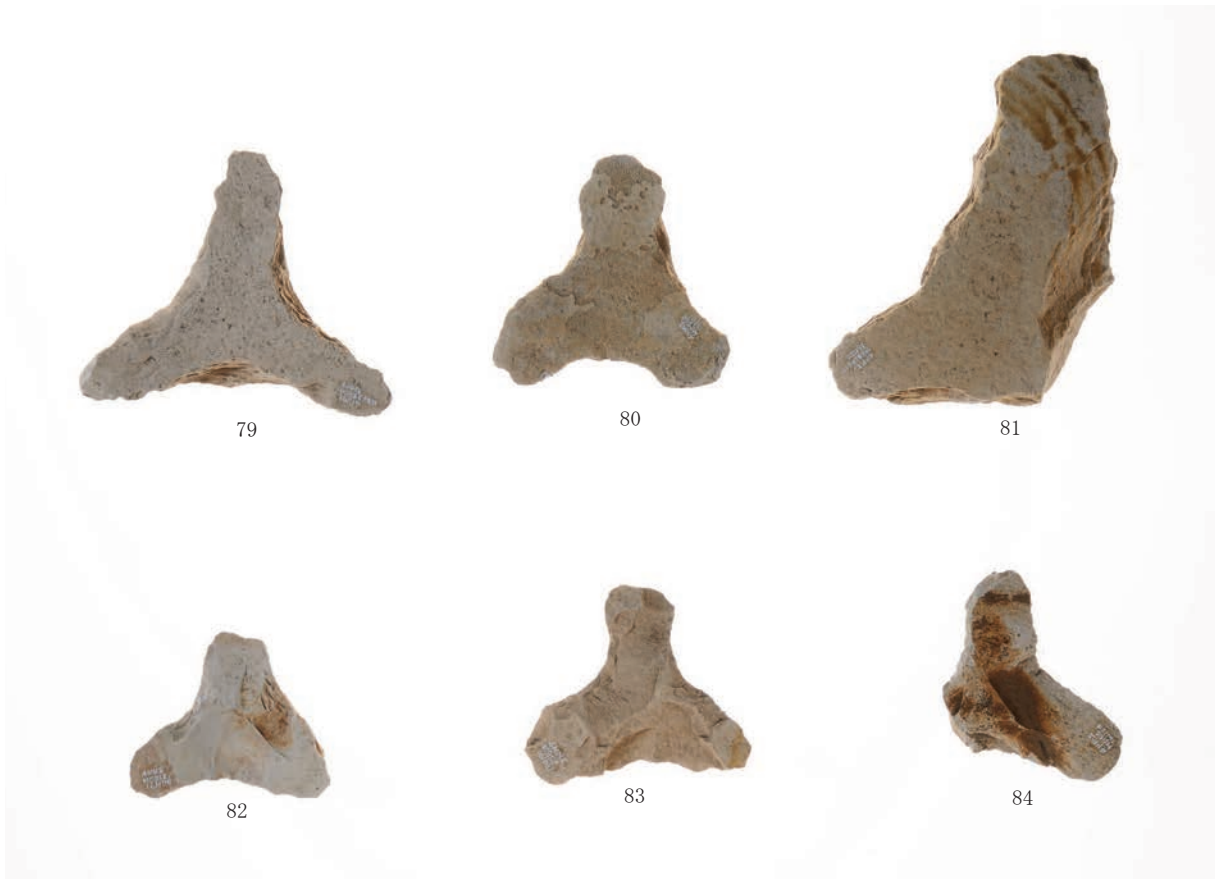
遺構外出土石器10



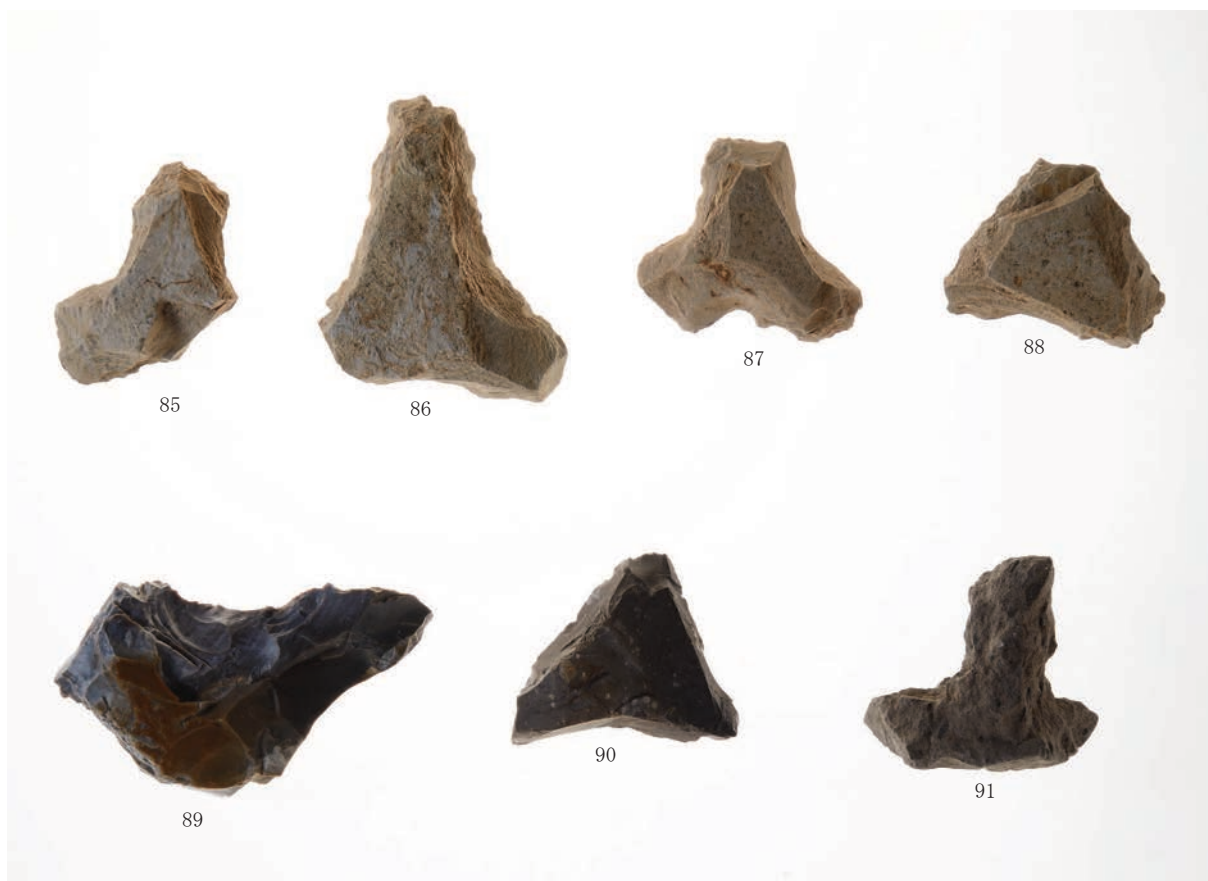
遺構外出土石器11



遺構外出土石器12表



遺構外出土石器12裏



遺構外出土石器13表



遺構外出土石器13裏

報 告 書 抄 録

ふりがな	まちむら2いせき							
書名	町村Ⅱ遺跡							
副書名	地方道路等整備事業（建設）主要地方道秋田八郎潟線（町村工区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第510集							
編著者名	乙戸 崇、利部 修							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋 20 番地 電話 (0187)69-3331							
発行機関	秋田県教育委員会							
所在地	〒010-8580 秋田県秋田市山王三丁目 1 番 1 号 電話 (018)860-5193							
発行年月日	西暦 2018 年 3 月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′ ″	° / ′ ″		m ²	
まちむら2いせき 町村Ⅱ遺跡	あきた けんみなみ 秋田県南 あきた ぐんご 秋田郡五 じょうめ まちぼ 城目町馬 ばめ あざまち 場目字町 むら ほか 村 134 外	05361	361-25-60	39° 91′ 46″	140° 15′ 66″	20160902 ～ 20161129	1,300m ²	地方道路等整備事業（建設）主要地方道秋田八郎潟線（町村工区）に係る埋蔵文化財事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
町村Ⅱ遺跡	狩猟場 散布地	縄文時代 中世以降 時期不明	掘立柱建物跡 柱列 土器埋設遺構 陥し穴状遺構 土坑 柱穴様ピット カマド状遺構 柱穴様ピット	3棟 4条 1基 3基 4基 19基 7基 136基	縄文土器 石器			
要約	<p>縄文時代及び中世以降の遺跡である。縄文時代の遺構は、掘立柱建物跡・柱列・土器埋設遺構・陥し穴状遺構・土坑・柱穴様ピットを検出し、陥し穴状遺構については縄文時代前期と推定され、当該時期において狩猟場として機能していたと考えられる。中世以降の遺構は、カマド状遺構があげられる。自然地形の窪地を利用し、同心円状に配置する点が特徴的である。出土遺物では三脚石器が特色としてあげられる。本県北部の米代川流域で多く出土する傾向がみられる。本遺跡はそれよりも比較的、南に位置している中で多く出土した。</p>							

秋田県文化財調査報告書第510集

町村Ⅱ遺跡

—地方道路等整備事業（建設）主要地方道秋田八郎潟線
（町村工区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷・発行 平成30年3月
編 集 秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802 大仙市払田字牛嶋20番地
電話 (0187)69-3331 FAX (0187)69-3330
発 行 秋田県教育委員会
〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号
電話 (018)860-5193

